

令和5(2023)年度

市立函館博物館 研究紀要

第34号

- 関根 達人・帰山 雅秀
アイヌの魚皮利用 - 市立函館博物館所蔵資料に基づいて -
- 1 -
- 小林 貢
〈資料紹介〉平成25年に受け入れた写真資料に関する聞き取り
調査 - 南茅部地域の戦前の大謀網漁（鮭漁）について -
- 42 -
- 佐藤 智雄
能登川コレクションの石器について
- 49 -
- 福田 裕二
〈研究ノート〉サイベ沢遺跡出土の円筒土器を考える（1）
- 105 -

アイヌの魚皮利用

— 市立函館博物館所蔵資料に基づいて —

関根達人・帰山雅秀

1. 研究の目的と問題の所在

1997年の「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」（「アイヌ文化振興法」）や2019年のアイヌ民族を先住民族と明記するとともに差別の禁止を定め、アイヌ文化の振興に向けた交付金制度等を盛り込んだ「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」（「アイヌ政策振興法」）、2020年の国立アイヌ民族博物館の開館や明治末期の北海道・樺太を舞台とする野田サトルのマンガ『ゴールデンカムイ』の記録的大ヒットなどの影響もあり、アイヌ民具に対する関心が高まっていないほど高まっている。

北太平洋の先住民のなかで、アムール川流域やサハリン・北海道の先住民に共通する特徴的な文化要素の一つに魚皮の利用がある。水産資源に恵まれたこの地域では、魚肉は重要な食料となり、魚皮は衣服などの材料として使われ、時に天幕など住まいの一部にもなった。魚はこの地域の北方先住民の衣食住を支えていたのである⁽¹⁾。

魚皮衣で最も有名なのが、アムール川流域のナナイ（中国名：赫哲＝ホジェン）である。彼らは丈夫なサケ・マス（*Oncorhynchus* spp.）の皮は労働着に、薄く白いコイ（*Cyprinus carpio*）の皮は装飾を付けて晴れ着に使い、他にナマズ（*Silurus asotus*）やカワカマス（*Esox* spp.）などいろいろな川魚の皮を用いて衣服・帽子・靴・鞆などを製作した（大塚2002）。

この地域の魚皮文化は、先住民の言語に

も表れている。すなわちなナイと同じくアムール川流域に住むウリチの言葉には魚皮製の長上衣を指すウテスや魚皮製の女性用長上衣を指すアルミがある。またアムール川下流域からサハリン北部に住むニヴフも女性用魚皮製長上衣をウェスケルと呼び、サハリン中部の東海岸に暮らすウイルタの言語にも装飾のない女性用魚皮製長上衣を指すウェルテリや魚皮の衣服を着た人を指すワージャメルンネなどの言葉がある（タチャーナ・ローン2005）。

トナカイの民として知られるウイルタはサケ（*O. keta*）やカラフトマス（*O. gorbuscha*）の皮を使って夏の漁猟期に男性用のズボンやスグブメ・ウッタと呼ばれる夏用の靴を製作した（タチャーナ・ローン前掲）。また、間宮林蔵がウイルタの風俗について記した『北蝦夷図説』巻之三には魚皮を用いた鞆の図が載っており、シラカバと魚皮を用いてチュムと呼ばれる円錐形天幕を作成していたことも記録されている（間宮1855）。

中国や日本と異なり、衣服の素材となる絹や木綿・麻が生産・入手しにくいこの地域では、樹皮や草皮が布の原料となり、獣皮や魚皮が布の代わりに利用された。北海道アイヌは樹皮衣を製作するとともに、交易により和人から入手した木綿で衣服を縫製したのに対し、樺太アイヌは草皮衣とともに獣皮や魚皮を北海道アイヌに比べより多く利用した。北海道を南限とする魚皮衣は、ナナイにはじまり、それが周辺民族に及んだもので、皮鞆し技術は樺太・北海道

と下るほど粗くなるという（佐々木1995）。

アイヌ語で魚皮はチェヘカハ（樺太）やチェフカフ（北海道）と呼ばれる。チェフはチ（我ら）とエフ（食うもの）が合わさった言葉で、魚全般または、サケを指す。魚皮は煮たり焼いたりするほか、樺太アイヌはサケ皮を煮詰めてコケモモやアザラシから採った油を混ぜ冷やしてムシと呼ぶゼリー状の食べ物を、北海道アイヌはどんぐりを茹でてから魚皮・魚骨と一緒に一日煮て、鍋の中でついてコンニャク状になったものを雪の中で冷やし油を付けて食べたという（関根・菊池・手塚・北原編2022）。

アイヌが素材として利用した魚としては、サケ・マスのほか、イトウ（*Parahucho perryi*）とソコガンギエイ（*Bathyraja bergi*）が知られている。魚皮は器物の素材以外にも煮てすりつぶし膠として用いられた。

樺太ではサケ・マスは衣服・靴・小物入れ・敷物から太鼓や弦楽器の胴皮や鞆の皮袋まで様々な器物に使われており、イトウの皮を使ったカヤハ（魚皮衣）⁽²⁾ やキロと呼ばれる靴、ソコガンギエイの皮を用いた鹿笛などの民具が知られている（山本1970、北海道開拓記念館1972、樺太アイヌ協会編2002など）。

一方、北海道内で収集された魚皮を用いたアイヌ民具は靴が圧倒的に多い。アイヌの魚皮衣は国立民族学博物館、東京国立博物館、北海道大学農学部附属植物園・博物館、釧路市立博物館など国内の博物館にも所蔵されているが、管見では収集地は全て樺太で、復元製作されたものを除けば北海道内の収集品は確認されていない。樺太アイヌに比べ本州から木綿や麻布が入手しやすかった北海道アイヌは、早くから魚皮衣の製作を止めてしまったため現存していない可能性が高い。

魚皮を用いたアイヌ民具の素材（魚種）

や製作技法に関する研究は、樺太アイヌの魚皮衣以外ほとんど行われていない⁽³⁾。

北海道内ではアイヌ文化振興の一環として近年各地で、魚皮製の靴や鞆の製作体験が行われているが、使われているのはいずれもサケである⁽⁴⁾。またアイヌ民具の魚皮製靴が十分検討されていないため、現在行われている製法がどの程度伝統に則っているか判然としない⁽⁵⁾。さらに近年はミュージアムグッズとしてサケ皮製のストラップなどが販売されている。こうした活動はアイヌ文化の振興・理解促進を図る上でたいへん有効ではあるが、一方で、アイヌの魚皮文化は「サケ皮製靴」であるといったようにステレオタイプ化する危険性もはらんでいる。

関根は、2010年から科研「中近世北方交易と蝦夷地の内国化に関する研究」に関連し、サハリン州立郷土誌博物館やサハリン国立総合大学との研究協力協定のもと、サハリン出土の日本製品の調査・研究を行ってきた。2017年からは科研「サハリンアイヌの総合的研究」（研究代表者：中村和之）に基づき、サハリンで樺太アイヌの資料調査を行ってきた。2020年以降、新型コロナウイルス感染症の流行やウクライナ戦争によりこれまで続けてきたサハリンでの資料調査が中断され、調査対象を日本国内に残る樺太アイヌ資料に変更せざるを得ない状況が生まれた。そうしたなか検討をはじめたのが、函館市北方民族資料館で展示保管している市立函館博物館所蔵児玉コレクションと馬場コレクションであった。

調査の過程で樺太アイヌの刀掛帯の裏地にも魚皮が多く使われているとの新たな知見が得られた。また魚皮靴や刀掛帯に使われている魚皮にもいくつかの種類があることに気がついた。そこでサケ・マスに詳しい帰山雅秀に協力を求めた。

本稿は、函館市北方民族資料館のアイヌ

民具を対象として、使われた魚の種類と製作法の解明を通して、樺太アイヌと北海道アイヌの魚皮利用の実態について論じる。

2. 資料対象と調査方法

調査したのは函館市北方民族資料館にあるアイヌ民具のうち、魚皮が使われている18資料であり、重要有形民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」に指定されている馬場コレクション10点（市立函館博物館1978）や、児玉コレクション2点（市立函館博物館1987）を含む（表1）。

種類別では魚皮製長靴（チェプタンネケリ）2点、魚皮製靴（チェプケリ）5点、刀掛帯（エムシアッ）5点、子供用太刀（ボンエムシ）用刀掛帯（エムシアッ）5点、男性用帽子（イカムハハカ）1点となる。

このうち収集地がわかるのは、開拓使により北海道胆振で収集された魚皮製靴（資料番号700125）、馬場脩により旧樺太東海岸多来加（現プロムイスロヴォーエ）で収集された男性用帽子（701289）、旧樺太西海岸多蘭泊（現カリーニノ）で収集された刀掛帯（701325・701327）と子供用太刀用刀掛帯（701790・701791・701793・701795・701796）、同じく西海岸登富津（現クラスノヤルスカヤ）収集の刀掛帯（701328・701329）の11点である。

調査は始めに写真撮影を行い、写真に魚皮の継ぎ目や法量、使われている部位などの情報を書き込んだ。その際、立体的な形状を保っていた魚皮製長靴2点（700122・700124）と魚皮製靴2点（700126・K-H13-0434）については、Agisoft Metashapeにより3Dモデルを作成した。

次いで鱗から使われている魚の種類や年齢を特定するため、既に資料から脱落していた鱗を回収するとともに、市立函館博物館の学芸員立ち会いのもと、重要有形民俗文化財以外の資料から、資料を損なわない

よう慎重に鱗の採取を行った。

採取した鱗は鱗上下層の表面に付着した粘液や不純物を水で慎重に洗浄し、スライドガラス上にAquatexを滴下しカバーガラスで封入し永久プレパラート標本とした。

鱗は顕微鏡画像（対物レンズx2/x4）をビデオカメラARTCOM-300MI-WOM（ARTRAY社製）でコンピューターに取り込み、耳石鱗計測ソフトウェアARP/W+RI（RATOC社）を用いて、鱗長、鱗幅、隆起線数等を計測した。

3. 資料の概要

ここでは調査した18点の資料について資料毎に魚皮の使われ方を中心に概要を述べる。なお、鱭の部位名称については図1を参照されたい。

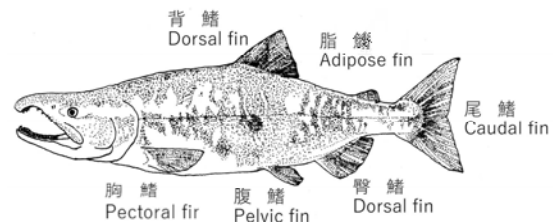


図1 サケの鱭の部位名称（作図：帰山雅秀）

【700122 魚皮製長靴】（図版1～3）

靴底と履き口のみが鹿皮で、それ以外は全て魚（オシヨロコマ）の皮でできている。左右とも4枚（4匹分）の鱭が付いたままの魚皮が鱭のある面を外側にして使われており、作り方は全く同じである。胴部側面には二枚に下ろした魚皮が頭側を下にして使われている（魚皮A左右）。前面の甲部から胴部の3分の2位までは、腹側を開いた魚皮が頭側を上にして使われており、背鱭を除去した際に生じた穴は縫い合わされているが、甲部には脂鱭が残っている（魚皮B）。胴部後側にも腹側を開き、背鱭を除去し縫い合わされた魚皮が頭側を上にし

表1 魚皮製品一覧

資料番号	資料名	収集年代	収集者	収集地	寸法 (cm)	形態	材質	備考
700122	魚皮製長靴 チェブタン ネケリ			北海道	L23.5 W9.5 H30.0	一足 長靴型 破損 鹿皮一部利用	魚皮 鹿皮	タグ「鮭皮沓 Keri No.3」 内部に1973年4月の新聞入 下部海獣皮（廃棄カード）
700123	魚皮製靴 チェブケリ			北海道	L33.0 W16.2	一足 短靴型 破損	魚皮	タグ「鮭革沓 No.2」
700124	魚皮製長靴 チェブタン ネケリ			北海道	L32.5 W23.0	一足 長靴型 乾燥顕著 ヒモで結束	魚皮	タグ「鮭皮沓 Keri No.4」 旧北洋資料館貸出展示
700125	魚皮製靴 チェブケリ	～1881年	開拓使東京	北海道 胆振	L39.0 W18.0	一足 短靴型	魚皮	タグ「鮭革沓(ケリ) T No.43」(引継 043) 工字ラベル「被服類 第3参考」
700126	魚皮製靴 チェブケリ	～1958年		北海道	L21.0 W11.5 H11.0	一足 短靴型	魚皮	赤テブラ「76」(購入76) 土俗資料備品供用簿No.76
701289	男性用帽子 イカムハハ カ	1930～1940 年代	馬場脩	樺太 東海岸 多未加	L55.0 W37.0	紺木綿地に綿入れキ ルティング加工 頭頂 部に釈迦結びの房付 (裏面に魚皮)	木綿 魚皮	注記「671」 1959年5月6日国重要有形民俗文化財 「アイヌの生活用具コレクション」 指定(第22号)663(旧671)
701325	刀掛帯 エムシアッ	1930～1940 年代	馬場脩	樺太 西海岸 多蘭泊	L72.0 W13.5	表木綿地 裏魚皮 縁 取り絹 造りはアイヌ 系だが文様はウイ ルタカニウフ	木綿 魚皮 絹	1959年5月6日国重要有形民俗文化財 「アイヌの生活用具コレクション」 指定(第22号)480(旧486) 2016.05.27国立民族学博物館佐々木 史郎教授鑑定 織物：木綿、羊毛？ 縫製糸：木綿 刺繍糸：絹 製織技 法：平織 染色技法：型染(糊防 染) 刺繍技法：切り伏せ刺繍、線 状刺繍(かがり繡) (「アイヌ・北 方民族テキスタイルデータベー ス」)
701327	刀掛帯 エムシアッ	1930～1940 年代	馬場脩	樺太 西海岸 多蘭泊	L74.5 W12.4 ～3.4	縦織	樹皮 魚皮	1959年5月6日国重要有形民俗文化財 「アイヌの生活用具コレクション」 指定(第22号)482(旧488)
701328	刀掛帯 エムシアッ	1930～1940 年代	馬場脩	樺太 西海岸 登富津	L76.5 W15.2 ～6.3	編物	樹皮 魚皮	1959年5月6日国重要有形民俗文化財 「アイヌの生活用具コレクション」 指定(第22号)483(旧489)
701329	刀掛帯 エムシアッ	1930～1940 年代	馬場脩	樺太 西海岸 登富津	L72.0 W12.5 ～4.5	絹	樹皮 魚皮	1959年5月6日国重要有形民俗文化財 「アイヌの生活用具コレクション」 指定(第22号)484(旧490)
701790	子供用太刀 ポンエムシ	1930～1940 年代	馬場脩	樺太 西海岸 多蘭泊	L42.0 W4.0	子供用 木製鐺付 片 面に文様彫刻 木綿製 刀掛帯(裏面に魚皮)	木 木綿 魚皮	1959年5月6日国重要有形民俗文化財 「アイヌの生活用具コレクション」 指定(第22号)712(旧720)
701791	子供用太刀 ポンエムシ	1930～1940 年代	馬場脩	樺太 西海岸 多蘭泊	L44.0	子供用 片面に文様彫 刻 木綿製刀掛帯(裏 面に魚皮)	木 木綿 魚皮	1959年5月6日国重要有形民俗文化財 「アイヌの生活用具コレクション」 指定(第22号)713(旧721)
701793	子供用太刀 ポンエムシ	1930～1940 年代	馬場脩	樺太 西海岸 多蘭泊	L28.5	子供用 イノウ付 両 面に文様彫刻 樹皮製 刀掛帯(裏面に魚皮)	木 木綿 魚皮	注記「2」 妙「カラフト トウブツ」 1959年5月6日国重要有形民俗文化財 「アイヌの生活用具コレクション」 指定(第22号)715(旧723)
701795	子供用太刀 ポンエムシ	1930～1940 年代	馬場脩	樺太 西海岸 多蘭泊	L33.6	子供用 両面に文様彫 刻 樹皮製刀掛帯(裏 面に魚皮)	木 木綿 魚皮	1959年5月6日国重要有形民俗文化財 「アイヌの生活用具コレクション」 指定(第22号)717(旧725)
701796	子供用太刀 ポンエムシ	1930～1940 年代	馬場脩	樺太 西海岸 多蘭泊	L39.0	子供用 鐺付 木綿製 刀掛帯(裏面に魚皮)	木 木綿 魚皮	1959年5月6日国重要有形民俗文化財 「アイヌの生活用具コレクション」 指定(第22号)718(旧726)
K-H13- 0433	魚皮製靴 チェブケリ	1929～1970 年	児玉作左衛 門	北海道	L31.5 W14.4 H2.1	つぶれ、欠損	魚皮	
K-H13- 0434	魚皮製靴 チェブケリ	1929～1970 年	児玉作左衛 門	北海道	L29.2 W11.0 H9.3		魚皮	
H26- 0032	刀掛帯 エムシアッ	1944年以前?	北海道第二 師範学校 郷土研究 班?	北海道	L74.0 W12.0	北海道第二師範学校 旧蔵資料か 樹皮織に紺木綿製飾 り布(文様切伏紋織 子・刺繍・絹製縁取り・ 刺繍糸一部鞆皮使 用)(裏面に魚皮) 一部破損	樹皮 木綿 魚皮	「アイヌ・北方民族テキスタイル データベース」1994年長谷部一弘学 芸員が教育大から持ち込み 付箋「一切説明セサル様…」(破損) 2016.05.27国立民族学博物館佐々木 史郎教授鑑定(通し紐・蛾の繭・錆虫ビ ン除去) 織物：鞆皮、獣毛、木綿、 絹 縫製糸：鞆皮、木綿 刺繍糸： 鞆皮、木綿 製織技法：ヨコモじり 紋織、平織、縹子地ヨコ浮織 刺繍 技法：短冊刺繍、切り伏せ刺繍、線 状刺繍(鎖織) (「アイヌ・北方民 族テキスタイルデータベース」)

で使われている（魚皮C）。胴部前面上部には腹側を開き背鰭を除去する際に生じた穴を縫い合わせた魚皮が横向きに使われている（魚皮D）。

【700123 魚皮製靴】（図版4）

左右とも1匹分の魚（サケ）の皮が使われている。頭部と尾鰭を除去した後、腹側を開いた魚皮が、鱗のある面を外側にして使われており、靴底には背鰭が残る。履き口側が頭側で、正面真ん中で縫い合わせているが、甲部は魚皮の端をかがってはいるものの綴じ合わせず、開口している。

【700124 魚皮製長靴】（図版5～7）

履き口に鹿皮が使われているが、他は全て魚（サケ）の皮で作られている。前述の700122と異なり本資料は靴底にも背鰭を除去してできた穴を縫い合わせた魚皮（魚皮E）が使われているが、その他（魚皮A～D）の作りは全く同じである。

【700125 魚皮製靴】（図版8）

左右とも1匹分の魚（サケ）の皮が使われている。作り方は前述の700123と同じで、靴底には背鰭が残る。

【700126 魚皮製靴】（図版9～11）

左右とも1匹分の魚の皮が使われているが、魚種は同定できていない。頭と尾鰭を除去した後、腹側を開いた魚皮が鱗のある面を外側にして使われており、幅の広い頭側が履き口側にくるよう正面真ん中で縫い合わせ、尾側を折り返して甲部としている。なお右の靴は折り返した甲部に獣皮があげられている。鱗は粗く、鰭や鰭を取り除いた痕跡は全く見られないことから、サケ・マス以外の魚と考えられる。

【701289 男性用帽子】（図版12）

馬場脩により旧樺太東海岸多来加（現プロムィスロヴォーエ）で収集された資料である。内側の縁に沿って魚皮と思われるものが縫い付けられた状態でわずかに残存している。鱗は全くみられないことから体皮

でなく内臓膜の可能性もある。

【701325 刀掛帯】（図版13）

馬場脩により旧樺太西海岸多蘭泊（現カリニーノ）で収集された資料である。肩に掛ける肩部（エムシタラ）から下端の左右一対の装飾布（エムシプサ）まで、裏地前面に鱗を除去した魚皮が使われている。鱗の分析を行っておらず魚種は不明である。

【701327 刀掛帯】（図版14）

馬場脩により旧樺太西海岸多蘭泊（現カリニーノ）で収集された資料である。左右の装飾布（エムシプサ）の裏地に鱗が付いたままの魚皮が使われている。鱗の分析を行っていないため魚種は同定できていないが、サケに比べ鱗が小さいことから淡水魚の可能性はある。

【701328 刀掛帯】（図版15）

馬場脩により旧樺太登富津（現クラスノヤルスカヤ）で収集された資料である。刀通し部（エムシクッ）の裏地に鱗が付いたままの魚皮が使われている。鱗の分析を行っていないため魚種は同定できていないが、サケに比べ鱗が小さいことから淡水魚の可能性はある。

【701329 刀掛帯】（図版16）

馬場脩により旧樺太西海岸登富津（現クラスノヤルスカヤ）で収集された資料である。左右の装飾布（エムシプサ）の裏地に鱗が付いたままの魚皮が使われている。資料から剥落していた鱗を同定した結果、河川型サクラマス（ヤマメ（*O. masou*））と判明している。

【701790 子供用太刀掛帯】（図版17）

馬場脩により旧樺太西海岸多蘭泊（現カリニーノ）で収集された資料である。左右の装飾布（エムシプサ）の裏地に鱗が付いたままの魚皮が使われている。鱗の分析を行っていないため魚種は同定できていないが、サケに比べ鱗が小さいことから淡水魚の可能性はある。

【701791 子供用太刀掛帯】(図版18)

馬場脩により旧樺太西海岸多蘭泊(現カリーニノ)で収集された資料である。左右の装飾布(エムシプサ)の裏地に鱗が付いたままの魚皮が鱗のある面を内側にして使われている。鱗の分析を行っておらず魚種は不明である。

【701793 子供用太刀掛帯】(図版19)

馬場脩により旧樺太西海岸多蘭泊(現カリーニノ)で収集された資料である。左右の装飾布(エムシプサ)の裏地にわずかに鱗を残した状態の魚皮が鱗のある面を内側にして使われている。鱗の分析を行っておらず魚種は不明である。

【701795 子供用太刀掛帯】(図版20)

馬場脩により旧樺太西海岸多蘭泊(現カリーニノ)で収集された資料である。左右の装飾布(エムシプサ)の裏地に魚皮が鱗のある面を内側にして使われている。鱗の分析を行っておらず魚種は不明である。

【701796 子供用太刀掛帯】(図版21)

馬場脩により旧樺太西海岸多蘭泊(現カリーニノ)で収集された資料である。左右の装飾布(エムシプサ)の裏地にわずかに鱗を残した状態の魚皮が使われている。鱗の分析を行っていないため魚種は同定できていないが、サケに比べ鱗が小さいことから淡水魚の可能性はある。

【K-H13-0433 魚皮製靴】(図版22)

左右とも1匹分の魚(サケ)の皮が使われている。頭と尾鰭を除去した後、腹側を開き、鱗のある面を外側にして使われており、靴底には背鰭が残る。履き口側が頭側で、正面真ん中で縫い合わせているが、甲部は魚皮の端をかがってはいるものの綴じ合わせず、開口している。魚種・製作法とも前述の700123・700125と同じである。

【K-H13-0434 魚皮製靴】(図23~25)

左右とも1匹分の魚(サケ)の皮が使われている。頭と尾鰭を除去した後、腹側を

開き、鱗のある面を外側にして使われており、幅の広い頭側が履き口側にくるよう正面真ん中で縫い合わせ、尾側を折り返して甲部としている。魚種は異なるが、作り方は前述の700126と同じである。

【H26-0032 刀掛帯】(図26)

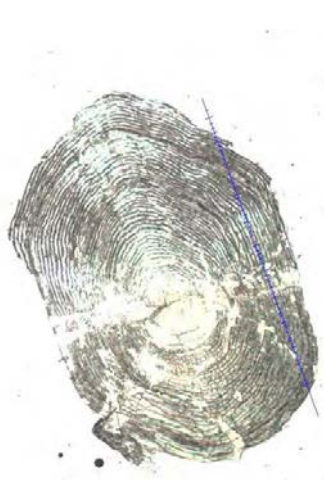
刀通し部(エムシクツ)の裏地に鱗が付いたままの魚(サケ)皮が、鱗のある面を内側にして使われている。

4. 使われている魚種

鱗の標本20点中15点の魚種が判明した(図2・表2)。内訳はサケ⁽⁶⁾10点、オシヨロコマ(*Salvelinus malma krascheninikovii*)⁽⁷⁾4点、サクラマス⁽⁸⁾1点である。残り5点は表皮あるいは鱗の断片のため魚種は同定できなかった。またサケの鱗10点のうち、1点は再生鱗であった。標本の年齢は、オシヨロコマは全て4歳魚、サケは4歳魚7点、3歳魚2点であった。

サケの鱗の総隆起線数、鱗径および初生鱗径は 58 ± 7 本、 $2618 \pm 493 \mu\text{m}$ および $144 \pm 68 \mu\text{m}$ とわが国における最近のサケ(Kaeriyama 2022)に比べると小型である。第1年目の隆起線数(24 ± 4 本)が北海道のそれ(30本)より少ないことから、かなり北方で漁獲されたサケである可能性が高い。また第1年目の鱗径比(41%)が日本のサケ(津軽石川45%; Kaeriyama 2022)より低いことから、初期成長速度が低く、日本より北に分布していた可能性が高い。また年齢ごとの隆起線間隔から、サケの成長速度に年齢差がみられないことが推定される。

オシヨロコマの鱗に海洋帯がみられないことから、これら4個体のオシヨロコマは河川型と考えられる。オシヨロコマの鱗形は「ひょうたん型」で、サケ属の円鱗と若干異なる。全て4歳魚で、総隆起線数、鱗径および初生鱗径は 47 ± 6 本、 1597 ± 167



1



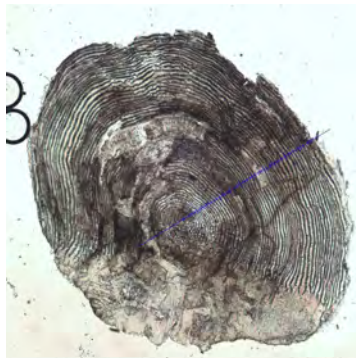
2



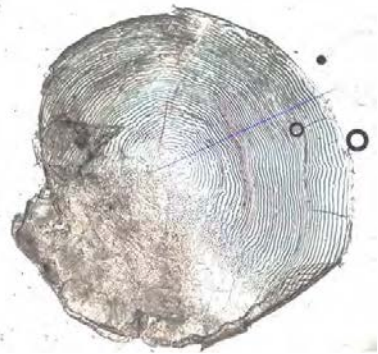
3



4



5



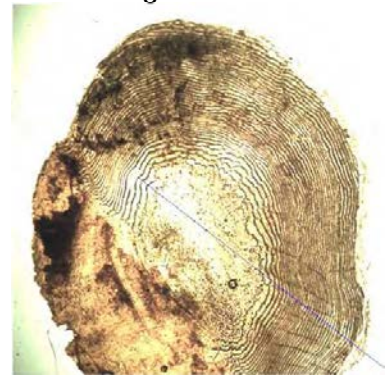
6



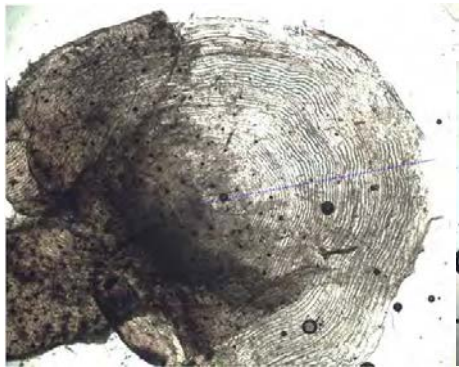
7



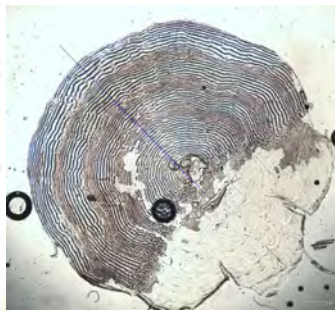
8



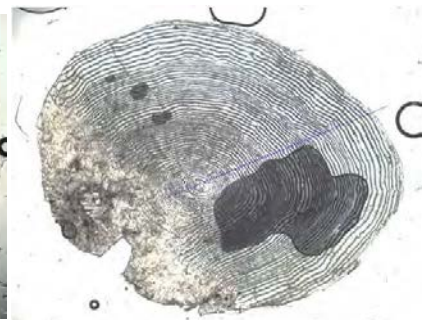
9



10



11



12

図2-1. 鱗の写真(1)

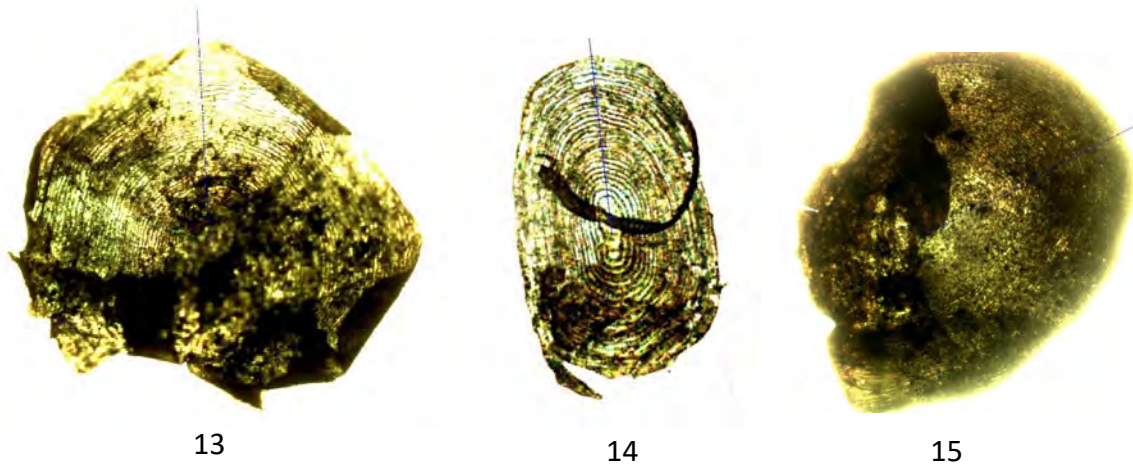


図2-2. 鱗の写真 (2).

表2 鱗の分析結果.

鱗番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
資料番号	700122	700122	700122	700122	700123	700124	700125	700125	H26-0032	K-H13-0433	K-H13-0434	K-H13-0434	K-H13-0434	701329	H26-0032
部位	右A右	右B	右C	左D	部位不明	左E	ラベルない方	ラベルある方	部位不明	部位不明	左	右	部位不明	部位不明	部位不明
種	オシヨロ コマ	オシヨロ コマ	オシヨロ コマ	オシヨロ コマ	サケ	サケ	サケ	サケ	サケ?	サケ	サケ	サケ	サケ	サクラマ ス(河川 型)	サケ
備考	-	-	-	-	-	-	-	-	再生鱗	-	-	-	-	-	-
年齢 (歳)	4	4	4	4	4	3	4	4	-	4	4	4	3	3	4
総隆起線数	51	49	50	38	57	58	62	54	37	69	55	59	45	28	63
鱗径 (μm)	1757	1646	1623	1361	1977	2363	2963	1940	2954	3373	2749	2582	2438	1018	2920
初生鱗径 (μm)	94	133	97	169	90	128	128	111		295	135	74	155	130	162
隆起線数															
第1年目	13	11	17	12	21	22	31	17	-	21	23	24	27	12	27
第2年目	26	26	30	23	37	46	42	27	-	38	34	39	9	9	9
第3年目	40	35	39	32	53	58	54	39	-	51	44	47	9	7	17
第4年目	51	49	50	38	57	-	62	54	-	69	55	59	-	-	10
鱗径 (μm)															
第1年目	480	409	481	640	747	994	1442	597	-	1197	1146	942	1431	514	1195
第2年目	436	460	476	322	543	818	489	281	-	748	521	627	490	276	407
第3年目	472	305	305	226	561	551	609	405	-	581	517	351	517	228	814
第4年目	368	472	362	172	125	-	424	658	-	847	565	662	-	-	504
隆起線間隔 (μm)															
第1年目	37	37	28	53	36	45	47	35	-	57	50	39	49	35	40
第2年目	34	31	37	29	34	34	44	28	-	44	47	42	54	31	45
第3年目	34	34	34	25	35	46	51	34	-	45	52	44	57	33	48
第4年目	33	34	33	29	31		53	44	-	47	51	55	-	-	30
全平均	34	34	32	36	35	41	48	36	-	49	50	44	52	33	44

μm および $123 \pm 35 \mu\text{m}$ であった。初生鱗が比較的大型である。鱗径および隆起線間隔に年齢差はあまりみられない。

サクラマスは鱗に海洋帯が形成されていないことから、河川型ヤマメの3歳魚とみなされる。総隆起線数、鱗径および初生鱗径は28本、 $1018 \mu\text{m}$ および $130 \mu\text{m}$ であった。初生鱗が比較的大型である。隆起線間隔に年齢差はあまりみられない。

5. 考察

(1) 魚皮製靴について

魚皮製靴はアムール川流域から北海道まで広く認められるが、漢民族から魚皮韃子（ユイピーダズ）や魚皮套子（ユイピータオズ）とよばれたナナイはともかく、ウリチ・ニヴフ・ウイルタのような、アイヌより高緯度に住む先住民はより防寒性に優れた獣皮製の靴を好み、樺太南部や北海道のアイヌは彼らより魚皮製靴を多用していたとみられる。

ウイルタの魚皮製靴は、三角形のはめこみ飾りの付いた爪先部分を別に裁ち、胴部は横に広げた1枚の皮から縫い、背鱗の部分は同一の材料で塞いでいる。胴部の前面は縫わず、その半部分を重ね合わせて、縫い付けた紐で縛るもので、その仕立て方はアムールタイプとされる（タチャーナ・ローン前掲）。

アイヌの魚皮製靴には長靴と短靴がある。タンネケリ（長くある・靴）と呼ばれる長靴は男性用、オスコッケリ（根もと・窪んでいる・靴）と呼ばれる短靴は女性用とされ、いずれも河川を遡上し産卵場に集まった背鱗の先が少し白くなりかけた雄魚の皮のみが靴として使われたという（斎藤1992）。産卵後のオイシル（ほっちゃり）と呼ばれる鮭が選ばれたのは、皮が厚くて長持ちするからだといひ、秋に1足作っておくと、大切に履けばひと冬は越せたとい

う（萱野1978）。アイヌの魚皮製靴は冬用の靴で、靴底の鱗や鱗が滑り止めの役割を果たしたとされる。

管見では、これまでアイヌの魚皮製靴の作り方を記したものは全て短靴に関するもので、長靴の製作法を述べたものは見つけられなかった。

萱野茂によれば、大人の靴1足作るには、鮭4本分の皮が必要で、はぎ取った皮を水できれいに洗って、壁などにかけて4・5日のあいだ干し、いったん完全に乾燥させる。靴に作るときにはぬるま湯につけて柔らかくし、背鱗の部分が靴の底になるよう、尾鱗を後ろにして床の上に広げ、その上に足をのせ、つま先の方から順々に足に合わせて折り曲げてゆき、足の甲にかぶせる。そしてかかとの方は丸みをつけながら足首のうしろへ立ちあげ、甲には別の皮を上からおおいにかぶせるようにしてのせ、のせた皮の余分な部分を切りとり、形を整えてから、脱いだり履いたりしやすいように足の両側の前半分だけツルウメモドキの糸で縫いあわせる。最後にケロムンを敷いて足を入れ、かかとのうしろの皮を立て、足首をケラッで縛って履く（萱野前掲）。

『アイヌ生活文化再現マニュアル 縫うーチェブケリ・ユクケリ・トツカリケリー』には図入りでより詳細な製作法が紹介されている。縫い糸の素材がイラクサかツルウメモドキかの違いはあるが、基本的には前述の萱野の製作法と大きな違いはない。なお、ケロムンは保温と汗とりのために靴の中に入れる草のことで、枯れ草やオヒョウやアカダモの木の皮を細く裂いて丸めたもので、足首を縛るケラッには幅広に割いたオヒョウの木の皮を擦った紐が使われた（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構2008）。

今回調査した魚皮製靴は長靴2点と短靴5点だが、それらは前述のようなこれまで報告されてきた一般的なアイヌの魚皮製靴

の製作法とは大きく異なるものであった。

すなわち2点の長靴は靴底が鹿皮(700122)か魚皮(700124)か、魚皮がオショロコマ(700122)かサケ(700124)かの違いはあるが、胴部に使われている魚皮の枚数や裁断・縫製は全く同じであり、魚皮製長靴の製作法が確立していたことがうかがえた。

一方、短靴は5点中魚種を同定できた4点がサケ皮で作られており、5点すべてが片足に1匹分、左右併せて2匹分の皮が使われていた。作り方によって、甲部を綴じ合わせず開口部があるタイプ(700123・700125・K-H13-0433)と、尾側を折り返して甲部とするタイプ(700126・K-H13-0434)の2種類に分けられる。このうちサケ皮を使った4点は全て靴底に背鱗を残している。また700126は種名不明だが、サケに比べ粗い鱗が特徴的である。靴底に残る背鱗や粗い鱗は、雪や氷の上で滑り止めとして有効であったと思われる。

長靴と短靴を比較して注目されるのは、短靴と異なり、長靴には靴底に滑り止めの工夫が見られない点である。すなわち、長靴の靴底には雪や氷の上では滑りやすい鹿皮や背鱗を除去したサケ皮が使われている。前述の通り、アイヌへの聞き取り調査では長靴は男性用、短靴は女性用とされるが、長靴と短靴とではそもそも長さや靴底に大きな違いがあり機能が異なる。長靴と短靴は男女の違いではなく、用途が違うのではなかろうか。

(2) 刀掛帯の裏地に使われた魚皮

刀掛帯の裏地には木綿・アツトウシ・和紙・毛を抜いた獣皮などが使われるとされ、これまで魚皮が報告された例は知らない。今回、刀掛帯5点、子供用太刀に伴う刀掛帯5点の裏地に魚皮が使われていることが確認できた。収集地が特定できない1

点(H26-0032)を除き、残り9点は全て1930～40年代に馬場脩によって樺太南部で収集されたものである。

鱗の分析から魚種が特定できたのはサクラマス1点(701329)とサケ1点(H26-0032)だけだが、サケに比べ鱗が小さいものが多く、淡水魚の皮が多用されている可能性が高い。

靴に使われている魚皮が例外なく鱗を残し、鱗を外側にして用いているのに対して、刀掛帯の裏地に使われている魚皮は鱗を落としたり、鱗のある面を内側にしたりしている。使用部位は装着時に直接体に触れない装飾布(エムシプサ)に集中する。裏地に使うべき木綿や和紙が入手しにくい樺太で、それらの代わりに身近な魚皮が使われたのであろう。

(3) 魚皮の鞣しについて

魚皮鞣子(ユイピーダーズ)や魚皮套子(ユイピータオズ)の異名を持つナナイは周辺民族に比べ皮鞣し技術が発達していた。彼らは、①剥いだ魚皮からきれいに肉片をそぎ落とし、②乾燥させた後、③魚卵などで作った鞣し液を使いながら何枚も重ね畳んだ魚皮を木槌で2時間ほど叩くとされ、その結果、魚皮から鱗はとれ、柔らかくなり、裏側は綿毛のようにフワフワになったという(大塚前掲)。

一方、樺太アイヌは、①サケの皮の鱗を内にして板に張り3日くらい乾したものを束ねてとっておき、②秋になってから筋子の乾したのを水にうるかして潰し、鱗のついているサケ皮の表の方にそれを塗って、③3日ほど陰乾しし、④乾いたら2・3枚ずつ巻いて縛り、丸太の1ヶ所を凹ましたところにのせて槌で叩き、④柔らかくなったら、切れなくなった小刀で鱗をこそげおとしたという(更科1976)。

多少の違いはあるものの、ナナイも樺太

アイヌも衣服に使う魚皮を鞣す際には、魚卵を鞣し液として魚皮に塗り叩く点や鱗を落とす点は共通する。

一方、サケ皮の鞣し実験では、水漬け→裏打ち→脱脂→石灰漬け→脱灰→ベーキング→漂白→浸酸→鞣製→加脂→乾燥→銚掛け（残った鱗を取り除く作業）の工程があり、10日から14日程度かかったという（佐藤1999）。

今回検討したのは北海道アイヌの魚皮製靴と樺太アイヌの刀掛帯の裏地に使われた魚皮だが、上述のような手の込んだ皮鞣しは見られなかった。すなわち魚皮製靴は意図的に鱗を残しており、鞣し液の使用や叩く工程は認めがたい。刀掛帯の裏地に用いられた魚皮のなかには鞣し液の使用や叩きの行程が窺えるものもあるが、魚皮衣に比べ鱗の除去は不十分である。

6. 結語

今回北海道アイヌの魚皮製靴と樺太アイヌの刀掛帯を検討したことで、これまで実物資料に基づきあまり検討されてこなかったアイヌの魚皮利用の実態を明らかにすることができた。

アイヌが大切に受け継いできた民具は、考古学が研究対象としてきた前近代アイヌ文化と、文化人類学が研究の対象としてきた明治以降の近代アイヌ文化をつなぐ重要な歴史資料である。

アイヌ研究はこれまで行われてきた文化人類学者による聞き取り調査や考古学者による出土資料の分析から得られた知見に加え、伝世したアイヌ民具を検討することで、格段の発展と深化が期待できる。アイヌ民具から情報を引き出すには、製作技術を解明するための製作実験に加え、素材研究のための自然科学的分析や動植物学者との連携が不可欠である。

そしてこれからのアイヌ研究は、可能な

限りアイヌの人々が参加することが望ましい。アイヌ民具の製作技術の研究については、アイヌ文化を継承する意味でも、彼らを中心に行われることを期待したい。

謝辞 資料調査に際して次の機関と方々にお世話になった。末筆ではありますが、感謝申し上げます。

市立函館博物館、函館市北方民族資料館、釧路市立博物館

奥野進、大矢京右、中村和之、仲谷一宏、福田裕二、澤田恭平（順不同・敬称略）

本研究は中村和之を研究代表者とするJSPS科研費JP20H01306の助成をうけたものです。

注

- (1) 佐々木史郎氏によれば、サンタンを含むアムール川流域の先住民は19世紀初頭までは交易の比重が高く、漁撈中心の生活になったのは、民族誌が編まれるようになった19世紀中葉以降とのことである（佐々木1996）。
- (2) マス皮製の長上衣はヘモイ・カハ・カヤ（鱒・皮・魚皮衣）、サケ皮製の長上衣はチュッ・チェヘ・カハ・カヤ（秋・魚・皮・衣）、イトウ皮製の長上衣はチライ・カハ・カヤ、アメマス製の長上衣はツクシシ・カハ・カヤと呼ばれ、40枚位の魚皮を縫い合わせた女性用の単衣物である（山本1970）。
- (3) 魚皮衣の製作法に関しては、更科源蔵氏の研究（更科1976）や佐々木利和氏の研究（佐々木2001）とともに、戦前に山本多助氏により樺太で収集された魚皮（サケ・イトウ）と獣皮を併用した女性用長上衣（釧路市立博物館所蔵番号53306）に関する詳細な調査が注目される（北海道教育委員会1989）。
- (4) 札幌市豊平川さけ科学館では、採卵受精したあとのサケの有効利用として、サケ皮で靴づくりの実習を行っている。2021年には

白老と静内のアイヌ協会の共同により新ひだか町山手小学校でサケ皮の靴づくりが行われた。2022年には一般社団法人白老モンシリが主催するサケ皮を使った靴づくりが白老町のしらおいイオル事務所チキサニで開かれた。千歳市のサケのふるさと千歳水族館ではサケ皮のしおり作り体験ができるほか、ミュージアムショップではサケ皮のパワーストーンストラップやミニケリストラップが販売されている。

- (5) サケ皮製靴の製作に関しては、萱野茂氏と財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構による記録がある（萱野1978、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構2008）。どちらも製作者自身の体験や製作者からの聞き取りに基づいており貴重な記録ではあるが、伝世民具との照合・比較は行われていない。
- (6) *Oncorhynchus keta*: サケ目サケ科サケ属サケ。環北太平洋に広く分布する。秋から冬に産み出された卵は水温8℃で約60日で孵化し、さらにその後60日で産卵床から出てきて浮上し、自分で餌をとりながら降海する。沿岸で数ヶ月滞在した幼魚は初夏にはオホーツク海へ移動し、その後北太平洋へ回遊して、主に4歳（3～6歳）で産卵のため母川へ回帰する。産卵後はすべての個体が死亡する一回繁殖型の生活史をとる。体長60～70cm。
- (7) *Salvelinus malma krascheninnikovi*: サケ目サケ科イワナ属オシロコマ。北海道、ロシア沿海州、サハリン、カムチャツカ半島、アラスカから米国カリフォルニア州北部に分布する。生活史は降海型と河川型に分かれる。わが国では、降海型は知床半島周辺にのみ分布する。サケ科の中でも低水温に適応しており、アメマスやヤマメよりも上流に生息する。体長は降海型が50～60cm、河川型が30cm以下である。絶滅危惧II類（VU：環境省）、準絶滅危惧（Nt：北海

道）。

- (8) *Oncorhynchus masou*: サケ目サケ科サケ属サクラマス。北太平洋の西側、主にオホーツク海と環日本海に分布する。海洋で1年を過ごし、桜の咲くころに母川に回帰し、8月～10月上旬に河川の上流で産卵する。サクラマスの生活史パターンは、一生を河川で生活する河川型（ヤマメ）と産卵床から浮上した稚魚が1年半ほど河川で過ごした後に降海する降海型（サクラマス）の2型に分かれる。体長50～60cm。

引用・参考文献

- アイヌ文化保存対策協議会編, 1970, 『アイヌ民族誌』 第一法規出版.
- 伊藤外夫・石田行正, 1998, 「鱗相によるさけ・ます類の種の同定と年齢査定」『遠洋水産研究所研究報告』 35:131-154.
- 大塚和義, 2002, 「北の民と魚皮衣」『季刊銀花』 132:44-45.
- 萱野茂, 1978, 『アイヌの民具』 ずさわ書店.
- 樺太アイヌ協会編, 2002, 『樺太アイヌの伝統文化ーピウスツキ・コレクションよりー』 北海道出版企画センター.
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構, 2008, 『アイヌ生活文化再現マニュアル 縫うーチエブケリ・ユクケリ・トツカリケリー』.
- 佐々木史郎, 1996, 『北方から来た交易民ー絹と毛皮とサンタン人』 日本放送出版協会.
- 佐々木利和, 1995, 『アイヌの工芸』日本の美術354, 至文堂.
- 佐々木利和, 2001, 『アイヌ文化誌ノート』 歴史文化ライブラリー128, 吉川弘文館.
- 佐藤昌弘, 1999, 「鮭皮の有効利用」『北海道大学農学部技術部研究・技術報告』 6:9-11.
- 更科源蔵・更科光, 1976, 『コタン生物記II 野獣・海獣・魚族篇』 法政大学出版局.
- 市立函館博物館, 1978, 『国指定重要民俗資料「アイヌの生活用具コレクション」 整理報告書第4編 アイヌの服飾品』.

- 市立函館博物館, 1987, 『児玉コレクション目録Ⅱ』
- 斎藤博彰, 1992, 「サケ・マスに関連するアイヌ語について」『北海道さけ・ますふ化場技術情報誌 魚と卵』161:101-103, 北海道さけ・ますふ化場.
- 関根達人・菊池勇夫・手塚薫・北原モコットゥナシ編, 2022, 『アイヌ文化史辞典』吉川弘文館.
- タチヤーナ・ローン (永山ゆかり・木村美希訳 津曲敏郎・加藤博文監訳), 2005, 『サハリンのウイルタ 18-20世紀半ばの伝統的経済と物質文化に関する歴史・民族学的研究』北海道大学大学院文学研究科.
- 北海道開拓記念館, 1972, 『北方民族展 アイヌとその隣人たち』.
- 北海道教育委員会, 1989, 『昭和63年度アイヌ衣服調査報告書(Ⅳ)－権太アイヌが伝承する衣文化3－』.
- 松下高・高山謙治, 1942, 『鮭鱒聚苑』, 水産社.
- 間宮林蔵, 1855, 『北蝦夷図説』.
- 山本祐弘, 1970, 『権太アイヌ・住居と民具』相模書房.
- ヴラヂスラフ M. ラティシェフ・井上紘一編, 2002, 『権太アイヌの民具』北海道出版企画センター.
- Kaeriyama M. 2022. Warming climate impacts on production dynamics of southern populations of Pacific salmon in the North Pacific Ocean. *Fisheries Oceanography*, 32: 121-132. <https://doi.org/10.1111/fog.12598>. (2022/06/09)

関根 達人 (弘前大学教授)
梶山 雅秀 (北海道大学名誉教授)

Use of Fish Skin by the Ainu People for Folk Implements – Based on materials
in the collections of Hakodate City Museum

Tatsuhito SEKINE¹, Masahide KAERIYAMA²

Abstract

The indigenous peoples of the Amur Basin, Sakhalin, and Hokkaido, who were blessed with marine resources, used fish skin as a substitute for cloth. This article examines the fish skin shoes of the Hokkaido Ainu and the fish skin used for the lining of the obi for hanging a sword of the Karafuto (Sakhalin) Ainu, which are in the possession of the Hakodate City Museum. Analysis of the scales revealed that in addition to chum salmon, Dolly Varden and masu salmon were also used. There are boots and shoes made of fish skin. A pair of short shoes was made from the skin of two fish, while boots were made from the skin of ten fish. The way of making both boots and shoes became a fixed form. The skin of the fish with the tail and fins and the scale is used for the bottom of the short shoes to avoid slipping on snow and ice.

1 Hirosaki University

2 Hokkaido University



图版 1 收藏番号 700122 魚皮製長靴



図版2 収蔵番号 700122 魚皮製長靴 (右)



0 (画像) 10 cm

図版 3 収蔵番号 700122 魚皮製長靴 (左)



0 (画像) 10 cm

図版 3 収蔵番号 700122 魚皮製長靴 (左)



图版 4 收藏番号 700123 魚皮製靴



图版 5 收藏番号 700124 魚皮製長靴



図版 6 収蔵番号 700124 魚皮製長靴 (右)



図版 7 収蔵番号 700124 魚皮製長靴 (左)



图版 8 收藏番号 700125 魚皮製靴



図版9 収蔵番号 700126 魚皮製靴



图版 10 收藏番号 700126 魚皮製靴（右）



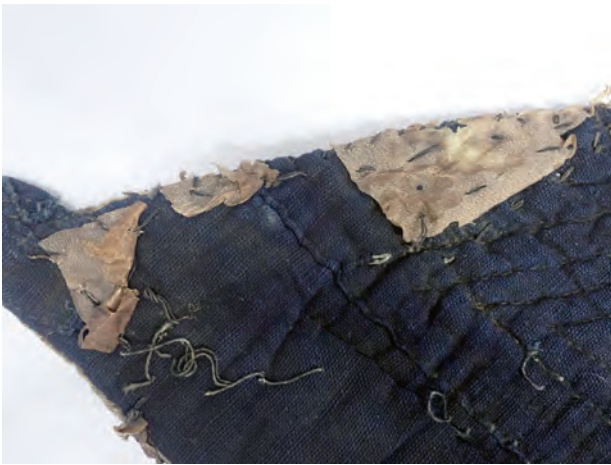
图版 11 收藏番号 700126 魚皮製靴（左）



外観 1



外観 2 (側面)



裏地に使われている魚皮 1



裏地に使われている魚皮 2

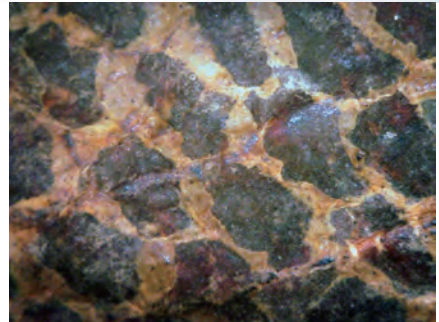


魚皮外面



魚皮内面

図版 12 収蔵番号 701289 男性用帽子



图版 13 收藏番号 701325 刀掛帯



图版 14 收藏番号 701327 刀挂带



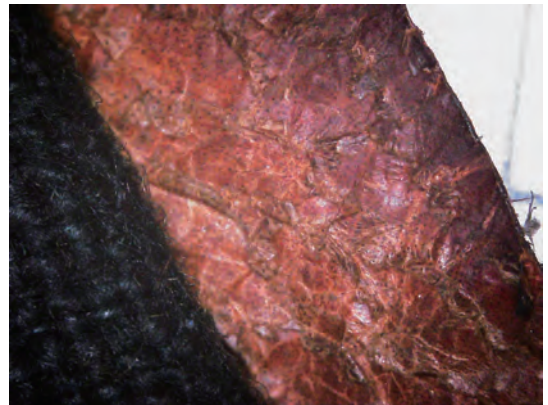
图版 15 收藏番号 701328 刀掛帶



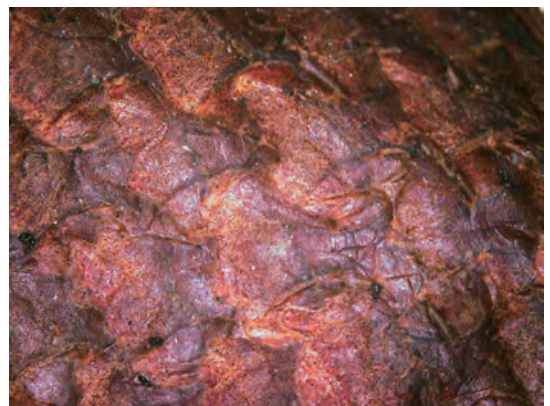
图版 16 收藏番号 701329 刀掛帶



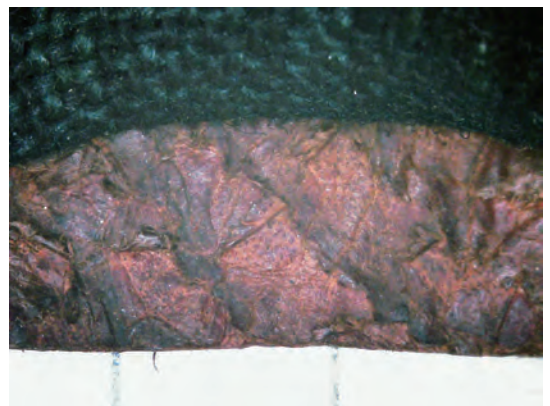
图版 17 收藏番号 701790 子供用太刀・刀掛帯



图版 18 收藏番号 701791 子供用太刀・刀掛帯



図版 19 収蔵番号 701793 子供用太刀・刀掛帯



图版 20 收藏番号 701795 子供用太刀・刀掛帯



图版 21 收藏番号 701796 子供用太刀・刀掛帯



图版 22 收藏番号 K-H13-0433 魚皮製靴



图版 23 收藏番号 K-H13-0434 魚皮製靴



图版 24 收藏番号 K-H13-0434 魚皮製靴 (右)



图版 25 收藏番号 K-H13-0434 魚皮製靴 (左)



图版 26 收藏番号 H26-0032 刀掛帯

〈資料紹介〉平成25年に受け入れた写真資料に関する聞き取り調査

－南茅部地域の戦前の大謀網漁(鮪漁)について－

小林 貢

1. はじめに

函館沿岸では、ここ数年、海水温の上昇に伴いブリの大量の水揚げが報道されているが、これは定置網漁によるもので、大謀網(ダイボウアミ)と呼ばれる定置網では以前は鮪が主となる対象魚であった。第二次世界大戦前の様子を伝える写真が当館に収蔵されており、平成25(2013)年に受け入れた写真資料(資料番号:H25-0184)8枚のうち4枚がこれに該当する。そのうち3枚には裏書があり、内容から昭和18(1943)年の臼尻村(当時)の松山漁場による鮪大漁に関するものとわかった。『南茅部町史 上・下巻』(以下、「町史」)や『町制施行30周年記念南茅部町史写真集 海のふるさと』(以下、「写真集」)によると、戦前の鮪漁を示す写真資料は数少なく、この松山漁場の鮪漁に関する写真がまとまった資料と言える。

筆者は合併以前は南茅部町に勤務しており、漁の様子を目にしたり、地域に残された古い漁具などの民俗資料に触れる機会も多く関心があった。とりわけ今回紹介する写真に写された大謀網による鮪漁は大変興味深く、過去に受け入れた資料ではあるが、これについての聞き取り調査とこれまでの間に気付いた点を合わせて記したい。

2. 南茅部地域の大謀網漁

大謀網とは大群で回遊する鮪や鮭などを

一網打尽にする定置網で、江戸時代末期に南茅部地域に導入された⁽¹⁾。現在でも、この網による漁獲は天然真昆布「白口浜昆布」と並んで地域の漁業を支えている。

写真資料のうち3枚は、「町史」や「写真集」の記載内容との比較から、昭和18年7月の鮪大漁に関する写真であると推察される。この大漁については、当時、北海道新聞でも報道されており、その内容は次のとおりである。



資料1：鮪大漁の記事(昭和18年8月1日付 北海道新聞より)

【記事全文】

近年稀な鮪大漁
噴火湾 漁民の嬉しい悲鳴

烈日に射照る蒼海原を活舞台に漁民と魚が文字通り死力を尽くしての壮烈な肉弾戦を展開する「鮪漁」は道南夏漁

の主流としてその豊凶如何は直ちに漁村経済に大きな影響を与えるものだが、大東亜戦下の食糧事情解決に挺身する漁民の熱意に応じてか一6月中旬来各地の漁報は続々好調を伝え噴火湾各地の如きは連日乗網する1尾50貫に余る大鮪の処置に窮し砂浜と言わず市街地と言わず、輸送不能のまま放置される数量も莫大なもので

この為1尾浜渡し150・160円の大鮪も平均50円程度でしかも買手が無いと言った嬉しい悲鳴を聴かせているしかしこうした価格暴落の嘆きは別として、近年稀な鮪大漁に加えて夏柔魚（イカ：筆者注）漁の大々漁（ダイダイリョウ：筆者注）もあり漁村経済の充実、漁民各個の国民貯蓄増強は目覚ましいもので、生産即戦闘の意気に燃えた漁民は資材、労力、輸送等々の条件を克服し火の出る様な敢闘を繰返している

写真の解説：写真は噴火湾白尻の大謀網に乗った鮪の大群

（縦書きを横書き、旧字体は新字体、漢数字は算用数字、一部の読みにくい漢字表記をかな表記に改めた）

これらの写真から、より詳細に昭和18年の鮪大漁と松山漁場について知るために、平成25・26(2013・2014)年、当時を知る地域の漁業関係者から聞き取り調査を実施した。聞き取り調査にあたっては、次の方々に協力をいただいた。一人は昭和4(1929)年に船大工の家に生まれ、白尻地域で長く船大工として漁業に携わって来た故赤澤和也氏（有限会社赤澤漁船工機前会長）である。船大工の棟梁である父に弟子入りする以前に、船がどの魚種でどの様に使われるかを肌で感じ取るため、実際に漁場に入っ

て作業した経験がある。また、木造船からFRP製の漁船まで取扱い、自身が図面を引いて設計し動力や装備一式まで整える一貫した造船を手掛けられた船造りの専門家でもある。その赤澤氏からは、松山漁場の持ち船についてもご教示いただいた。

次に赤澤氏から、当時の大謀網や松山漁場を知る人物として、日魯漁業株式会社（以下、日魯）に勤務していた経歴を持つ故竹口武氏（昭和4年生）をご紹介いただいた。続いて、写真寄贈者の縁戚にあたり元南茅部町議会議員であった故川井正規氏（大正13(1924)年生）の3名である。

3. 聞き取り調査

3-1. 松山漁場と大謀網

4枚の写真は、いずれも松山漁場に関するもので、「この漁場は昭和14・15(1939・1940)年頃、岩手県宮古から移って来た親方・船頭衆などが白尻沖で鮪漁場を操業し始めた。戦後、鮪の漁模様が悪くなると親方・船頭衆は他地域へ移動したが、昭和24・25(1949・1950)年には日魯がその漁場を経営した」とのことである（川井・竹口氏談）。『日魯漁業経営史 第一巻』によると、昭和20(1945)年から24(1949)年4月30日までの間に「戦前に統合したカニ缶詰工場を基盤に、函館支社のもとに13の事業所を設ける」としたなかに白尻事業所があることから、この白尻事業所が松山漁場を引き継いだものと考えられる⁽²⁾。

定置網の一般的な構造は垣網(カキアミ)と身網(ミアミ)で構成され、群れを成して回遊する魚群の進行方向を垣網によって変更させ網の主体部である身網へ、最終的には「魚捕部(ウオトリブ)」へと誘導するものである⁽³⁾。大謀網は、身網の形状が概ね楕円形を呈するものの、魚捕部は楕円形または四角形に近い形状を呈し、これへの開口部は1部分のみで身網の全容積に

対して非常に小さく、この形状が最大の特徴である⁽⁴⁾。しかし魚の逃逸を防ぐ構造を持たないため、常に見張りを置き、魚群が入網すると合図を送って端口（羽口、ハグチ）を塞ぐ。それと同時に船団を組んで網に向かい、並べた船で網を囲んで魚捕部に魚を追い込むように一斉に網を起こして⁽⁵⁾、まさに一網打尽に捕獲する。これが一連の作業である。そのため「端口を塞ぐタイミングは漁の成否を決定する最大の要であり、陸から沖を望んで網起こしのタイミングを判断し、船団を率いて一連の作業を指揮する船頭が漁場では最も重要な位置を占め、網主である親方に次ぐ存在であった」と言う（赤澤・川井氏談）。

また、戦前の鮪漁場の漁期は2期に別れ、6月20日に解禁となる天然真昆布漁期を挟んで、「それ以前を1期と呼び南茅部の人を漁夫とし、それ以後は2期と呼んで宮古の者を漁夫としていた」とのことである（川井氏談）。おそらく、昆布漁が解禁になると、南茅部では昆布採り・乾燥・製品化・出荷の作業に追われ人員の確保が困難となることから、漁場主の地元である宮古から定置網漁に慣れた人員を調達したものと筆者は推測する。松山漁場と戦前の大謀網による鮪大漁については、個々の写真の聞き取り内容を以下に示していきたい。

3-2. 写真1

これは臼尻港（臼尻船入瀬）への鮪の水揚げの様子であり、「町史」上巻に同一の写真が「臼尻・松山漁場 鮪豊漁 昭和18年」と題されて掲載されている⁽⁶⁾。赤澤氏は、「当時は冷蔵設備が無いため、このように舷側に鮪を繋いで買い手が搬送するのを待って鮮度を保った。鮪を並べた船の、艦側の舷側に白い板に黒字で記されている屋号は『ホシヤマニ』と呼ばれ、松山漁場とは全く関わりの無い家の船で、しかも鮪の旋網（マキアミ）漁の船であった。この船



写真1：臼尻松山漁場鮪大漁の様子（水揚げ）

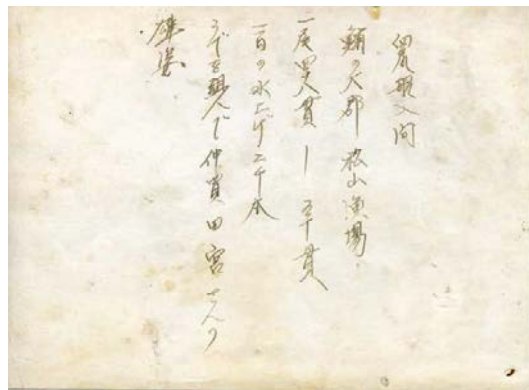


写真1の裏書き

は水揚げた鮪をセントル（鮪を漁港で一旦集約する設備）まで運ぶ船で、『ワク』と呼ばれる袋網ごと運ぶことから『ワク船』とも呼ばれた。この時の大漁が桁外れであったため、松山漁場が借りて使用したもので、自前の船に鮪を繋いだままにすれば、翌日の網起こしに出漁できなくなるのでそれを防いだもの」と指摘する。先に示した資料1によれば「輸送不能」に陥るほどの大漁であり、水揚げを急ぐため、船を借りて対応しなければならない状況であったことは十分うかがうことができる。

また、漁船の構造に詳しい赤澤氏は、「町史」下巻の写真と比較しながら松山漁場の持ち船についても次のように説明する。「資料2も昭和18年7月の松山漁場の鮪大漁に関するもので、臼尻港に鮪をおろしている光景である。舷側に日の丸を掲げ、甲板では太い竿に鮪を吊り上げている『第十大榮丸』で、これが松山漁場の持ち船ではない



資料 2 : 「臼尻・松山漁業部 鮪豊漁 昭和18年」
 (「町史」下巻 巻頭より)

か」と指摘する。さらに「若い頃、実際に目にした記憶があり、デッキや機関部の造り、この写真には写っていないが碇の形状が南茅部の船とは異なり、元々操業していた三陸あたりから持ち込んだものではないか」とも言う。写真1で、「ホシヤマニ」の旋網漁船の奥に写る船は、「甲板上の構造が第十大榮丸と類似しており、これもおそらく松山漁場の持ち船ではないか」と推測する。

資料2も写真1も漁港への水揚げを写しているが、異なるのは、写真1では鮪は舷側に繫いだままだが資料2では漁港に下ろしている点である。この違いは船が持ち船か借りた船かによるもので、「持ち船で運んだ鮪は漁港におろして翌日の操業を可能にしたのである」と言う(赤澤氏談)。

3-3. 写真2

船が並んで網を起し始めたところで、これに続くのが写真3であると言う(赤澤・川井氏談)。この連続する関係については次項で触れたい。また、この写真と写真3の裏面には「臼尻キング」の朱印がある。赤澤氏は、「臼尻キングは地域の写真店で、臼尻港の東にある厳島神社の側で営業しており、地域の写真店が沖に船出して一連の作業を撮影したものだろう」と指摘した。



写真2 : 臼尻松山漁場鮪大漁の様子(網起こし)

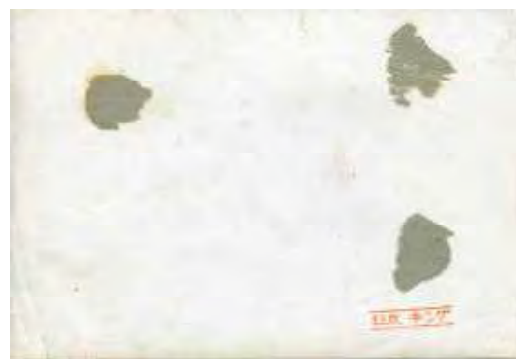


写真2の裏面

3-4. 写真3

この写真は「写真集」の巻頭で「昭和初期 マグロ大謀網」と題して、また「大謀網漁」の頁でも掲載されている⁽⁷⁾。裏書の内容と合わせて、昭和18年7月23・24日にわたる鮪大漁の様子であることがわかる。その冒頭で

臼尻沖、松山漁場
 七月二十三 二十四の初大漁
 二日間水上げ二千本…

とあり、二日間で鮪2,000本を水揚げするほどであった。資料1の記事には、鮪の浜値が下がるほどであったことが記載され、大規模な大漁であったことがうかがえる。

この写真も網起こしを写しているが、写真2と比べて鮪の魚体もより多く見えること、そして、双方の写真に「臼尻キング」の朱印があることから、「おそらくは共に昭和18年7月の鮪大漁の網起こしで、写真

2は網の起こし初めで、網が手繰り寄せられて鮭が激しくうごめく様子が写真3だろう」と推測した（赤澤・川井氏談）。臼尻キングが地元の写真店であったことを考えると、地域を賑わすニュースを同店が写真に納め、それが北海道新聞で全道に向けて報道されたもので、この裏書きに記載された

…臼尻キング写真屋も このまぐろの
写真にて名を売りぬ…

という流れがわかる。



写真3：臼尻松山漁場鮭大漁の様子（網起こし2）

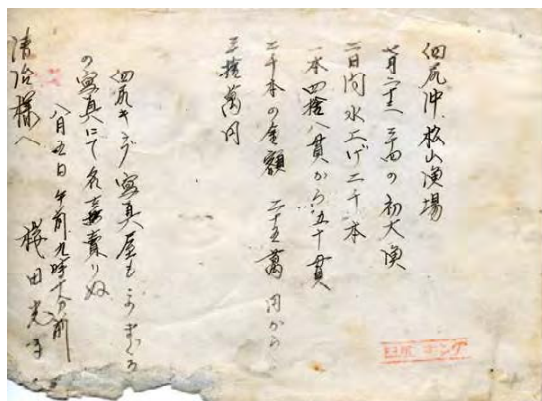


写真3の裏書きと朱印

3-5. 写真4

…今松山漁業場の船が沖から歸って来る様らしい

七舟

と裏書にあり、松山漁場の船団が帰港する様子であるが、撮影時期や他の3枚と同様に昭和18年の鮭大漁に関するものかはわか



写真4：臼尻船入潤 船団帰港の様子

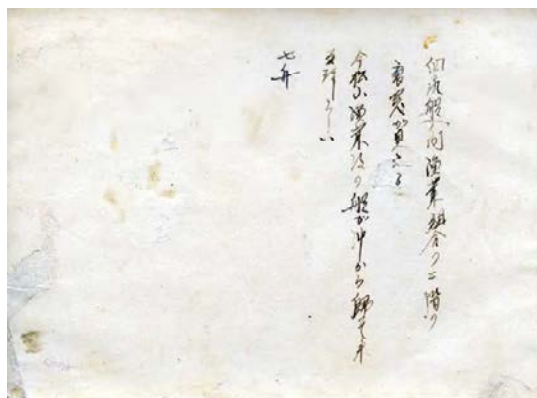


写真4の裏書き



入港する船団（写真4の部分拡大）

らない。

船団の船数については、裏書きに「七舟」とあるが、写真には、白い漁船を先頭にして左に弧を描いて港に向かう8艘が写っている。赤澤氏は、「先頭の白い船のみが船体が大きく、甲板上に構造物があるのは動力船（自力で移動可：筆者注）で、後続の舟（櫂で漕ぐ船）を曳く曳舟（ヒキブネ）である。裏書の『七舟』とは、この後続の舟を指すのではないか。後続の7艘については、その規模と構造から、後尾の小形の3艘は通い舟（カヨイブネ）と呼ばれ、弁当を操業船まで届けたり、緊急時には陸（オカ）等と連絡を取る。見廻り船（ミマワリ

ブネ) と言う場合もあり、魚群が大謀網に入った時は陸の見張り小屋に信号旗を揚げ、これを見て船頭は操業船を出港させて網起こしに向かう」と言う。さらに、「特に最後尾の2艘はより規模が小さく通い舟と思われるが、最後尾から3艘目の舟は少し規模が大きいことから、借りた舟(例えば「ホシヤマニ」から)が並ぶとすればこの位置だろうが(並び順としては、動力船である松山漁場の持ち舟、次に借りた舟、最後尾に通い舟:筆者注)、この写真からは正確には特定できない」とのことであった。



㊦白尻漁場(写真4の部分を拡大)

続いて、この写真の手前側に写っている建物については、「㊦(カクサ)の屋号の下に『白尻漁場』と右から左に一文字ずつ書かれている横長の建物も松山漁場に関わるものだ」と言う(竹口氏談)。竹口氏は第二次世界大戦後に日魯に勤めており、松山漁場の変遷について次のように説明した。「松山漁場は白尻町の弁天岬沖にあり、この漁場は昭和初期まで㊦徳田漁場が操業していたが、徳田漁場が手放した後、昭和14・15年頃、松山漁場が操業した。戦後、鮪の漁模様が悪くなって、昭和24・25年頃には日魯に受け継がれた。その際に、番屋なども以前の漁場のものを日魯が引継いでいて、この写真に写る㊦の屋号のある建物は、当時は松山漁場が使っていた」と説明

した(竹口氏談)。

この写真は、漁場から帰港する様子を写しているが、弁天岬沖の大謀網を経営する拠点も捉えた貴重な一枚であった。

3. まとめ

今回の聞き取り調査では、昭和18年の南茅部地域での鮪漁、その大漁と、それを操業していた松山漁場について知ることが出来た。併せて、漁の取り進め方や船団の構成、また漁場の変遷の一端も把握することが出来た。とりわけ写真1～3は昭和18年7月の鮪大漁を写したもので、『大々漁』と呼べるような鮪の好漁は、これが最後だった」とのこと(3者談)、それを記録して現存する数少ない資料と言える。

末尾となるが、この聞き取り調査に貴重な時間を割いて協力してくださった、故赤澤和也氏、故竹口武氏、故川井正規氏に心から感謝を申し上げ、結びとしたい。

注

- (1) 『町史』上巻:826～827
- (2) 『日魯漁業経営史 第一巻』第二章「一 北海道の沿岸漁業」:464～465
- (3) 『必携早わかり定置網技術総覧』:10
- (4) 前掲書:14
- (5) 前掲書:14
- (6) 『町史』上巻 巻頭写真
- (7) 『写真集』:93

参考資料

- 南茅部町史編纂室編, 1987, 『南茅部町史 上巻』南茅部町.
 南茅部町史編纂室編, 1987, 『南茅部町史 下巻』南茅部町.
 南茅部町制施行30周年記念事業準備室編, 1989, 『南茅部町史写真集 海のふるさと』南茅部町.
 西山作蔵監修, 井上喜洋編, 2002, 『必携早わかり

定置網技術総覧』(株)北日本海洋センター.
北海道新聞(昭和18年8月1日)
日魯漁業株式会社編,1971,『日魯漁業経営史』第
一卷,水産庁.

(市立函館博物館学芸員)

能登川コレクションの石器について

佐藤 智雄

1. 要旨

当館が所蔵する故能登川隆氏が調査収集した北海道指定史跡恵山貝塚出土品の石器類について個々に観察を加え、資料群の性格や特徴を明らかにしながら、能登川隆氏の功績と恵山貝塚が調査されるに至った函館の遺跡を取り巻く状況や背景について考察する。

2. 能登川隆氏の功績と能登川コレクションの概要

能登川コレクションは、函館に生まれ、函館で55歳の生涯を終えた、故能登川隆氏（1902～1958）と玉谷勝氏が発掘・収集した7,000点に及ぶ一群の資料に対する名称である⁽¹⁾。北海道指定有形文化財1点、函館市指定有形文化財568点を含むこの資料群は、市立函館博物館の収蔵資料を代表するコレクションの一つである。考古遺物を中心としたこの資料は、氏が遺跡と出会ってからおよそ30年に及ぶ調査と情熱を傾けた成果で、発掘・採集した故人に敬意を表し受け入れ時より「能登川コレクション」とその名を冠して呼ばれた。

資料は、「故人の意思」「故郷の物は故郷に」⁽²⁾と、氏が没した翌年の昭和34年（1959）4月、夫人とご家族、共同調査者の玉谷氏の全面的なご厚意によって市立函館博物館に一括寄贈され、現在に至っている。資料群の内容は、氏が資料を調査収集した地域である、函館市内・旧恵山町・旧榎法華村と亀田半島の東部全域に渡っている。

コレクションの中でも特筆されるのは、昭和10年（1935）の発掘調査で榎法華（当時は榎法華村）より出土した縄文時代前期初頭の土器である。欠けのない尖底で砲弾形の美しいプロポーションと、土器全体を巡る縄文の美しさから、昭和39年（1964）の東京オリンピックを記念して上野の東京国立博物館で開催された「オリンピック東京大会日本古美術展」で、北海道から唯一出品された資料として展示され、美術的観点から厳選された日本を代表する国宝・重文などとともに、国内外の観覧者に供された。いわば、北海道を背負ったことのある土器なのである。その後、この土器は昭和43年（1968）に北海道の有形文化財に指定されている。

加えて、氏が調査した恵山貝塚⁽³⁾の「恵山文化期骨角製品の一括資料506点並びに恵山貝塚出土遺物を中心とする恵山式土器一括資料62点」⁽⁴⁾は、発掘当時から優品との評価が高く、昭和37年（1992）には函館市から有形文化財の指定を受けることとなった。コレクションの中には、この恵山貝塚の調査の際の記録も手帳に記された形で残されている⁽⁵⁾。道南の遺跡と考古学に深く関わった氏にとって、恵山貝塚はひととき情熱を傾けて調査した遺跡であったといえる。

3. 考古学への道

氏は、明治35年（1902）1月13日、函館に生をうける。父は能登川巳之助、母セキの三男で、妻には米（米子）を迎えて一家

を成し、明治12年（1879）創業の精肉店を営んだ⁽⁶⁾。考古学に興味をひかれ出したのは昭和5年（1950）28歳頃と言われているが、そのきっかけは明確ではない。はっきりしていることは昭和7年（1932）、30歳で「函館考古会」⁽⁷⁾の会員となり活動を始めたことである。能登川が賛同したこの会の目的と設立趣旨は、同年7月18日から、市立函館図書館の開館第5年記念行事として開催された「はこだて先住民遺物展」で発行された「郷土先住民遺物展覧会梗概」と「函館古譚石器時代付図」に見えている。彼らは、函館の郷土研究や郷土教育の上から、先住民族の研究がいかに必要であるかを説き、また、先住民族の貴重な遺跡が消滅してゆく現状について次のようにその保護を訴えた。

函館は近来急速に発展を致しましたために、之等の人々“村上島之丞、松浦武四郎、T・W・プレキストン、ジョン・ミルン・エドワード・S・モース”が研究した遺跡地が、市民の居住地となってその痕跡を失ひ、その遺物は散逸して行衛（方）も知れぬ状態であります。斯の如きは教育の基礎たる郷土教育上甚だ遺憾の事と存じます。

（郷土先住民遺物展覧会梗概より）

函館は、かつて村上島之丞や松浦武四郎などの先人が「蝦夷島奇観」や「撥雲余興」で紹介したように、すでに江戸時代から名前の上がる縄文遺跡の多い土地であった。しかし、明治・大正・昭和と函館山周辺や近郊の開発が進んだことによって、近代科学を日本にもたらし、世界に函館の遺跡や考古学上の遺物他を紹介したブラキストンやミルン、モースが調査・報告した貴重な遺跡ですら住宅地となって破壊され、かつて発見された出土遺物も散逸している。これは、教育の根幹となる郷土愛を育む資料

の破壊と散逸であり、まことに残念で、あってはならないことだと強調している。およそ100年前、街が姿を変えてゆくたびに、函館の遺跡は、危機に瀕していた。

会はその責を執行するための会則として

- 一 本会ハ函館考古会ト称シ石器時代ニ趣味ヲ有スル者ヲ以テ組織

（中略）

- 三 本会ハ石器時代ヲ主トシ併セテ之ニ関連スル事項ノ研究ヲ目的トシ之ガ調査研究発展等ノ事業ヲ行フと謳っている。会の目的は、「遺跡の保護」と、郷土史の基礎資料となる「考古資料の調査研究・公開（教育普及）」にあった。能登川降氏の初志もまた、ここに見て取れるのである。

会の設立当時、区制が敷かれ、東京以北では最も大きな街であった函館は⁽⁸⁾、人・物・情報にあふれ、北海道の中では歴史的にも経済的にも恵まれた立場にあった。しかし、考古学や人類学など大学や国の研究機関のごく一部の人々によって進められてきた遺跡や先住民族の研究に対して、この街は受け皿となる器や組織を持っていなかった。「文化」に関しては、この街を誇りに思う一部の人々が中心となって支えていったのが当時の函館の現状であったのであろう。例えば、昭和24年（1949）に行われたサイベ沢遺跡の調査⁽⁹⁾にみられるように、興味を持った市民が自ら参加活動する風土があったのも確かで、その後押しをしてくれる教養人も存在した。来る者は拒まない。災害などにも市民らが共同して当たるのは、封建領主のいなかった幕末からのこの街の誇るべき体質であろう。馬場脩氏は、昭和4年（1929）に行われた住吉町遺跡の調査について、「本遺跡の調査に対して最も努力をしたものは（地元の）函館考古学会の諸君であったことを忘れてはならない」と書き記している⁽¹⁰⁾。馬場氏の

発言に見られるように、自分たちの行動に自信と誇りを持って臨んでいた。

馬場修氏の報告の裏づけと合わせ、函館の街の伸張と遺跡の関係に少し目を向けてみたい。氏が生まれ育った函館は、17世紀以降、湊に面した函館山の西側裾野に広がった街で、18世紀には周辺六箇「場所」の産物集積地となり、小さな町と漁村を中心に400戸ほどの街であった。その後、北方警備のために箱館奉行が置かれて以降、開港場となり、明治に入って市街地は少しずつ北の海岸段丘側に向かって伸びてゆく。明治40年代から大正10年代にかけても、街の中心はやはり函館港に面した山の西側であったが、人口の増加によって十字街、宝来町から大門（松風町）にかけて商業地や住宅地が広がり、昭和10年代には五稜郭方面へと、街は扇状の広がりを見せる。その中で、遺跡が残る昭和10年前後の津軽海峡に面した函館山の南東側には、住吉町遺跡、春日町遺跡、アサリ貝塚、天祐寺貝塚、函館公園貝塚、函館公園遺跡、三吉神社遺跡の一部が残っていた⁽¹¹⁾。護国神社と青柳（旧潮見）中学校裏にかけて広がっていたといわれる竪穴群や青柳町貝塚は、記録にこそ残されてはいるが、名前がつけられたり、全容が確かめられる前に壊滅したようである⁽¹²⁾。開発の早かった函館山西側市街地の遺跡は幕末にはすでに壊滅し、改変される以前の姿は想像することもできない。しかし、遺跡の上に街が発展したのであれば、地面に目を向ければ土器や石器はよく目にする身近な存在であったろうし、子供たちは土器や石器を拾って遊ぶであろう。体のよい遺物は外国人の土産に売買されたりしていたという⁽¹³⁾。発見される遺物は、古くは「蝦夷島奇観」でも、シリサワへ（現在の谷地頭）より発見された晩期の土器が紹介されている。エドワード・S・モースはブラキストンより日本人の祖先

に当たる遺跡の調査ができる土地であるとの情報を得て来函し、案内されて公園貝塚を調査している⁽¹⁴⁾。アサリ坂や天祐寺貝塚は、建設中に発見された記録が残っているが、博物館に残されている遺物を除いて現在は面影すらない⁽¹⁵⁾。馬場氏が危機感をあらわにする92年前の函館で、30歳を迎えた能登川氏も活動を始めた一人であった。

もう一方で、氏が考古学への道を志すきっかけは、当時の時代背景にもあった。それは、今から約100年ほど前にあたる大正の終わりから昭和の初めにかけて、ごく限られた人たちのものだった考古学や人類学に対するちょっとしたムーブメントである。例えば、大正11年（1922）、日本考古学の父と呼ばれる京都帝国大学の濱田耕作（1881-1938）が『通論考古学』を著している。この著書は、考古学への入門書であり、在野にある者には調査の指標ともなった。氏が大切にしていた蔵書⁽¹⁶⁾の中には、明治40年（1907）に刊行された、坪井正五郎の『人類学講話』や西村慎次の『文化人類学』（大正13年（1924）発行）、中谷治宇二郎（1902-1936）の『日本石器時代提要』（昭和4年（1929）発行）がある。肝心なのは、これら入門書や解説書が出版され出回るといえることは、興味や志あるものが考古学や人類学に触れられる素地ができて来たということであろう。一部の研究者や好事家のものだった先史文化の遺物や遺跡が、方法論を得て、科学として確立されてくると、氏も「先住民」や「先史学」の立場から目前にある課題や疑問に対して、遺跡から回答を得ようとした。

最も直接的な動機は、函館で昭和4年（1929）9月に行われた東北帝国大学の山内清男による住吉町遺跡の発掘調査であったろう。この発掘調査には、山内のほかに同大学の伊藤信雄、函館からは市立函館図

書館の岡田健蔵と深瀬春一が参加している。この発掘調査により、住吉町遺跡から貝殻文の尖底土器が確実に出土し、その年代は（縄文時代前期の）繊維土器以前の所産で、（本州とは隔絶された）地域的、（尖底で乳様突起をもち貝殻によって文様がつけられるという）形状的、（繊維を含む平底土器より古いという）時間的に土器の形式として設定すべき標識遺跡と位置づけられ山内から発表された。これによって、住吉町遺跡は、日本レベルの土俵で、北海道南部における縄文早期の標識遺跡となったのである。後に日本考古学をけん引する人物の手によって、当時最先端の発掘調査が、函館で行われていた。この当時、函館で先史学を目指すものにとっては当然のことながら大きな出来事であったろう。この時の調査地点は昭和9年（1934）の函館大火において被災してしまい「被災後の整地」によって発掘地点は破却されてしまうのであるが、能登川は昭和13年（1938）の4月には同地の周辺を調査して、遺物が出土することと、遺跡が存在することを確認している⁽¹⁷⁾。能登川は、昭和10年代に記したノートに「尖底土器」⁽¹⁸⁾という標題で原稿を用意していた。住吉町遺跡は氏にとってやはり報告すべき大きな存在であったことが伺える。また、能登川と山内清男の間には親交があったといわれるが、そのきっかけもこの住吉町遺跡の調査からなのだと推測される。山内清男は昭和8年（1933）「日本遠古の文化」を著し、その中で縄文式以降の内地と北海道の隔絶に触れ、

内地は鉄器時代、この地方（北海道）では石器の使用が続き、内地では農が主要な生活手段であるのに対して、北海道では縄紋式以来の狩猟、漁業の生活が遺存した

と述べ、この縄文式土器文化以降の北海道の文化圏を昭和14年（1939）に至り「続縄

文式」と命名した。時系列から推測したことでしかないのであるが、それに呼応するように能登川と古武井在住の玉谷勝が「恵山貝塚」の調査を繰り返している。調査のたびに手にする成果品、土中から現れる数々の遺物は、調査者を虜にしたであろう。能登川隆は昭和12年（1937）、山内のいる先史考古学会へ入会する。投資と労働の対価が経済的に反映しない行為は、多くの考古学者が変人扱いされたように能登川隆もまた同様だったであろう。資料が博物館に寄贈されるときの記事には「半生を遺跡発掘に捧げた街の考古学者」という表現だった。

4. 恵山貝塚へ

恵山貝塚は、函館山から東へ40kmほど離れた渡島半島南東端、標高618mの恵山南西麓の海岸に面した段丘上にある。遺跡は本州の弥生時代中期に相当する続縄文文化前半期の遺跡で、調査により墳墓群や精巧な骨角器が発見され、昭和42年（1967）3月17日北海道指定史跡として保護されている。遺跡の位置や発見の経緯は恵山貝塚報告のための氏の記述がある。

本遺跡は北海道渡島国亀田郡尻岸内村恵山（別名根田内）字冷水にある。遺跡は、北海道の西南端津軽海峡と太平洋の接点をなす巖礁を以て圍繞せられた（中略）海に差せまった段丘の上下一体であり冷水川を中心に東方、恵山登山口より冷水川西方数丁の辺が即ち冷水川遺蹟である⁽¹⁹⁾。（中略）此の遺蹟は黄土層より成り、表土は黒土を以て覆はれ現在は畑として耕作されて居る。本遺蹟は古武井在住の玉谷勝氏に依って発見せられ其後、同氏並部落民によって多数の遺物が発見せられた。昭和11年私と玉谷氏との共同発掘の折偶々貝塚を発見。完形の角製釣針一個

を発見し冷水川以西の遺蹟を恵山貝塚と命名した。(中略) 最初段丘は海岸線近くに攻って居ったものの裾を削り取って村道を作り、その後方に住宅地網干場等を互に削り取ったものである事は昭和12年の春台地下の旧宅地より敷石住宅及骨角牙製品他数発見して実証された。尚其後の発掘に依って段丘の中段にある遺蹟と段丘の上下との関係も明瞭に成り大体に当時の段丘の線を不連続線に依って表はす事が出来た。

(中略) 段丘上の遺蹟は耕作地として平坦化されたる為一部分は深度浅く一部の表土は深さ3尺以上に及ぶ状態にある。貝塚は群小貝塚で多数の鯨骨を出土する事は他の太平洋岸に点在する中後期縄文土器の遺蹟と同様漂着せる鯨を捕獲したものと考へられる」

(能登川隆氏の手帳より)

西脇氏によれば、手帳やスケッチブックに記された恵山貝塚の最初の調査は昭和10年(1935)の12月18日が確認できる最初の日付である。以降、昭和15年(1940)11月18日から20日まで恵山貝塚での現地調査日が記されている。記録では追えないが、その後も遺跡や場所を変えながら調査は継続されたものと推察される⁽²⁰⁾。

5. コレクションの石器について

現在これらの資料は「市立函館博物館所蔵品目録7 考古資料編」⁽²¹⁾により整理・登録されている。すでに西脇氏によって複数の遺跡の出土品が混在する可能性が指摘されているが、可能な限り目録の順に従い観察を進めたい。

剥片石器

目録では912から916までは剥片石器に分類されている。

石鏃

912は恵山貝塚の石鏃を示す。石鏃と疑石鏃が含まれていた。総数は81点で個別記載のため枝番を付して表記した。以下個別観察を記載する。

912-1は頁岩製で先端と基部を欠く。有茎でやや大型、身は細くて長く、断面はごく薄いレンズ状である。薄い素材の全面に加工調整、特に側縁はバリ状⁽²²⁾に薄く鋭い。作りは華奢。長さに対する幅はほぼ4～5：1となる。

912-2は頁岩製で完形。有茎で平面は細い二等辺三角形。断面はごく薄いレンズ状で素材の全面に加工調整を施し、先端と側縁はバリ状に薄く鋭い。未使用か。

912-3は頁岩製で完形、有茎で平面は細い二等辺三角形を呈する。断面はごく薄いレンズ状で、基部との接点部分が最も厚くなる。薄い素材の全面に加工調整を施し、先端と側縁はバリ状に薄く鋭い。未使用か。

912-4は赤色の頁岩製。先端と右の逆刺が僅かに欠けるがほぼ完形。有茎で、平面は二等辺三角形を呈する。断面はごく薄いレンズ状。身の重心となる中程が最も厚い。薄い素材の全面に加工調整を施している。先端部には黒色の付着物がある。

912-5は頁岩製で完形、平基で平面は二等辺三角形。断面はごくごく薄いレンズ状。素材の周縁に加工調整を施し、先端と側縁は薄く鋭い。基部は再加工され平基となっている。

912-6は頁岩製で基部を欠く。有茎で平面形は二等辺三角形か、ひし形を呈する。逆刺はない。断面はごく薄いレンズ状。薄い素材の全面に加工調整が施され、先端と側縁は薄く鋭い。色の違う2種類の素材が併存する材料を利用して作られている。

912-7は頁岩製で基部を欠くが、ほぼ完形。有茎で平面は二等辺三角形、断面は薄いレンズ状。薄い素材の全面に加工調整を

施している。側縁は薄く鋭い。

912-8は頁岩製で先端が欠けている。有茎で平面形は細い二等辺三角形、逆刺弱い。断面はごく薄いレンズ状。薄い素材の全面に加工調整を施し、側縁はバリ状に薄く鋭い。

912-9は頁岩製で基部を欠く。有茎で平面は細い二等辺三角形、逆刺はない。断面はごく薄く平らな凸レンズ状。背面は全面に、裏面は周縁と先端に加工調整を施している。先端と側縁は薄く鋭い。

912-10は頁岩製で先端を僅かに欠くが、ほぼ完形。有茎で平面は、二等辺三角形。断面はごく薄いレンズ状。薄い素材の全面に加工調整を施している。側縁は薄く鋭い。基部は細く華奢で実用品とは思われない。

912-11は頁岩製で完形。有茎で平面は先端が鈍角な石銛状。断面は平凸レンズ状で重心付近に厚みがある。裏面は平坦で、加工のない剥離面がある。

912-12は頁岩製で完形。有茎で平面はひし形、断面はレンズ状。素材の全面に加工調整を施している。

912-13は頁岩製でほぼ完形で左の逆刺がない。有茎で平面は先端が鈍角な五角形の石銛状。断面は薄いカマボコ型で重心付近に厚みがある。裏面は平坦で、先端と周縁は調整されるが加工のない剥離面がある。

912-14は頁岩製で先端を欠く。有茎で平面は二等辺三角形。断面はごく薄いレンズ状。素材の全面に加工調整を施している。全体が細く、特に先端と側縁は薄く鋭い。基部は細く華奢で実用品とは見えない。

912-15はチャート製。完形であるが、基部は再加工痕が残る。未製品かもしれない。有茎で平面は棒状に近い二等辺三角形。断面はごく薄いレンズ状。素材の全面に加工調整を施している。先端と側縁は鋭い。

912-16は頁岩製。完形で石鏃とすればやや大型。有茎で先端の調整が鈍い。基部は

太く広く、形状も非対称。身と基部との区もあいまいで、小型のナイフと解釈できる。裏面は平坦。

912-17は頁岩製で完形、若干大型となる。有茎で平面は柳葉形で逆刺はない。断面は薄いレンズ状。薄い素材の全面に加工調整を施している。黒と茶の2種類の色調がある素材を利用して作られている。

912-18は頁岩製で完形。有茎で平面は細い二等辺三角形。断面もごく薄いレンズ状。薄い素材の全面に加工調整を施している。先端と側縁はバリ状に薄く鋭い。

912-19は頁岩製で完形。有茎で身の平面は二等辺三角形。逆刺はない。断面はごく薄いレンズ状。薄い素材の全面に加工調整を施しているが、特に先端と側縁はバリ状に薄く鋭い。基部は細く華奢。

912-20は白色のチャート製で完形。有茎で身の平面は細い二等辺三角形。逆刺はない。断面はごく薄いレンズ状。薄い素材に加工調整を施している。特に先端と側縁は薄く、加工が細かく鋭い。基部は細く華奢で実用品とは見えない。

912-21は頁岩製で基部を僅かに欠くがほぼ完形。有茎で身の平面は細い二等辺三角形。断面はごく薄い平凸レンズ状。素材の全面に加工調整を施している。全体が細く、特に先端と側縁は加工が細かく鋭い。基部はさらに細く華奢で実用品とは見えない。

912-22は頁岩製、大型で完形。有茎で身の平面は細い二等辺三角形。断面はごく薄いレンズ状で素材の全面に加工調整を施している。先端と側縁はバリ状に薄く加工が細かく鋭い。基部は小さく細く、華奢で実用品とは見えない。

912-23は頁岩製で完形。有茎で身の平面は細い二等辺三角形。逆刺はない。断面は薄いレンズ状。素材の全面に加工調整を施している。先端と側縁はバリ状に薄く直線的。基部は小さく華奢で実用品とは見えな

い。

912-24は頁岩製。基部を僅かに欠くがほぼ完形。有茎で身の平面は細い二等辺三角形。断面はごく薄いレンズ状で全面に加工調整を施している。全体が細く、特に先端と側縁はバリ状に薄く加工が細かく鋭い。基部も細く実用品とは思われない。

912-25は頁岩製で左逆刺を欠くがほぼ完形。有茎で身の平面は細めの二等辺三角形。断面はごく薄いレンズ状。薄い素材の全面に加工調整を施している。先端と側縁はバリ状に薄く加工が細かく鋭い。基部も華奢で細く実用品とは見えない。

912-26は頁岩製で完形。有茎で身の平面は二等辺三角形。腹面は平坦で断面はごく薄い平凸のレンズ状。薄い素材の全面に加工調整を施している。先端と側縁はバリ状に薄く加工が細かく鋭い。基部も華奢で細く実用品とは見えない。

912-27は頁岩製で完形。有茎で身の平面は細い二等辺三角形。腹面は平坦で断面はごく薄い平凸のレンズ状。基部との接合面が最も厚みがある。薄い素材の全面に加工調整を施している。全体が細く、特に先端と側縁はバリ状に薄く加工が細かく鋭い。基部は華奢で細く実用品とは見えない。

912-28は頁岩製で完形。有茎で身の平面は基部のつくり出しが弱く細いひし形で逆刺はない。断面はごく薄いカマボコ状。薄い素材の全面に加工調整を施している。全体が細く、特に先端と側縁は薄く加工が細かい。全体が弱くねじれ湾曲している。

912-29はチャート製で完形。有茎で身の平面は細い二等辺三角形。逆刺はない。断面はごくごく薄いレンズ状。薄い素材の全面に加工調整を施している。先端と側縁はバリ状に薄く加工が細かく鋭い。基部も華奢で細い。実用品とは思われない。

912-30はチャート製で完形。有茎で平面は逆刺のない細い二等辺三角形。断面はご

く薄いレンズ状。素材の全面に加工調整を施している。先端と側縁は薄くとくに鋭い。基部も華奢で細く実用品とは思われない。

912-31は泥岩製。基部の端を欠くがほぼ完形。有茎で身の平面は柳葉形。裏面は平坦で断面はごく薄いカマボコ状。薄い素材の全面に加工調整を施している。全体が細く、特に先端と側縁はバリ状に薄く加工が細かく鋭い。基部は華奢で細く実用品とは思われない。

912-32は頁岩製で完形。有茎で平面はごく細い二等辺三角形。腹面は平坦で断面はごく薄い平凸レンズ状。薄い素材の全面に加工調整を施している。特に先端と側縁はバリ状に薄く鋭い。基部も華奢で細い。

912-33は頁岩製で完形。有茎で平面は細い二等辺三角形。断面はごく薄いレンズ状。薄い素材の全面に加工調整を施している。全体が弱くねじれ、背面には剥離面がある。先端と側縁はバリ状に薄く加工が細かく鋭い。基部も細い。

912-34は頁岩製で完形。有茎で平面は細く長い柳葉状。逆刺はない。腹面は平坦で断面はごく薄い平凸レンズ状。薄い素材の全面に加工調整を施している。全体が細く、側縁は薄く鋭い。基部は華奢で細く実用品とは思われない。

912-35は頁岩製で小型、完形。有茎で平面は三角形。背面が平坦で断面は薄いカマボコ状。背側は全面に、腹側は周縁に加工調整を施している。

912-36は頁岩製。基部の端部を欠くがほぼ完形。有茎で逆刺がなく、平面は細いひし形。素材はごく薄く、腹面は平坦で、断面はかろうじてごく薄い平凸レンズ状となる。薄い素材の全面に加工調整を施している。先端と側縁はバリ状に薄く加工が細かく鋭い。基部も華奢で細い。

912-37は頁岩製。基部の端部を欠く。有茎で平面は細い二等辺三角形。逆刺はある

が区がない。断面はレンズ状。薄い素材の全面に加工調整を施している。先端と側縁はバリ状に薄く加工が細かく鋭い。基部の残りも華奢で細く実用品とは思われない。

912-38は頁岩製で完形。有茎で平面は先端が鈍角の細い五角形。腹面が平坦で、断面はカマボコ状。全面に加工調整を施している。基部のつくり出しが甘い。

912-39はチャート製で基部の端を欠く。有茎で平面は細い二等辺三角形。腹面は平坦で断面は薄いレンズ状。素材の全面に加工調整を施し、先端と側縁は薄く鋭い。基部の残りも薄く華奢。先端は一度折れて接合している。

912-40は赤い頁岩製で完形。作りが稚拙。有茎で平面は逆刺のついた三角形。断面はレンズ状。素材の全面に加工調整を施している。基部は折れて作り直している。

912-41は頁岩製。先端と基部を欠く。身は細く長い。断面はごく薄いレンズ状。薄い素材の全面に加工調整を施している。特に側縁はバリ状に薄く鋭い。

912-42は頁岩製。基部を欠くがほぼ完形。大型、有茎で平面は細い二等辺三角形。断面はごくごく薄いレンズ状。薄い素材の全面に加工調整を施し、先端と側縁はバリ状に薄く鋭い。基部は破損しているが未使用であろうか。

912-43は頁岩製で完形。有茎で平面は柳葉形。逆刺はない。腹面が平坦で、断面はごく薄いカマボコ状となる。素材の形に合わせ、背面は全面に加工調整を施し、腹面は先端、基部、周縁に加工を施している。先端と側縁はバリ状に薄く鋭い。未使用か。

912-44は頁岩製で欠落はない。石鏃とすれば有茎であるが、身の先端は調整が不足。基部は太く広く、形状も左右非対称、基部と身の区もあいまいで、小型のナイフと見たほうが無理はない。裏面は平坦。

912-45は頁岩製で先端と基部の端部を欠

く。断面はごく薄いレンズ状。薄い素材の背面に加工調整を施している。腹面は剥離のまま。特に側縁はバリ状に薄く鋭い。朱彩が残っている。

912-46はチャート製でほぼ完形。有茎で平面は細い二等辺三角形。腹面が平坦で、断面はごくごく薄いカマボコ状となる。素材の形に合わせ、背面は荒く全面に加工調整を施し、腹面は先端、基部、周縁に加工を施している。先端と側縁はバリ状に薄く鋭い。未使用か。基部は小さい。再加工かもしれない。

912-47はチャート製で先端を欠く。断面はごくごく薄いレンズ状。薄い素材の両面に加工調整を施している。側縁はバリ状に薄く鋭い。基部が華奢で実用品とは思われない。

912-48は頁岩製。基部を欠いて再加工している。平面は細い二等辺三角形で逆刺はない。断面はごく薄いレンズ状。薄い素材の両面に加工調整を施している。側縁はバリ状に薄く鋭い。

912-49は頁岩製。基部を欠いている。小型で身の平面は三角形、逆刺はない。断面は薄いレンズ状。素材の両面に加工調整を施している。

912-50はチャート製。先端と基部の端部を欠く。平面は細い二等辺三角形。断面はごく薄い平凸レンズ状。薄い素材の両面に加工調整を施している。側縁はバリ状に薄く鋭い。黒色の付着物がある。

912-51は頁岩製で先端を欠く。腹面は平坦で、断面はごく薄いカマボコ状。周縁を中心に素材の両面に加工調整を施している。

912-52はチャート製。左側面を作り直しているが完形。有茎で平面は細い二等辺三角形。腹面が平坦で、断面はごく薄いカマボコ状となる。両面に加工調整を施している。先端と側縁は薄く鋭い。

912-53はチャート製で先端部を欠く。有茎。身の素材が薄く、断面はごく薄いレンズ状。素材の両面に加工調整を施し、側縁はバリ状に薄く鋭い。基部に黒色の付着物がある。

912-54はメノウ製で基部を欠く。有茎で平面は二等辺三角形。断面は三角。素材の全面に加工調整を施している。中程に赤茶色のグラデーションが入る。

912-55はチャート製で欠けはない。平面は柿の種状。腹面が平坦で、断面はカマボコ状となる。素材の形に合わせ、腹面の先端、基部、周縁に加工を施している。

912-56は頁岩製。鏃の右逆刺を欠く。凹基。薄く曲面のある素材の先端と周縁に刃部の加工調整をしている。平面形は石鏃風ではある。

912-57は頁岩製で完形、先端は作り直している。凹基で平面は柳葉状。腹面は平坦で、断面はカマボコ状となる。素材の形に合わせ、背面の全面と腹面の先端、基部、周縁に加工を施している。

912-58は頁岩製で完形。基部は再加工されている。凹基で平面は三角鏃。素材はごく薄い。素材の全面に加工調整を施している。形状はバランスが取れて美しい。

912-59は頁岩製。完形、凹基で平面は柳葉状。腹面は平坦で、断面はごく薄いカマボコ状となる。背面の全面と腹面の先端、基部、周縁に加工を施している。

912-60は頁岩製。先端を欠くがほぼ完形。凹基で平面は三角。腹面は剥離面のままで加工はない。断面はごく薄いカマボコ状となる。背面の全面と腹面の先端、基部、周縁に加工を施している。

912-61は頁岩製。凹基で平面は三角鏃。素材はごく薄く曲面のある素材の先端と周縁に刃部の加工調整をしている。UFか石鏃風模造品。実用品とは思えない。

912-62は黒曜石製。完形。凹基で平面二

等辺三角形。断面はレンズ状。素材の全面に加工調整を施している。

912-63は頁岩製。完形で凹基、平面は柳葉形。断面はごく薄いレンズ状を呈する。素材の全面に加工調整を施している。

912-64は頁岩製で完形。凹基で平面柳葉形。断面は腹面が平らな薄いレンズ状。加工調整は背面の周縁だけ。腹面は剥離で基部だけ調整されている。

912-65は頁岩製で完形。平面棒状で断面は厚いレンズ状。周縁には細かな加工がなされ、ごく薄いバリのついたような縁になっている。

912-66は頁岩製で完形。先端が細く、根本が太くなる槍先のような棒状で、断面は厚いレンズ状。周縁には細かな加工がなされ、ごく薄いバリのついたような縁になっている。

912-67はチャート製で完形。有茎で基部は太く長く、つまみ状。腹面は比較的平坦で、断面は薄いレンズ状となる。先端、周縁に細かな刃がつけられている。

912-68は頁岩製で完形。有茎で大型である。基部は太く長く、つまみ状。腹面は比較的平坦で、断面は薄いレンズ状となる。先端、周縁に細かな刃がつけられている。

912-69は頁岩製で完形。有茎で中型である。基部は太く長く、つまみ状。腹面は比較的平坦で、断面は薄いレンズ状となる。先端、周縁には細かな加工がなされ、ごく薄い「バリ」のついたような縁になっている。

912-70は頁岩製で完形。凹基で大型である。平面形は柳葉状で逆刺はない。腹面は側縁を中心に刃部のつけられる比較的平坦で、断面は薄いレンズ状となる。先端、周縁に細かな刃がつけられ薄く、鋭い。

912-71は赤色の頁岩製で完形。有茎で逆刺はない。素材がごく薄く、周縁に刃を加工調整している。腹面の調整は細かくごく

わずか。側縁は薄く腹面の調整は細かい。

912-72は頁岩製でほぼ完形。有茎で平面形は最大幅が基部によったひし形。逆刺はない。素材はごく薄く、周縁に浅い刃がつけられる。腹面は薄い剥落を含め平坦。模造品か。

912-73は頁岩製でほぼ完形。有茎、腹面が平坦で身の断面は三角。

912-74は黒曜石製で僅かに基部を欠くほぼ完形の石鏃。素材は薄く、調整は背・腹両面からで、刃部は片側ずつ調整されプロペラ状となる。逆刺はない。

912-75は頁岩製で先端と基部を欠く。有茎で、平面形は二等辺三角形。素材全体が弱くねじれ、ごく薄い素材の先端と周縁に細かな刃がつけられ薄く、鋭い。

912-76は泥岩製で先端を欠く有茎石鏃。腹面は平坦で断面は三角。

912-77は頁岩製。ごく薄い剥片の周縁に細かなリタッチが入っている。腹面は剥離面のまま。RFか。

912-78は頁岩製。ごく薄い三角の剥片の周縁に細かなリタッチが入っている。基部は平坦で左右非対象。模造品か。

912-79は頁岩製で完形。赤色とベージュ。二色の色石の組み合わせを利用して作成している。平面アーモンド形。剥片は薄く、周縁を中心に刃部が付けられている。副葬品か。

912-80は頁岩製。完形で平面アーモンド形。背面・腹面ともに剥片の周縁に刃の加工をしている。腹面は平坦。

912-81は頁岩製、上半を欠く。剥片薄く、側縁に刃部の加工をしている。

槍先

目録では913が石槍とされている。石槍と疑石槍、スクレイパーが含まれている。目録の総数は19点で個別記載のため枝番で表記した。以下個別観察を記載する。

913-1はチャート製で完形の槍先。小型で平面は細身の柳葉形。素材は薄く腹面はやや平坦。断面はごく薄いレンズ状。有茎で基部幅広い。

913-2は頁岩製で完形の槍先。小型で有茎、先端は幅広で石銛状。先端を含む刃部は背面からの加工が中心で、腹面からも浅い調整がされている。断面はカマボコ状。側縁は薄く鋭い。茎にはアスファルトが付着している。

913-3はチャート製で完形。小型、有茎で先端は幅広の石銛状。先端を含む刃部は背腹両面からされている。側縁は薄く鋭い。

913-4は頁岩製。上半部を欠く槍かスクレイパー。背腹両面からの加工がなされている。断面はレンズ状を呈する。

913-5は頁岩製。上半部を欠く槍の破片。背腹両面からの加工がなされている。断面はレンズ状。

913-6は頁岩製、基部と右の逆刺を欠く槍先。有茎で身は幅広の石銛状。先端に比べ小さな基部が付く。先端を含む周縁の刃部調整は背腹両面からで、浅い調整がされている。側縁は薄く鋭い。先端に付着物がある。

913-7は頁岩製でほぼ完形。有茎で長さがある二等辺三角形。素材は薄く、原石面残っている。先端を含む刃部の調整は主に背面からで、腹面には周縁と先端だけに刃が付けられている。側縁は薄く鋭い。ナイフ的な使用方法も考えられる。

913-8はチャート製で完形。有茎で先端は幅広の石銛状。先端を含む周縁刃部の調整は背腹両面からで、浅い調整がされている。側縁はごく薄く鋭い。

913-9は頁岩製で完形。有茎で平面は逆刺の弱いひし形。基部との境には区がある。素材は薄い。先端を含む周縁の刃部調整は背腹両面からで、調整は浅い。側縁は薄く鋭い。先端の加工は不十分で、ナイフ的な

使用が考えられる。

913-10は頁岩製、完形の槍先。有茎で円基、平面は長さがある二等辺三角形。軸線が左右対称ではないためナイフとも考えたが、基部との境には区状の抉りがあったので槍と解釈した。素材は薄い。先端を含む周縁の刃部調整は背腹両面からで、浅い調整がされている。腹面は側縁と先端だけが加工されている。側縁は薄く鋭く直線的である。

913-11は頁岩製で完形。有茎で平面は長さがある二等辺三角形または柳葉形。逆刺はない。先端を含む周縁刃部の調整は背腹両面からで、浅い調整がされている。側縁はごく薄く鋭い。

913-12は頁岩製、完形。有茎、細身で長さがある柳葉で逆刺はない。先端部とほぼ変わらない幅広の基部が付く。先端を含む周縁刃部の調整は背腹両面からで、刃は浅い調整がされている。側縁はごく薄く鋭い。一度中程で折れて接合されている。基部にはアスファルトの付着物あり。先端部の加工が弱い。

913-13は頁岩製、完形。薄い剥片の全面に加工調整がなされている。刃部は周縁で、刃先を中心にして左右に波打つ。形状・使用法からナイフと考えられる。

913-14は砂質頁岩製、完形。有茎、平面は長さがある二等辺三角形。先端に比べごく幅の広い基部が付く。先端を含む周縁刃部の調整は背腹両面からで、浅い調整がされている。側縁はごく薄く鋭い。形状・使用法からナイフとみられる。刃先・基部・基部頭部と色の異なる素材を使用している。

913-15は砂質頁岩製、ほぼ完形。有茎で先端は石銛状。先端を含む刃部調整は背腹両面からで側縁は薄く鋭い。基部は太く長い。

913-16は頁岩製、完形。薄い剥片の全面

に加工調整がなされている。刃部は周縁で、薄く鋭い。形状・使用法からナイフと考えるのが妥当と思われる。

913-17は頁岩製で完形。有茎で石銛状の形状。先端を含む周縁の刃部調整は背腹両面からなされている。側縁は薄く鋭い。基部は太い。形状・使用法からナイフと考えるのが妥当と思われる。

913-18は頁岩製。縦長剥片を利用した不定形のナイフ。中程で折れ接合している。

913-19は頁岩製。基部はあるが先端の欠けたナイフか靴形石器とみられる。

石錐（ドリル）

目録で914は石錐となっている。目録の総数は12点で個別記載のため枝番で表記した。以下個別観察を記載する。

914-1は黒曜石製の石錐。不定形剥片の一端をつくり、細く鋭い石錐としている。

914-2は頁岩製の石錐。縦長不定形剥片の先端3cmに細かな加工をほどこしている。刃先は長く太い。

914-3は頁岩製で全てが軸（身）部。縦長剥片を棒状に加工して四面を作り、先端は摩滅している。作りが丁寧で、残りが良い。副葬品かもしれない。

914-4は頁岩製で完形の石錐。縦長剥片を棒状に加工、四面を作り、両端を使っている。作りが丁寧で副葬品とみられる。

914-5は頁岩製で完形の石錐。縦長剥片を持ち手と棒状に加工、持ち手は二面、軸は三面をつくり出し、先端を石錐としている。

914-6は頁岩製。全体を加工しているが、先端に摩滅痕がない。断面は棒状であるが、石鏃とみられる。

914-7はチャート製。棒状で軸の断面は方形。両端を加工し石錐として使用している。先端は摩滅している。

914-8は黒曜石製の石錐。握り（柄）と

シャフト（軸）を作っている。先端は欠けている。

914-9は黒曜石製。不定形剥片の突端を加工し石錐としている。握り（柄）は背腹の2面、先端は3面加工。軸の長さは1cmほどで、先端の孔はごく小さい。

914-10は頁岩製の石錐。欠けた刃先なのか握り（柄）がつくのであろう。断面三角の剥片の先端に加工を施している。先端には黒色の塗布物が見られる。

914-11は黒曜石製の石錐。表側に原石面が残る。握りは背腹の2面、先端は3～4面加工。先端は5mm程度で孔はごく小さい。手持ちで使える。

914-12は黒曜石製の石錐。表側に原石面が残る。やや厚みがあり、断面は三角形。握りは背腹の2面、先端は3面加工。孔はごく小さい。

靴形石器

目録で915は靴形石器である。目録の総数は53点で個別記載のため枝番で表記した。以下個別観察を記載する。

915-1は頁岩製。完形のナイフ形。身に太い基部あるいは茎が付く。刃部は両側縁で刃先は下方で左側縁側がやや膨らむ。周縁は薄く、刃も鋭い。背腹両側から加工されている。

915-2はチャート製。ほぼ完形のバチ形。頭部端を僅かに欠く。下縁の刃部は内反りで刃先は右を向いている。両側縁とも薄く鋭い。側縁は背腹両側から加工されている。

915-3は頁岩製。完形のバチ形。下縁の刃部は直線的で刃先は右を向いている。両側縁とも薄く、鋭い刃がついている。側縁には背腹両側から加工されている。

915-4は頁岩製で完形。身に大型で太い基部あるいは茎が付く。刃部と基部の境界に弱い区がある。刃部は下縁で刃先は右を向いている。右側縁側がやや膨らみ周縁に

は薄く鋭い刃がついている。側縁は背腹両側から加工されている。

915-5は頁岩製で完形の短冊形。身の素材も薄い。身の頭部1/3程で僅かにくびれる区がある。刃部は下縁で刃先は右を向いている。両側縁とも直線的で縁は薄く鋭い刃がついている。側縁は両側から加工されている。

915-6は頁岩製。完形の短冊形。頭部は太い基部あるいは茎となる。刃部は下縁で刃先は左を向く。刃先は平面では丸くやや膨らむが、立面では一直線となる。腹面は平坦で断面はカマボコ状となる。周縁は薄く刃も鋭く、背腹両側から加工されている。

915-7は頁岩製。基部端を欠くへら形。頭部は太い基部あるいは茎となる。刃部は下縁で刃先は右を向く。刃先は平面立面ともに一直線となる。刃は鋭く、背腹両側から加工されている。

915-8は頁岩製で完形の靴形。細いが基部あるいは茎が作られている。刃部は下縁で刃先は右を向く。刃先は平面立面ともに一直線となる。周縁は薄く、刃も細かく鋭い。背腹両側から加工されている。

915-9は赤色の頁岩製。頭部を欠くへら形。茎から刃部まで直線的に側縁が伸びる。刃部は下縁で刃先は左を向く。刃先は平面ではやや膨らむが、立面では一直線となる。加工は背面だけで腹面は剥離面となっている。素材は厚みがあり、背腹両側から大きな打ち欠きが施されている。

915-10は頁岩製で完形の靴形。剥片厚い。太い基部あるいは茎付。刃部は下縁で刃先は左を向く。刃先は平面立面ともに一直線となる。刃は鋭く、縁も薄く、背腹両側から加工されている。全体に被熱痕があり、基部には皮巻の痕跡とみられる帯状の巻きつけ痕が変色して残っている。

915-11は頁岩製。完形のへら形。素材は薄く、1/3程に区があり茎となる。刃部

は下縁で刃先は左を向いている。左側縁は腹面より、右側縁と下縁は背面より刃部の加工がなされている。両側縁側とも直線的で縁には鋭い刃がついている。

915-12は頁岩製で完形のナイフ形。頭部には太い基部あるいは茎が付く。刃部は両側縁で刃先は左下を向き右側縁側がやや膨らむ。周縁は薄く、刃も鋭い。背腹両側から加工されている。茎には何か巻き付けてあったのか、茎と身の色が異なっている。

915-13は頁岩製。完形の短冊形。縦型の剥片で頭部に括れあるいは茎がある。刃部は下縁で刃先は右下を向き両側縁側には大きめの刃部がつけられる。周縁は薄く、刃も鋭い。加工は背腹両側からなされている。

915-14は頁岩製。完形のヘラ形。剥片厚い。太い基部あるいは茎付。刃部は下縁で浅く、刃先は左を向く。刃先は平面立面ともに一直線となる。側縁の刃は深くスクレイパー様で、背腹両側から加工されている。

915-15は頁岩製。完形のヘラ形。あるいは柄付きのナイフ。剥片厚い。太い基部あるいは茎付。刃部は下縁で刃先は右を向く。刃先は平面立面ともに一直線で、鋭く、縁も薄い。背腹両側から加工されている。

915-16は頁岩製。頭部を欠くがほぼ完形の短冊形。あるいは柄付きのナイフ。剥片厚い。太い基部あるいは茎付。刃部は下縁で刃先は左を向く。周縁は下縁を含み平面立面ともに直線で、鋭く、縁も薄い。背腹両側から加工。

915-17は頁岩製。完形のヘラ形。あるいは柄付きのナイフ。剥片は厚い。太い基部あるいは茎付。刃部は側縁から下縁で刃先は下を向く。周縁は下縁を含み平面立面ともに直線的で、縁も薄い。加工は背腹両側から。基部には帯状の物が巻かれていた痕跡がある。

915-18は頁岩製。完形のスクレイパー。剥片薄い。基部あるいは茎付。刃部は周縁

で鋭く、縁も薄い。加工は背腹両側から施されている。汚れが一樣なので握りに巻き物はなかったと見られる。

915-19は頁岩製。完形のヘラ形。剥片厚い。太い基部あるいは茎付。刃部は下縁で刃先は左を向く。刃部は付け直された跡がある。周縁は下縁を含み平面立面ともに直線的で、縁も薄い。加工は背腹両側から。基部には皮状の巻物が巻かれていた痕跡がある。

915-20は頁岩製。完形のナイフ形。頭部は刃部との境界にかろうじて区がある。下縁がU字状の刃部。刃先は右側。直線的で背腹両側からの調整がなされている。

915-21は頁岩製でほぼ完形の小型のナイフ。刃部は下縁。周縁は下縁を含み平面立面ともに直線で鋭く、縁も薄い。加工は背腹両側から。

915-22は頁岩製でほぼ完形の小型のナイフ。刃部は下縁。周縁は下縁を含み平面立面ともに直線的で、鋭い。加工は背腹両側から。

915-23は頁岩製で完形の小型の柄付きナイフ。刃部は下縁。周縁は下縁を含み平面立面ともに直線的で、鋭い。加工は背腹両側から施されている。

915-24は頁岩製でほぼ完形の小型のヘラ。柄の端が欠けている。刃部は下縁。周縁は下縁を含み平面立面ともに直線的で鋭い。加工は背腹両側から。

915-25は頁岩製。完形で小型のナイフ形。頭部は持ち手あるいは軸に装着するための基部がある。下縁がU字状の刃部。直線的で背腹両側からの調整がなされている。

915-26は頁岩製で素材薄い。完形で小型の石ヘラ形。頭部は持ち手。刃部は下縁で刃先は左下。薄く直線的で背腹両側からつけられている。

915-27はチャート製。頭部が僅かに欠けるほぼ完形の小型ナイフ形。平面は右下に

ふくらみ、刃先がU字状となる。直線的で背腹両側からの調整がなされている。

915-28は頁岩製。完形の石ヘラ形。頭部は持ち手か軸に装着するための基部で刃との区に挟りが入る。刃部は下縁で刃先は左下に突き出す。左側縁は背腹両側から刃部調整。他は腹面からだけ。

915-29は頁岩製。完形の基部付き石ヘラ形。頭部は持ち手か軸の基部となる。刃部は下縁で刃先は左下。直線的で背腹両側からつけられている。

915-30は頁岩製。頭部が欠けた小型のナイフ形。下縁がU字状で刃先は左端に突き出る。側縁の刃部は背腹両側からの調整がなされている。

915-31は頁岩製。基部の頭端が折れた石ヘラ形。頭部の軸に四角い刃部が着く。刃部は下縁で刃先は左下が突出。両側縁は背腹両側から刃部がつけられている。

915-32はチャート製。頭部が僅かに欠けるが、ほぼ完形の小型のナイフ形。平面は左下にふくらみ、下縁がU字状の刃部となる。刃部は直線的で背腹両側からの調整がなされている。

915-33は頁岩製。基部の頭端が折れた石ヘラ形。基部にコテ状のヘラが着く。刃部は下縁で刃先は右下に突出する。両側縁は背腹両側から刃部が加工されている。

915-34は頁岩製で、基部の頭端が折れた石ヘラ形。ヘラはコテ状。刃部は下縁で刃先は左下に突出する。両側縁は背腹両側から刃部が加工されている。

915-35は頁岩製。完形の基部付き石ヘラ形。刃部は下縁で刃先は左下に突き出す。刃部は薄く直線的で、周縁は背腹両側からつけられている。

915-36は頁岩製で基部の頭端が僅かに折れた石ヘラ形。ヘラはコテ状。刃部は下縁で刃先は左下寄りにふくらんでつけられる。下縁含む周縁は薄く、背腹両側から刃

部が加工されている。

915-37は頁岩製。基部の頭端が僅かに折れた石ヘラ形。ヘラはコテ状でバチ形に近い。刃部は下縁で刃は付けなおされている。周縁は薄く、背腹両側から刃部が加工されている。

915-38は頁岩製で完形の基部付き石ヘラ形。ヘラ形の左上部に基部が付けられている。刃部は下縁で刃先は左下に突き出す。素材は薄く、刃部が直線的で鋭く背腹両側からつけられている。

915-39は頁岩製で完形の石ヘラ形。基部は大きく、コテ状のヘラがかなりすり減っている。刃部は下縁で刃先は右下を向いている。下縁含む周縁は薄く、背腹両側から刃部が加工されている。

915-40は頁岩製。上部の折れたナイフ。刃部は下縁で刃先は右を向いている。下縁含む周縁は縄文のナイフに比べ薄く、背腹両側から加工されている。

915-41は頁岩製でかなり刃を付け替えて使っているが完形。柄を左に、刃部は下縁になる。刃先は右下を向いている。下縁含む周縁は、背腹両側から加工されている。

915-42は頁岩製で上部の折れたナイフ。刃部は下縁で刃先は右を向いている。下縁はレンズ状にふくらみ周縁は縄文のナイフに比べ薄く、角度がない。背腹両側から加工されている。

915-43は頁岩製。完形の石ヘラ形。スクレイパー状であるが、下縁が背腹両側から刃部調整され、刃先は右下を向いている。周縁は薄く、右側縁、左側縁は背面から刃部が加工されている。

915-44は頁岩製。完形の石ヘラ形。基部は大きく、ヘラの（刃部）がかなりすり減っている。刃部は下縁で刃先は右下を向いている。下縁含む周縁は薄く、背腹両側から刃部が加工されている。

915-45は頁岩製。完形のヘラ形。基部は

大きく、区状の挟りが入る。バチ状のヘラの刃部は使用により、深く加工されている。刃部は下縁で、レンズ状にふくらみ、刃先は左を向いている。下縁含む周縁はかなり薄く、両側縁は背腹両側から刃部が加工されている。

915-46は頁岩製。頭部の折れたヘラ形。平面はバチ状で刃部は下縁にある。刃先はレンズ状にふくらみ、刃先は左を向いている。周縁はかなり薄く、両側縁は背腹両側から刃部が加工されている。

915-47は頁岩製で頭部の折れたヘラ形。平面はバチ状で刃部は下縁にある。刃先は付け替えられて凹状になり左を向いている。周縁はやや薄く、両側縁は背腹両側から刃部が加工されている。

915-48は頁岩製。ヘラ形。刃先は右を向いている。周縁は背腹から刃部が加工されている。

915-49は頁岩製で小型のつまみ付きナイフ。腹面は剥離面。刃先は下を向いている。周縁は背腹から刃部が加工されている。

915-50はチャート製。基部端を欠くヘラ形。平面はバチ状で刃部は下縁。刃先は直線状。周縁はかなり薄く、両側縁は背側から刃部が加工されている。

915-51は頁岩製。完形のナイフ。基部も薄い。

915-52は頁岩製。頭部・先端部を欠く石錐。周縁は背腹から刃部が加工されている。

915-53は頁岩製のスクレイパー。

スクレイパー類

目録で916はスクレイパーである。目録の総数77点で個別記載のため枝番で表記した。以下個別観察を記載する。

916-1は頁岩製。小型で長軸の両端を欠く。頭部に基部風の軸のつくナイフ。刃部調整は背面からだけで腹面は剥離面のまま。刃先は下を向く。刃部は先端か。両側

縁のリタッチは細かくナイフ様。

916-2は頁岩製。小型。長軸（柄）の頭部を欠くナイフかスクレイパー。欠けているが、頭部には基部風の幅広の握りが付く。素材は薄く、刃部調整は背面からだけで腹面は剥離面のまま。軸と刃部の境には区がある。刃先は先端。両側縁のリタッチは細かくナイフ様。

916-3は頁岩製の石ベラ。薄い縦型剥片の周縁に刃部が調整されている。

916-4は赤色の頁岩製で小型。長軸（柄）の頭部を欠くスクレイパー。欠けているが、頭部に基部風の幅広の握りが付く。断面三角の厚い素材を利用し、刃部調整は背面からだけで腹面は剥離面のまま。軸と刃部の境には区がある。刃先は先端、下を向く。両側縁のリタッチは細かくナイフ様。力をかけられるように柄付きであったとみられる。

916-5はチャート製。小型。長軸（柄）の頭部を欠く。断面三角の厚い素材を利用したナイフかスクレイパー。軸と刃部の境には区があり頭部は基部風の幅広い握り（軸）が付く。素材は薄く、軸を除く刃部調整は背面からで腹面は剥離面のまま。刃先は先端、下を向く。両側縁のリタッチは細かい。

916-6は頁岩製。小型のナイフかスクレイパー。軸、先端を欠くため詳細は不明。肉厚で細かい剥片にまんべんなく刃をつけている。

916-7は頁岩製。頭部を欠くか、ナイフの一部なのか不明。素材の断面は三角で、刃部調整は背面からで腹面は剥離面のまま。刃先は先端、下を向く。両側縁のリタッチは細かい。

916-8は黒曜石製の不定形剥片のUFかスクレイパー。

916-9は頁岩製。軸の頭部が欠けている。縦長剥片。断面三角の厚い素材を利用し、

刃部調整は背面からだけで腹面は剥離面のまま。刃先は先端、下を向く。両側縁のリタッチは細かくナイフ様。力がかけられるように柄が付いていたとみられる。

916-10は頁岩製。小型で軸の頭部が欠けている。断面三角の厚い素材を利用し、刃部調整は背面からだけで腹面は剥離面のまま。刃先は先端、下を向く。両側縁のリタッチは細かくナイフ様。力のかかり方から柄付きとみられる。

916-11はチャート製。小型で完形。つまみ付きの小型スクレイパー。つまみの断面は三角、刃部は断面楕円形で、接合部分に厚みを持たせている。刃部は下縁で片側だけの加工。

916-12は頁岩製。小型、L字状で握りの頭部が欠け、細い軸の先に小さな刃部が付く。握りは断面三角の厚い素材を利用し、全体の刃部調整は背面からだけで腹面は剥離面のまま。刃先は突出した先端。

916-13は頁岩製。完形でごく小さい。素材は厚みがあり刃部は急角度で付けられる。握りの頭部が欠け、小さな刃部が付く。握りは断面三角の厚い素材を利用し、刃部調整は背面からだけ。腹面は剥離面のまま。刃先は突出した先端。

916-14は頁岩製。小型。L字状で握りの頭部が欠け、細い軸の先に小さな刃部が付く。握りは幅広く断面三角の厚い素材を利用している。刃部調整は背面からだけで腹面は剥離面のまま。刃先は突出した先端にある。

916-15はチャート製。小型。11とよく似ているが素材が薄く、不定形剥片を利用したものかもしれない。柄の頭部を欠く柄付きの小型スクレイパー。刃部は下縁、背側からの加工で腹面は剥離面のまま。

916-16はチャート製。完形で小型のバチ形。刃部は下縁で周縁は薄く鋭い刃がついている。

916-17は頁岩製。頭部を欠くが区があるので靴形石器とみられる。両面加工で刃部は下端、周縁は薄く、鋭い刃がつけられている。

916-18は頁岩製。頭部を欠くバチ形の小型ヘラ。両面加工で刃部は下端、刃先は右側を向いている。周縁は薄く、鋭い刃がつけられている。

916-19は頁岩製。小型、完形で柄付きのコテ形。柄は太く、本体の接合部分が特に厚い。刃部は下縁で、平面・立面ともに直線的。刃先は先端、下を向く。

916-20は頁岩製。不定形縦長剥片のスクレイパー。刃部加工は背面からだけ。

916-21は頁岩製。不定形縦長剥片のスクレイパー。刃部加工は背面からだけ。

22から25は湾曲が強い剥片の先端を加工している。

916-22は頁岩製。小型。下端を尖らせる縦長剥片のスクレイパー。刃先は先端。厚みのある素材に刃部加工は背面から施されている。

916-23は頁岩製。小型。下端を尖らせる縦長剥片のスクレイパー。刃先は先端。断面三角で厚みのある素材の側縁に、背面からだけ角度のある刃部加工を施している。

916-24は頁岩製で小型。頭部が僅かに欠ける。縦長剥片の下端を尖らせる縦長剥片のスクレイパー。刃先は先端、下を向く。厚みのある素材の側縁に、背面からだけ角度のある刃部加工を施している。

916-25は頁岩製、完形のつまみ付ナイフ。縦長剥片の下端を尖らせる。厚みのある素材の側縁に、背面からだけ角度のある刃部加工を施している。

916-26は頁岩製で一部欠くがほぼ完形。太い基部あるいは握り付のナイフ形の靴形石器。刃部は両側縁で刃先は下を向き左側縁側がやや膨らむ。周縁は薄く、刃も鋭い。刃先は右を向いている。背腹両側から加工

されている。

916-27は頁岩製。完形のスクレイパー。剥片はやや薄く。刃部は周縁で鋭く、縁も薄い。加工は背腹両側から施されている。

916-28は頁岩製。不定形縦長剥片のスクレイパー。刃部加工は背面からだけ。

916-29は頁岩製。完形の木葉形のスクレイパー。刃部は周縁。角度のある加工が背面からつけられる。

916-30は頁岩製。完形の縦長のナイフ。刃部は側縁。細かな加工が背面からつけられる。

916-31は頁岩製。縦長で完形のナイフ。刃部は側縁。厚い素材に細かな加工が背面から施されている。上部に区があり細く加工されている。

916-32は頁岩製。両端を欠く。腹面の一端に浅い剥離が入る。先端を欠いた下端を尖らせる縦長剥片のスクレイパーとみられる。素材は厚い。

916-33は頁岩製。完形。平面石鏃状。頭部に太い基部風の軸のつくナイフ。素材はごく薄い。刃部の調整は背面からだけで腹面は剥離面のまま。

916-34は頁岩製。完形。頭部に太い基部風の軸のつくナイフ。素材は若干厚みがあり、角度のある刃部がつけられる。腹面は剥離面のまま。

916-35は頁岩製。不定形縦長剥片のスクレイパー。刃部加工は背面から。

916-36はチャート製。完形の石へら。刃部は下縁で周縁は両面調整。

916-37は頁岩製。完形。端部を再加工している。縦長剥片のナイフかスクレイパー。背腹両面より加工調整している。

916-38は頁岩製。完形の縦長のナイフ。刃部は側縁と下端。細かな加工が背面から施される。

916-39は頁岩製。縦長剥片のUF。

916-40は頁岩製。縦長剥片の下端を尖ら

せるスクレイパー。素材の側縁に、背面からだけ刃部加工を施している。

916-41は頁岩製。完形のつまみ付きナイフ。縦長剥片の下端を尖らせている。素材の側縁に、背面から刃部加工を施している。縄文期のものかもしれない。

916-42は頁岩製。完形で縦長剥片の下端を尖らせるスクレイパー。素材の側縁に、背面からのみ刃部加工を施している。

916-43は頁岩製。縦長剥片のUF。

916-44は頁岩製の靴形石器。完形で小型のナイフ形。平面は右下にふくらみ、刃先がU字状となる。直線的で背腹両側からの調整がなされている。

916-45は頁岩製。縦型のスクレイパー。背側の全面に刃部調整している。

916-46は珪質の頁岩製。縦型のスクレイパー。背側の全面と腹側左側縁に刃部調整がある。

916-47は頁岩製。頭部を欠くバチ形の靴形石器。刃部は下縁。平面・立面ともに直線的な刃部。側縁を含み、薄く鋭い加工が背面・腹面からなされている。

916-48は頁岩製。右半分が欠失した木葉形のスクレイパー。周縁に背腹両面からの刃部調整がされている。下縁を刃部として、柄のつくタイプとみられる。

916-49は頁岩製。基部あるいは軸部を欠く靴形石器。刃部は下縁で断面はレンズ状。周縁を含め、刃部は薄く鋭く、背腹両面からの調整がなされている。刃先は右。

916-50は頁岩製。小型。長軸（柄）の頭部を欠く。断面三角の厚い素材を利用したナイフかスクレイパー。軸と刃部の境には区があり頭部は基部風の幅広い握り（軸）のつく。軸を除く刃部調整は背面からで腹面は剥離面のまま。刃先は先端、下を向く。両側縁のリタッチは細かい。

916-51は頁岩製で完形、バチ形の石べら。刃部は下縁で平面・立面ともに直線的。側

縁を含み、薄く鋭い加工が背面・腹面からなされている。素材の背面中央が厚く、柄付きで使われたかもしれない。

916-52は頁岩製。小型で長軸（柄）の頭部を欠く。断面三角の素材を利用したナイフ。側縁の刃部調整は背面からで腹面は剥離面のまま。刃先は先端、下を向く。

916-53は頁岩製。完形。木葉形のスクレイパー。周縁に背面からの刃部調整がされている。腹面は剥離面のまま。下縁を刃部として、柄のつくタイプとみられる。

916-54は頁岩製で小型。長軸（柄）の頭部を欠く。縦長で断面三角の厚みのある素材を利用したナイフ。側縁の刃部調整は背面からで腹面は剥離面のまま。刃先は先端、下を向く。

916-55は頁岩製。不定形剥片を利用したUF。

916-56はチャート製。幅広の剥片を利用したスクレイパー。一部礫面を残している。刃部は周縁で、背面からの加工調整。腹面は剥離面のまま。

916-57は頁岩製で完形、木葉形のスクレイパー。周縁に背・腹両面からの刃部調整がされている。腹面は剥離面のまま。下縁を刃部として、柄のつくタイプとみられる。

916-58は頁岩製。完形。木葉形のスクレイパー。周縁に背・腹両面からの刃部調整がされている。下縁を刃部として、柄のつくタイプとみられる。

916-59は頁岩製でほぼ完形、下縁がU字状となる石ベラ。刃部は下縁で平面・立面ともに直線的。側縁を含み、加工が背面からなされている。腹面は剥離面のまま。

916-60は頁岩製で縦長剥片の一辺に刃部を付けたスクレイパー。腹面は剥離面のままである。

916-61は頁岩製で一部礫面を残すナイフ形の靴形石器。刃部は腹面の下縁で刃先は左を向いている。下縁含む周縁は縄文のナ

イフに比べ薄く、背腹両側から加工されている。

916-62は頁岩製で一部礫面を残す縦長剥片のスクレイパー。刃部は側縁。下縁含む周縁は背腹両側から加工されている。

916-63は頁岩製で完形、木葉形のスクレイパー。周縁に背・腹両面からの粗い刃部調整がされている。縄文期のものかもしれない。

916-64は頁岩製で完形、縦長のスクレイパー。剥離面を除き、周縁に背面からの粗い刃部調整がされている。

916-65は頁岩製で小型、長軸（柄）の頭部を欠く断面三角の素材を利用したナイフ。側縁の刃部調整は背面からで腹面は剥離面のまま。刃先は先端、下を向く。

916-66は頁岩製。完形で、バチ形の石ベラ。刃部は下縁で平面・立面ともに直線的。下縁の腹面は剥離面のままで側縁を含み、薄く鋭い加工が背面からなされている。

916-67は頁岩製で完形、木葉形のつまみのついたスクレイパー。腹面は剥離面で。周縁に背面からの刃部調整がされている。縄文期のものかもしれない。

916-68は頁岩製で大型、完形で断面三角の素材を利用したナイフ。側縁の刃部調整は背面からで腹面は剥離面のまま。刃先は先端にある。

916-69は頁岩製で縦長のつまみ付ナイフ。つまみの頭部を僅かに欠く。刃部は周縁で、ほぼ背面からの加工調整。右側面の僅かに腹面からの刃が付けられる。

916-70は頁岩製で縦長剥片の石ベラ。背面の周縁に刃部が加工される。素材はかなり厚い。下縁の刃部がかなり細かく調整されている。腹面は剥離面のまま。

916-71は頁岩製。縦長剥片を加工したスクレイパー。素材も厚く、急角度の刃部が加工されている。腹面は剥離面のまま。

916-72は頁岩製。縦長剥片を加工したス

クレイパー。両端部を欠く。

916-73は頁岩製のスクレイパー。木葉形で一端に柄が付けられている。背腹両面から加工調整されている。

916-74はチャート製。完形で、背面から加工され、腹面は剥離面のままである。

916-75は頁岩製。刃側縁を欠く小型でバチ形の石ベラ。刃部は下縁で平面・立面ともに直線的に加工調整される。側縁を含み、背腹両面から加工調整がなされている。側縁は薄い。

916-76は頁岩製。完形で小型、バチ形の石ベラ。刃部は下縁で平面・立面ともに直線的に加工調整されるが側縁を含み、加工調整は背腹両面からがなされている。側縁は薄い。

916-77は頁岩製。刃部右端を欠くがほぼ完形のバチ形の石ベラ。刃部は下縁で平面・立面ともに直線的。側縁を含み、背腹両面から加工調整がなされている。素材の背面中央が厚い。

礫石器

目録では917から942は礫石器類。917・918は環状磨製石斧、919は磨製石斧の完形、920は磨製石斧の破損品。921は擦切痕を残す石斧類、922は独鈷石、923から939は魚形石器、940は挟入棒状石器、941は槌形磨製石器、942は石棒である。目録の総数79点で個別記載のため枝番で表記した。

環状磨製石斧

917は安山岩製で完形の環状磨製石斧。腹面は平坦で、背面はレンズ状にふくらむ。平面形は円形の一端が嘴状に尖る。周縁が研ぎ出されて刃部となっている。重心部分に両側から開けた穿孔がある。

918は安山岩製の環状磨製石斧の未製品。腹面は平坦で、背面はレンズ状にふくらむ。楕円形の川原石の周縁を打ち欠いて刃部を

作り出そうとしている。石のほぼ中央に穿孔がある。中程に稜があることから、両側からの穿孔となっている。

磨製石斧

919-1は緑色泥岩製で完形の小型の石斧。最大幅は刃先にあるが平面形は短冊形。軸の厚さは薄く、研ぎ出しから基部まで厚さはほぼ均等。断面は縦・横共に長方形である。刃部は片刃で刃先は僅かに弧状となる。腹面・背面ともに小さく集中する敲打痕が残っている。

919-2は緑色泥岩製で基部を欠くがやや大型の石斧である。最大幅は刃部にあるが平面はほぼ短冊形。軸に対する横断面は長方形、背面は平坦、腹面はレンズ状に整形されている。刃部は片刃で研ぎ出しから刃先まで2.8cmの刃幅、刃先には欠けがあり水銀朱が割れ目に付着している。刃先の立面は丸ノミ状。軸端の破損面が基部となって、敲打痕が残っている。

919-3は緑色泥岩製。ほぼ完形のごく小型の石斧または石ノミ。最大幅は刃先にあり平面形はバチ形。腹面は平坦、背面はレンズ状に膨らむ。断面は縦・横共に長方形である。刃部は片刃で刃先は僅かに切り出し状の直線で、刃先には打ち欠きが連続している。基部は叩かれて欠けている。

919-4は黒色片岩製で完形の小型の石斧または石ノミ。最大幅は刃先にあり基部はごく小さい。平面形はバチ形。腹面・背面ともにレンズ状に膨らむ。断面は縦・横共に長楕円形である。刃部は広い片刃で刃先は弧状となる。研ぎ出しから刃先までは2.6cmと広い刃幅を持っている。刃先の立面は開いた丸ノミ状で、ゆるくカーブしている。基部は叩かれて僅かに欠けている。

919-5は緑色泥岩製で完形の小型の石斧。最大幅は刃先にあり基部に向かってゆるくすばまることから平面形はつりがね形

までは2.3cmと広い刃幅を持っている。先端は左端を欠くが平面やや弧状。立面は中央が深いやや丸ノミ状となっている。右側の側縁が打ち欠かれて成形されている。13同様、切り分けられたか再加工品とみられる。

919-16は緑色泥岩製、平面形は刃先に最大幅のある釣鐘形の石斧。身の横断面は長方形。研ぎ出しから刃先が1.0cmと急角度で、加工されている。刃先は両側から研ぎ出しのある両刃。基部には多く打痕がある。

919-17は緑色泥岩製、両側縁と基部に打ち欠きと敲打痕のある小型の石斧。修復途中とみられる。最大幅は刃先にあるが平面形は短冊形を呈する。腹面・背面ともにややレンズ状にふくらむ。断面は縦・横共に楕円形であろう。刃部は両刃で刃先は僅かに弧状を呈する。基部は叩かれて欠けている。

919-18は緑色泥岩製。身の中ほどから基部を欠失した小型の石斧。平面形は最大幅が刃先にあるバチ形とみられる。風化が激しくすり減って、断面は扁平な楕円形となる。腹面は平滑、研ぎ出しから刃先までは1.5cmの刃幅を持っている。刃先の平面はやや弧状を呈する。再加工のための置き品とみられる。

919-19は片岩製で、ほぼ完形の小型石斧または手斧。最大幅は刃先にあり平面形はバチ形。腹面・背面ともにレンズ状にふくらむ。横断面は長方形である。刃部は片刃で刃先の平面は弧状、立面は中央が深い丸ノミ状で左右の刃先には欠けがある。基部は叩かれて欠けがある。

919-20は片岩製の石斧。平面形は短冊状。最大幅は刃先にあるが、基部までほとんど変化がない。身の厚さは研ぎ出し口が厚く、基部にかけてやや薄くなる。軸は背面・腹面ともにレンズ状にふくらむ。研ぎ出し口からの刃長は2.4cmで片刃。刃先は平面弧

状で、立面は中央が深い丸ノミ状になっている。基部には打痕・敲打痕残る。

919-21は片岩製の石斧。平面形は刃先から基部に弧を描いてつぼまる釣鐘形。軸の厚さは刃先から基部まで均質で薄い。全体が被熱し、黒ずんだり剥落痕が残っている。研ぎ出し口からの刃長は1.7cmで片刃。刃先はやや弧状で小さな打欠けがある。基部には敲打痕残る。

919-22は緑色泥岩製の石斧。刃先と同じ幅で軸が伸び、小さな台形状の基部が作り出されている。左側縁には擦切痕が残る。両側縁と基部には敲打痕が巡る。再加工品とみられる。軸線方向の縦の断面は薄く均一。腹面は平坦。刃先は片刃で直線状。細工用であろうか。破損品の置きか再利用品とみられる。

919-23は桂化木製の石斧。刃先と軸、基部の幅差はあまり見られないことと、横断面がレンズ状であることから、石剣類の転用品とみられる。しいて言えば平面形は短冊形。刃先は片刃で、刃長は3.1cmと長い。基部には敲打による欠けが著しく残されている。細工用のノミと思われる。

919-24は安山岩製、小型で平面二等辺三角形の石斧。厚みもほぼ均一で、むしろ基部の方が厚い。左側縁は擦り切られているが、右側縁は半円扁平状打製石器のように両側からの打ち欠きで成形されている。刃先は切り出し状に若干斜めで、直線的。あたりも打ち欠きもない。刃長は1.1cm。ほぼ片刃なのであるが、若干腹面からも研ぎが入っている。復元した軸と刃の方向が合わないことから、再利用品であるとみられる。軸線方向の縦断面はレンズ状、横断面は方形であることから23同様細工用のノミと思われる。

919-25は桂化木製か。平面細く全体は柳葉状、軸の中央に最大幅がある石斧。縦断面は両側に研ぎ出しがあつてレンズ状、横

断面は方形とノミの形状をしている。両側縁とも丁寧な磨れて整形されている。刃は片刃で先端は直線。刃長は1.8cm。基部は滑り止めのためか打ち欠かされている。

919-26は粘板岩製の石剣破片。底面平坦で断面は三角。全面に加工痕がある。

919-27は完形で緑色泥岩製の石斧。平面バチ形、縦断面は腹面が平坦で、背面がレンズ状となる。横断面は側面が垂直に立って長方形かカマボコ状。両側面とも刃先から2cm程に敲打痕が残されている。抜け防止のための滑り止めであろうか。刃部は片刃で研ぎ出しから刃先までの刃長は2cm程。刃先は弧状で背面・腹面それぞれに凹みがある。基部には若干の敲打痕が残る。

919-28は完形、緑色泥岩製の石斧。平面は刃先が僅かに外側に張る短冊形。軸線方向の断面はやや厚めだがほぼ均等、横方向の断面はカマボコ状となっている。刃部は片刃で、研ぎ出しからの長さは3.2cm。刃先は弧状で中央付近に打ち欠けがある。基部周縁には研ぎ出しと打ち欠きによる滑り止めがされている。背面と腹面には黒い油煙が付着している。

919-29は完形、緑色泥岩製の石斧。平面はバチ形で刃幅が最も広く、基部が狭く小さい。刃部と基部を除いた縦断面は、共に同じ幅である。腹面は平坦、背面は打ち欠きがあり、横断面はほぼ方形になっている。片刃で研ぎ出しからの刃幅は1.8cm、中央部が深く研がれて丸ノミの刃のように弧を描いている。基部には滑り止めのためか打痕や粗い擦痕が見られる。

919-30は完形で緑色泥岩製、平面は刃幅が最大幅となるバチ形の石斧。縦断面は軸の厚さが変わらないが、刃先と基部の形状を入れると平行四辺形となる。軸に対して横方向の断面は、腹面がやや弧状となっているが、背面はほぼ一直線で刃部の延長のようになっていることから、長方形を呈す

る。整形は丁寧で側面と刃先は鋭い稜が立ち、斧の厚さとほぼ同様の高さの壁が立ち長方形となっている。刃部は片刃で、研ぎ出しからの刃長は3.2cmと長く、やや弧状の刃先は鋭い。刃先には細かな打ち欠きが見られる。基部にはタール状の付着物がごく薄く付着している。

919-31は緑色泥岩製でかなり厚みのある素材で腹面の断面はややレンズ状となる。背面は研ぎ出し部分が最も厚く、基部で若干薄くなる。整形は丁寧で側面と刃先は鋭い稜が立っている。研ぎ出しからの刃先は2.8cm、途中で欠けるが、刃先は一直線で平面やや弧状となる。重量物の加工に利用するのでであろうか。

919-32は緑色泥岩製で大型の粗製品。平面は刃幅が最大となる短冊形。軸線方向の断面は多少振れるがほぼ変わらない。厚みのある素材で、腹面がやや湾曲する。刃部は片刃で研ぎ出しからの刃長は2.8cm。刃先は弧状で細かな剥離がある。基部には粗い敲打痕がある。滑り防止であろうか。

919-33は緑色泥岩製で完形の石斧。小型で平面形はバチ形、刃幅が最大幅となる。断面は軸の垂直方向が平行四辺形、横方向はほぼ長方形。片刃で研ぎ出しからの刃長は0.5cm。刃先は弧状でやや斜めに切り出し状となっている。

920-1は片麻岩製で刃部が破損し平面形は短冊形を呈する。左側面に擦切痕のある破損品の再加工品。

920-2は緑色泥岩製で左側刃部破損するが、平面形は短冊形の大型の片刃石斧。腹面は平坦で、背面の研ぎ出し口部分の厚さが3.1cmと厚い。研ぎ出しからの刃長は4.6cm。両側縁には刃先から8cmほどで叩き痕がある。ほぞ穴への滑り止めとみられる。

920-3は緑色泥岩製で刃部破損。平面形は短冊形か。腹面はほぼ平坦で縦方向の断面はレンズ状、横方向は隅丸の方形を呈す

る。先端は研ぎ出し痕が残る片刃石斧とみられる。両側縁にはほぞ穴へ取り付けのための打痕が残る。

920-4は緑色泥岩製で刃部・基部が破損している。平面形は短冊形か。腹面は平坦。背面には研ぎ出し痕が残る。

920-5は黒色片麻岩製で基部が欠損する。平面形はバチ形か。腹面は平坦、背面に研ぎ出しがある。片刃石斧とみられる。破損面に水銀朱の痕跡が残ることから、朱つぶし用のハンマーとみられる。副葬品であろう。

920-6は泥岩製。平面形短冊形で縦断面はレンズ状。両刃で刃部打ち欠きあり。基部に叩き痕あり。整形は丁寧で側面と刃先は鋭い稜が立っている。

920-7は緑色泥岩製。石斧基部の残片で、少し重い。先端を切つてあることから再加工品の可能性がある。基部には古い打痕が残る。

擦切痕を残す石斧類

921-1は緑色泥岩製。小型で完形、右側縁に擦切痕が残る。分割（切り分け）した際の痕跡とみられる。平面形はバチ形、最大幅は刃先にある。軸の厚さは薄めで均質。腹面はレンズ状の整形で、横方向の断面はカマボコ状。研ぎ出し口から刃先までは2.8 cmと長い。刃部は片刃で直線状。刃先には細かな打ち欠けが3箇所。側縁は断ち切り状に立ち上がる。基部には数か所打痕が残っている。

921-2は緑色泥岩製で中型品。軸で折れた破損品。背に擦切痕、再加工品か。最大幅は刃先、片刃で研ぎ出し口から刃先までは2.8 cmと長い。刃部は直線状。

921-3は緑色泥岩製の大型石斧の破損品。背に再加工のための擦切痕が3条、腹に1条ある。

921-4は緑色泥岩製、完形で大型石斧を

切り分けた再加工品で、左側面に擦切痕がある。片刃で研ぎ出し口から刃先までは2.5 cmと長い。刃部は弧を描き、正面は直線状。細かな打ち欠きがある。

921-5は緑色泥岩製。再加工用の材料で、擦切痕が2条あり、全面に敲打痕がある。

921-6は黒色片岩製。完形で中型の石斧。平面形はバチ形を呈する。厚みは均等で、軸の横断・縦断面は長方形。腹面に擦切痕が1条。片刃で、研ぎ出しからの刃長は3.2 cmと長い。基部に打痕・敲打痕が残る。

921-7は緑色泥岩製の擦切痕の残る材料の残片。

921-8は緑色泥岩製の擦切痕の残る材料の残片。細く、石ノミ用であろうか。

922は安山岩製でほぼ完形。先端を僅かに欠く。刃部は両刃、敲打で基部を整形。独鈷石形。

魚形石器

923は砂岩製。完形、小型。細い紡錘形。刻みなどはないが、ミニチュア品とみられる。副葬品かもしれない。

924は砂岩あるいは粘版岩製。完形で身は薄く小型で全面に研磨痕がある。断面楕円形。

925は粘版岩製。完形で身は薄く小型。全面に研磨痕がある。断面は楕円形で、側面は平坦に加工されている。継ぎ足し用か。

926は砂質頁岩製でほぼ完形。中型でやや腹のふくれた鯉節形。断面は背側が若干膨らむ卵形。頭部に4 mm幅、深さ2 mmの幅の広い環状刻線が巡る。頭部にはさらに区画線をはさんで鼻部が作り出されている。鼻は先端が欠かれているが腹面には接合面のつくり出しがある。頭部右側面には「」状の刻みが見られる。尾部には端部より1 cmほどの箇所に浅い刻線が環状に巡っている。胴部には原石面を残すが、かなり丁寧に研ぎ出し状の成形痕が見られる。断面は

上下で差のない楕円形。頭部尾部ともに3mm幅、深さ1mm強の環状刻線が区画状に巡る。頭部に鼻と接合面のつくり出しはなし。

927は砂質頁岩製で完形。小型で短く腹のふくれた鯉節形。断面は上下で差のない楕円形。頭部尾部ともに3mm幅、深さ1mm強の環状刻線が区画状に巡る。頭部に鼻と接合面のつくり出しはなし。胴部は研ぎ出し状の成形痕が見られるが、原石面を残す部分あり。

928は砂岩製。鯉節形で尾部に打ち欠けがある。頭部には環状刻線が2条巡り、頭部の腹面は接合用の広い平坦面となっている。尾部には1条、刻線が巡っている。頭部の刻線付近が幅・高さ最大となる。刻線の断面はV字状。

929は砂岩製。中型でほぼ完形。尾部溝から先が欠ける。腹がふくれない細身の鯉節形で、断面は卵形。頭部には幅3mm、深さ3mmの刻溝、頭部の先端には細い刻線状の溝を伴う鼻が作り出され、鼻の下は接合面となっている。胴部は研ぎ出し状の成形痕が細かく残る。

930は砂岩製。鯉節形で頭部の糸掛け部分と尾部に剥落痕と打ち欠けがある。頭部の環状刻線付近が幅・高さ最大となる。断面は卵形。刻線をはさみ、腹面に稜の削り出しがあり、ひれ状の刻線「▷」が9条刻まれている。環状刻線の断面はV字状である。

931は砂質頁岩製で完形。中型で胴に長さがあり、腹のあまりふくれない鯉節形。断面は背側が若干膨らむ楕円形。頭部と尾部ともに4mm幅、深さ1mmの幅断面U字状の広い環状刻線が区画状に巡る。頭部にはさらに区画線をはさんで鼻部が作り出され、尾部の端にも区画線が巡っている。鼻と尾部の腹面には接合面のつくり出しがある。胴部は研ぎ出し状の成形痕が見られるが、打ち欠かれて礫面を残す部分有。

932は砂質頁岩製。大型でほぼ完形。僅かに鼻先が欠ける。腹が膨れない細身の鯉節形で、断面は腹側が若干膨れる卵形。頭部と尾部には幅3mm弱、深さ1mm弱で断面コの字状の環状刻溝が巡る。頭部端から胴部の腹面端には敲打痕が連続している。尾部には区画の刻線が環状に巡るが、接合面はない。胴部は研ぎ出し状の整形痕あるが原礫の形状も残る。腹面にベンガラ痕が残る。

933は砂質頁岩製。尾部端が僅かに欠けるが大型でほぼ完形。腹の膨れない細身の鯉節形で、断面は背側が若干膨れる卵形か円形。頭部と尾部には幅2mm弱、深さ1mm弱、断面V字状の環状刻溝が巡る。頭部はやや大きめで胴の断面は背側が膨らむ卵形である。頭部の先にはごく小さな鼻が作られ、鼻の根本と先端には刻線が巡っている。頭部の腹面には広い接合面が形成されている。頭から胴部にかけての1/3は、接合されているが、打撃により一度破損されている。

934は砂質頁岩製。大型で完形。腹のふくれない細身の鯉節形で、断面は背側が若干ふくれる楕円形。頭部と尾部には幅2mm弱、深さ1mm弱、断面U字状の環状刻溝が巡る。尾部の溝は浅い。頭部はやや大きめで、胴の断面は背側がふくらむ卵形。頭部の先に鼻はないが、腹面には接合面様に広い平坦面となっている。胴部の整形は丁寧で、研ぎ出し痕は目立たない。全面にベンガラ風の朱彩がなされている。副葬品とみられる。

935は砂質頁岩製。中型で完形。頭部4分・尾部6分、細身の鯉節形で、断面は縦の楕円形。環状の刻溝無し。頭部・尾部とも端は打欠いて成形。尾部に研ぎ出し痕はみえるが、胴部の整形は丁寧。9面程度に分けて側面を研いでいる。全面にベンガラ風の朱彩がなされている。副葬品とみられ

る。

936は粘板岩製。完形で小型。重心が膨らむ紡錘形で左右の端部がすぼまる。断面は縦の楕円形。整形は粗いが全面に研磨痕有。副葬品とみられる。

937-1は砂質頁岩製。小型で一端を欠く。頭部・尾部の区別のない両錘形か。断面は縦楕円形。全体を研ぎ出し整形している。欠落部を中心に被熱痕が認められる。朱彩痕僅かに残る。

937-2は粘板岩製で石棒か魚形石器の尾部。断面円形。一端を尖らせている。被熱して焼けている。

937-3は粘板岩製。石棒か魚形石器の尾部。断面円形。一端を尖らせている。9面に研ぎ出して、整形している。破損面の一部と胴の一部に朱が付着している。

937-4泥岩製、魚形石器の尾部破片。

937-5は泥岩製、頭部の破片。頭部のつくり出しと刻線が確認できる。裏の破損面には漆で溶いた朱がべっとり付着している。938-1は砂質泥岩製の石棒か魚形石器。一端を欠く。断面は楕円形で中心部残存径は4.2cm。端部は1.6cm。朱彩痕ある。頭部・尾部の区別のない両錘形の魚形石器かもしれない。

938-2は砂質泥岩製の石棒か魚形石器。一端を欠く。断面は楕円形で中心部残存径は3.6cm。端部は1.9cm。全面に朱彩痕あり。頭部・尾部の区別のない両錘形の魚形石器かもしれない。

939-1は砂質泥岩の魚形石器片。両端を欠く。頭部のつくり出しと刻線が確認できる。頭部に胴部は研ぎ出し状に整形。被熱痕が認められる。

939-2は砂質泥岩の石棒か魚形石器片。両端を欠く。胴部は研ぎ出し状に整形。中央に貫通しない円形の孔あり。

939-3は砂質頁岩製の石棒。両端を欠く。残存部で太さの差が見られない。外面は細

かな敲打痕によって整形されている。朱彩痕が認められる。

939-4は砂質頁岩製の魚形石器。小型で両端を欠く。頭部・尾部の区別のない両錘形とみられる。断面は縦楕円形。全体を研ぎ出し整形している。

挟入棒状石器

940は粘板岩製の石棒。937-3と接合した。一端が欠けている。先端の断面は楕円形、胴部に挟りが入っている。割れ口に近接して、両側穿孔の孔が開けられている。身は8面体に削られ斜位の擦痕が残っている。端部の木口には円形の孔が開いている。

槌形磨製石器

941は石質不明。被熱して赤黒い。胴は円柱状に面取り整形。木口2箇所あり。朱が多量に付着していた。朱潰し用のハンマーか。副葬品か。

石棒

942は粘板岩製の石棒。一端が残っている。先端の断面は円形、胴部は楕円形を呈する。割れ口に近接して、両側からの穿孔。身は8面体に削られ斜位の擦痕が残っている。

5. 能登川コレクション

石器についてのまとめ

今回対象としたものは、コレクション内の恵山貝塚出土石器に限定されるのだが、その資料について思うところをまとめる。

石鏃は81点、その8割が完全といって良い形で残されている。完形とはこの場合、破損箇所のないもの、または破損箇所の再加工がないものをよんでいる。石鏃類の一番の特徴は薄いこと。身の軸となる中心が僅かにふくらみ、先端と側縁はごく薄く、直線的な刃部が片面あるいは両面からの調

整により作られている。形態は茎のある細めの二等辺三角形が最も多く、断面はごく薄いレンズ状。当該時期の石鏃の特徴がよく表れているが、未使用と見られるものが多、能登川氏の調査記録にあるとおり、墓坑からの出土品であることを裏付けていると考えられる。

石槍は、基部の太さに特徴がある。幅広で身幅とほとんど差がない。平面形は有茎で先端が幅広い石銛状になるものと平面は逆刺の弱いひし形か逆刺のない柳葉形が多く、先端よりも側縁に鋭いどさのある資料が目立つ。腹面は平坦で、周縁に加工を施すものが多い。身部は全体的に小さい。石鏃ほどの形状の統一感はなく、分類方法に問題があるのかもしれないが、縄文期よりも量が少なく、複数の形と種類が見られる。

石錐・ドリルはシャフトだけのものを含め、全面を加工し先端を利用している。軸だけの物は、当然柄をつけての利用が想定される。素材が堅く、軸の断面は三角、頭部で四角くなる。縄文期に比べ安直な加工をしているものは少ない。いずれにしても914-3・4・6など、それまでなかった管玉製作などに使用可能な特徴を備えている。

靴形石器は平面形状と刃部の形状で特徴づけることができる。太い基部や軸を持つということ自体、柄をつけたり、強い力がかけられることを示唆していることや、茎として柄に組み入れられることを示している。茎と身部とで色調の変わるものが多く見られるのはその証跡であろう。平面形状はバチ形、短冊形、へら形、靴形、ナイフ形で、刃部のつけ方により区別が可能である。特徴は腹面の処理の仕方で、素材の剥ぎ取りの湾曲を残したままのもの、周縁にのみ刃部を加工するもの、背腹両面から浅く加工して鋭い刃を残すもの。角度の深い刃がつけられ、スクレイパー状の力が入る

使い方が想定されるもの、腹面は剥離面のままで、石ベラやナイフのような使い方が想定されるもの。また、身に柄を付けたり、巻物を巻いた痕跡を残すものもある。金属器が入って来ることが想定される中、この靴形石器の薄く鋭い刃部の加工方法と、あるいは、鋭く強い刃部に柄を使う作り方が、縄文時代の生活文化との変化を示す道具の一つではないかと推測される。

スクレイパー類は縄文時代と形状の変化が見られない。これは、狩猟文化として変わらず使われ続けてきたものだと捉えることができる。加えて、一方では出土する数量が圧倒的に少ない。これは、集落からの出土遺物とは異なることを前提に捉える必要があることを意味する。

スクレイパーとして分類されている剥片石器の中で同じ特徴を持った一群がある。916-1、916-2、916-4、916-5、916-6、916-7、916-9、916-10、916-12、916-13、916-14、916-15、916-16、916-23、916-24、916-31、916-34、916-50、916-52、916-54、916-65、916-72で、いずれも厚みのある断面三角の縦長剥片を使い、先端に刃部を持っている。一様に小型で、刃部調整は背面にからなされている。素材に厚みがあるのは、相当な力がかけられるためであろうから、頭部は基部状に加工され、柄をつけて利用したと推察されるのである。小形であるのも特徴で、加工の対象として想定されるのは鹿角など、骨角器素材の作成用と推察される。

石斧類はほとんどが片刃で、擦切技法による製作が続いている。短いものが多く、手斧のような使われ方をしていたのであろうか。能登川隆氏の記録にも土坑からの出土品の中に石斧が入っている。副葬品として適切だったのか。あるいは廃棄されたものが発見されているということなのか、再加工のためのデポジットにあたったのか検

討を要する。形状としてはバチ形・短冊形が多く、薄いものが多い。研ぎ痩せしたものを副葬したのであろうか。小形のものも片刃で、擦り切りによる整形痕をもつもの、朱潰し痕を持つものなどが見られる。

魚形石器は副葬品とみられる出土品が多い。粗製品と精製品に分けられ、朱彩あるいはその痕跡を残すものが多い。形状は、同時期の内浦湾で発見されるものと比べても、若干ではあるが市内湯川など地域的なまとまりが認められる。先端頭部に面取りをの加工、いわゆる”継ぎ”が作られたり、粗製品と精製品が認められるということは、実用品としての利用が想定されるのであるが、利用方法は特定できない。

全体の傾向としていえるのは、器種に偏りが見られることである。剥片石器類で石鏃・石槍・石錐・靴形石器・スクレイパーの5種、礫石器・磨製石器類で環状磨製石斧・磨製石斧・魚形石器・石棒類の4種類である。生活にみられる礫石器類がほぼ存在していない。資料の多くが、墓域あるいは墓坑からの出土品としての性格を持っていると位置づけることができるであろう。また、大量の黒曜石や頁岩のフレーク類が含まれていないことにも、恵山貝塚期の特徴としてあげることができる。

能登川コレクションの価値は、まず、学史的に貴重なものであるということ。さらに、骨角器や土器と合わせたコレクション全体から見ると、質量ともに北海道南部の縄文時代前半期を代表する遺物群であること。資料群は墓壙からの出土品であるという性格を強く持っていることが理解されるのである。今回取り上げた石器の中では、骨角器の加工用と推される一群の石器が注目すべき一群で、今後資料の検討や検証とともに、出土資料の増加を待ちたい。一方、資料の最も大きな課題は、恵山貝塚における能登川氏らの調査地点の特定である。

調査地点の状況の把握ができれば、資料の性格付けも、より正確なものになるが現段階では致し方ない。

さて、能登川隆氏であるが、当初独学で始め、山内清男に師事しながら昭和17年(1942)、恵山貝塚の調査で得た遺物をまとめ『北海道恵山先史遺物図集』を自費で出版、公開した。山内が全国で行ってきた調査結果をまとめ、積み上げて報告したように、恵山貝塚の成果も公表することが調査者の当然の責務と捉えていたからであろう。山内清男は当時主流であった生物分類学・比較解剖学・遺伝学・自然人類学や欧米の先史考古学、民族学の知識を考え合わせて日本考古学を確立した一人である。能登川氏の残したノートや手帳、スケッチブックには、自分の得た知識や興味のある記事の切り抜き、書き込みが残されている。山内に及ぶものではないが、興味や分析方法もとてもよく似ていることがわかる。氏は大学で考古学や民族学研究のための方法論を学んだこともなく、現代のような組織的な発掘調査も経験したことはもちろんない。しかし、自ら目標を掲げ、恵山貝塚の調査に打ち込んだことによって、遺跡の研究は大きく前進した。函館考古会、さらに先史考古学会へ入会し、研鑽を続けながら遺跡に相對したのである。報告されている成果を見ても、昭和初期という時代は、実に国の研究機関ではなく、全国にあった民間の学会が全体をリードしていた。『北海道恵山先史遺物図集』の刊行は、山内清男を手本とし、人類学や考古学・民族学を学び、自ら掲げた「先住民族への課題」⁽²³⁾に対して答えを求めたのは、研究者たんとする能登川の姿勢そのものといえる。もちろん、氏の方法論や調査そのものは100年前のもので、現在とは比ぶべくも無いものかも知れない。しかし現在の私たちの調査であっても、100年後の考古学や学徒に

とって、十分な要素を満たしている確証が無いことを忘れてはならない。

氏の収集した資料群は、学史的に意義を持つだけでなく、形状、文様、技巧、考古資料としても、また美術資料としても見るものを引き付ける。氏がいかにしてこれほど優れた資料を発掘し、手にし得たのか、それを一言で裏付けるような合理的な説明はつけがたい。一つ一つの事情や経緯は異にするのであろうが、これは馬場コレクション⁽²⁴⁾を収集した馬場脩や、児玉コレクション⁽²⁵⁾と呼ばれる資料群を函館へもたらしてくれた児玉作左衛門と共通するところでもある。これほどの資料が集まる背景には、遺跡への観察眼と探求心があつたと考えられるのである。能登川コレクションの持つ資料の力と魅力は、現在の私たちが失ってしまった、遺跡と向き合う圧倒的な熱量なのかもしれない。

氏が掲げた先住民族研究に対する問いへの回答に、この資料群の検討は避けては通れないのである。

氏の没後、妻の米さんが「故人の意思だから」「地元のもの地元へ」と氏の言葉を伝えている。それは氏が掲げた「志」であり、米さんが志を支え氏の真価を理解していたからの言葉であつたと推し量られる。

注

- (1) 能登川コレクションは、考古遺物を中心とした資料群と、1. 日記・2. 手帳・3. スケッチブックほか12件の「能登川隆研究資料」、97冊の文献からなる「能登川文庫」がある。遺跡からの出土資料は、恵山貝塚出土品（続縄文前期主体骨角器他）の他には、大潤出土資料（縄文時代晩期土器）、古武井出土資料（縄文時代前期～晩期土器他）、長木川出土資料（縄文時代後期土器）、日の浜出土資料（縄文時代晩期土器土製品他）、函館市春日町一現青柳町一出土資料

（縄文時代早期土器）、住吉町遺跡出土資料（縄文時代早期土器他）他に、楳法華村楳法華出土資料（縄文時代早期末葉、前期初頭気土器）などがある。

- (2) 北海道新聞記事昭和34年（1959）7月16日
「今年五月、夫人米さん（52）が『故人の意思だから・・・』と一切函館博物館に寄贈、」とある。

北海道新聞記事昭和35年（1960）1月1日
「能登川さんは一昨年五月一万点あまりの収集品と未完の図集を残し志を果たさないまま死亡、これを夫から受けついで未亡人の米さん（53）が昨年亡夫の一周忌にあたって『故郷のものは故郷に・・・』と一切を市立函館博物館に寄贈した。」とある。

- (3) 恵山貝塚 遺跡台帳搭載番号B-01-195
北海道指定史跡、北海道函館市字恵山308番地の2ほか。

発掘調査は昭和5年（1930）、10～15年（1935～1940）、26年（1951）、昭和34年～36年（1959～1961）、昭和41年（1966）、昭和58年（1983）、平成15年、16年（2003、2004）には北海道教育庁主体で重要遺跡調査が実施されている。

- (4) 恵山文化期骨角製品506点、並びに恵山貝塚出土遺物を中心とする恵山式土器一括資料62点は、昭和37年（1962）函館市指定有形文化財となり、また、恵山貝塚から出土した土器は、「亀ヶ岡式」の特徴を持つ一方で後北式の特徴を備えていることから、名取武光氏により「恵山式土器」と名付けられる。恵山貝塚は続縄文時代前半期を代表する遺跡として、昭和42年（1967）3月に北海道指定史跡となった。『恵山』は続縄文前半を象徴する用語となる。

- (5) 前掲注（1）

- (6) 前掲注（1）〇み「マルミ精肉店」。創業は明治12年。能登川家は滋賀県から移住。当初西川町に本店があり、末広町の丸井今井デパート内のテナントなど支店があつ

た。昭和9年(1934)の大火で消失後は大門(松風町)の表通り角に鉄筋3階建ての店を構え、戦後裏通りに木造3階建ての新店舗を建てた。(アドベントカレンダー道南ブロック博物館施設等連絡協議会ブログ第5回「肉屋の社長の考古学」大矢京右より)

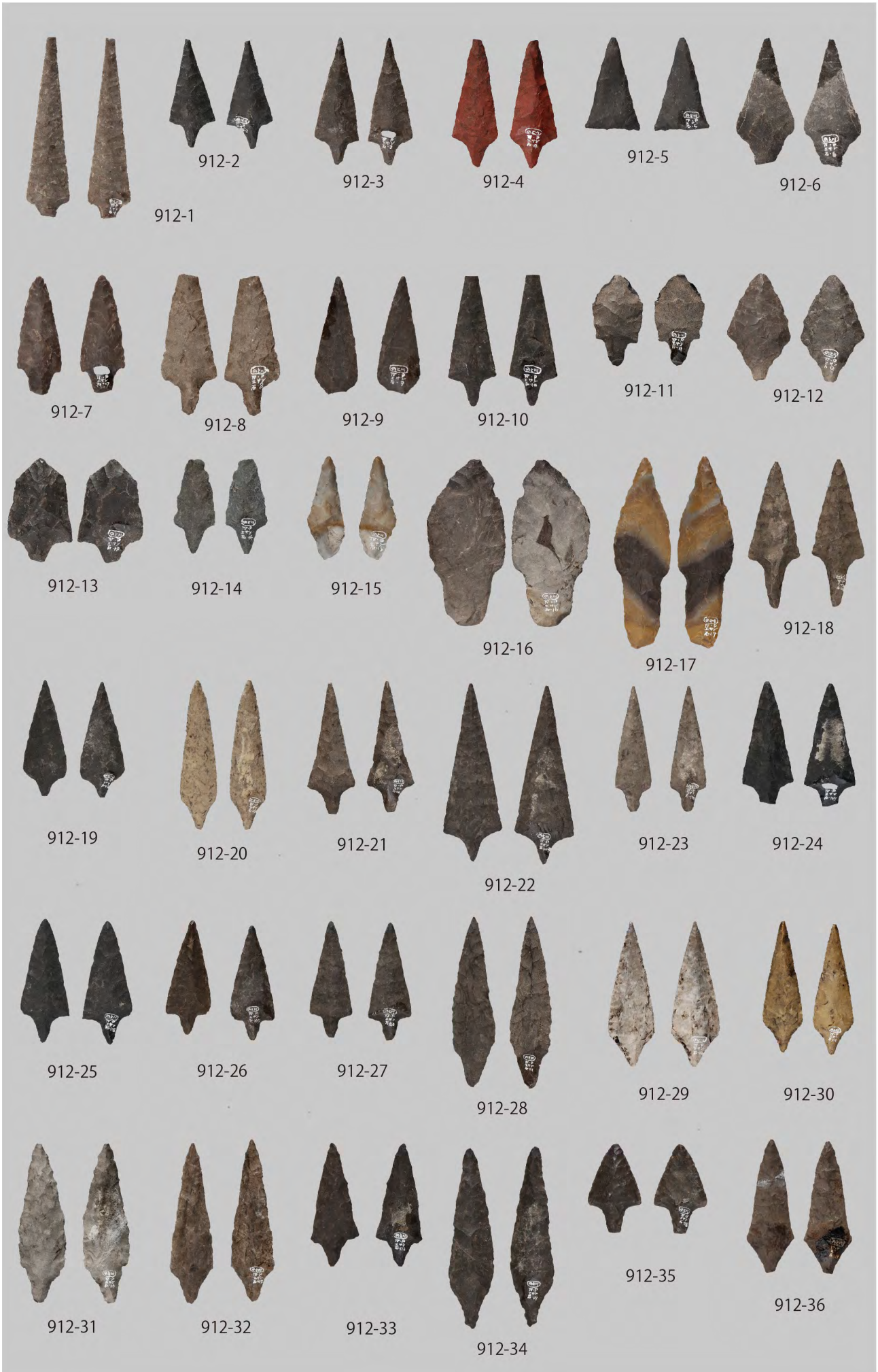
- (7) 函館考古会 函館考古会は明治42年(1909)2月、私立函館図書館の岡田健蔵館長に対し、馬場脩が函館考古会の設立を提唱し結成した。これは馬場脩1979「北方民族の旅」北海道ライブラリー14.北海道出版企画センターに詳しい。会員組織による函館考古会は昭和7年(1932)4月16日発足。会員には馬場脩、深瀬春一、伊藤昌吉、谷敬一、能登川隆、落合計策、阿部龍吾らがいた。第1回の研究調査は亀田の桔梗サイベ沢遺跡で、北海道で初めて縄文人骨1体分が発掘されている。同年7月18日から開催された「はこだて先住民遺物展」では「郷土先住民遺物展覧会梗概」と「函館古譚石器時代付図」が発行され、こうした活動を通じ当時の函館考古会と中央の研究機関との交流ができ、『史前学雑誌』第3巻に函館の谷敬一が「北海道石器時代遺物発見地表」を発表、上磯の落合計策が添山や久根別出土の土器を同研究所に送り、甲野勇が同誌第4巻に「北海道上磯町発見の縄文式土器」を報告した。(函館市編, 1980, 『函館市史通説編』第一巻:152~155より引用)
- (8) 大正9年(1920)人口144,740人(全国第9位)『第1回国勢調査概況』(函館区役所)、大正14年(1825)人口163,972人(全国第9位)大正14年国勢調査概況、昭和5年(1930)197,252人(全国第10位)「昭和10年国勢調査報告」(総理府統計局)
- (9) サイベ沢遺跡 遺跡台帳搭載番号B-01-082 函館市桔梗町1丁目145-1ほか、昭和24年当時は、亀田村西桔梗。標高25mの舌状台地の北側にあつて、約15haの広大な

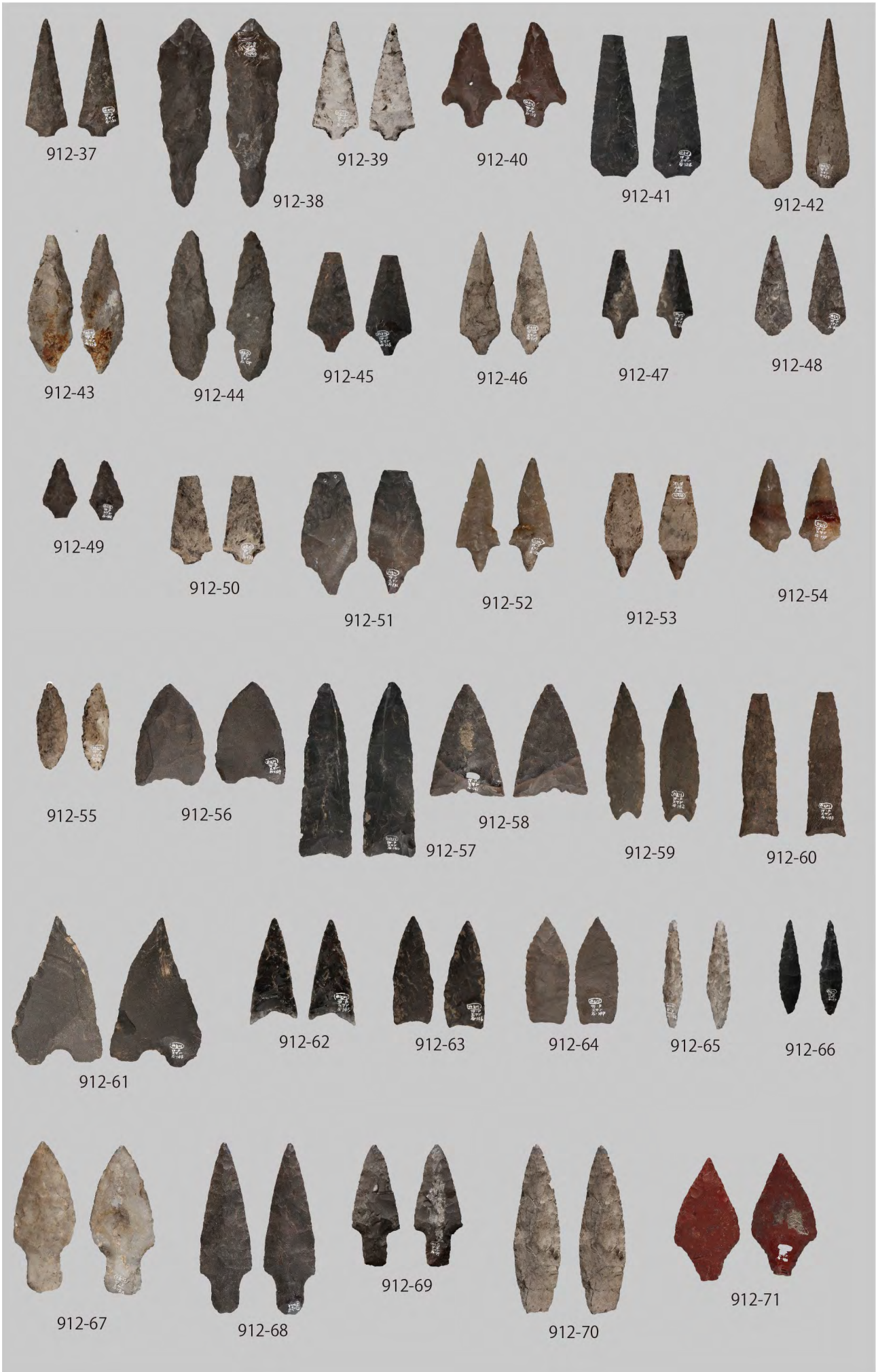
面積が遺跡となっている。明治20年頃から土器や石器などの遺物が出土し、注目を集めた。昭和24年(1949)市立函館博物館が調査主体となり、北海道大学教授の児玉作左衛門と同大学助手の大場利夫の指導の下、函館市内や札幌の中学生、高校生、市民ら延べ1,335人が参加して45日間にも及ぶ大規模な調査が実施された。(函館市編, 1980, 『函館市史 通説編』第一巻:208~209より)

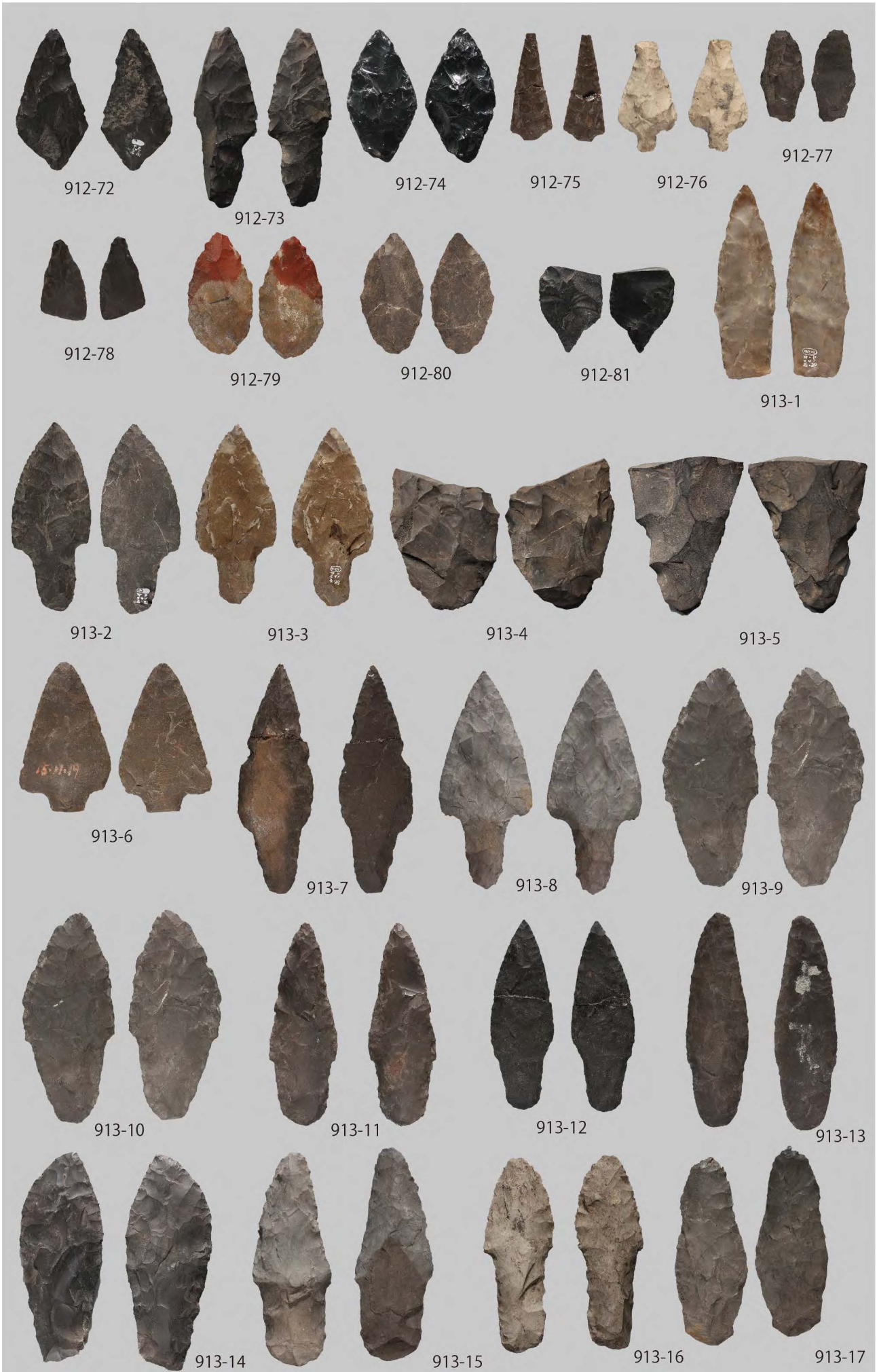
- (10) 馬場脩, 1931, 「住吉町遺跡の調査報告」『北方郷土』2巻2号,函師郷土研究会より引用
- (11) 前掲 昭和7年『函館古譚石器時代付図』
- (12) 前掲 (10) より引用
- (13) 前掲 (10) より引用
- (14) 函館市編, 1980, 『函館市史 通説編第一巻第二節』:144~146より
- (15) 「函館公園から西へ約100メートル坂を下ると亀井勝一郎の文学碑を囲む小公園があり、ここから宝来町に下る坂をアサリ(蛸)坂と呼ぶが、これは貝塚のアサリの貝殻が一面に散らばっていたところから名付けられたものである。この貝塚は坂下の天祐寺境内にまで広がる規模の大きな貝塚で、近年まで道路上に貝塚が散らばっていたのが見られた。天祐寺境内の貝層は昭和34年(1959)11月本堂新築工事の際に発見されたが、保存状態が極めて良好で厚さ44センチメートルの純貝層に、獣骨、鳥骨、魚骨と土器、石器、骨角器などを含む典型的な貝塚である。(函館市編, 1980, 『函館市史通説編第一巻第二節』224より引用)
- (15) 函館は安永年間より明治40年(1907)までの間に100戸以上の建物を焼失した火事が、記録に残されているだけでも19件ある。函館山西側市外を中心とした地域は被災後の整地作業により地下遺構は大きな影響を受けたものと見られる。(函館消防本部編, 1937, 『函館大火史』より引用)
- (16) 前掲 (1) 能登川コレクションには考古

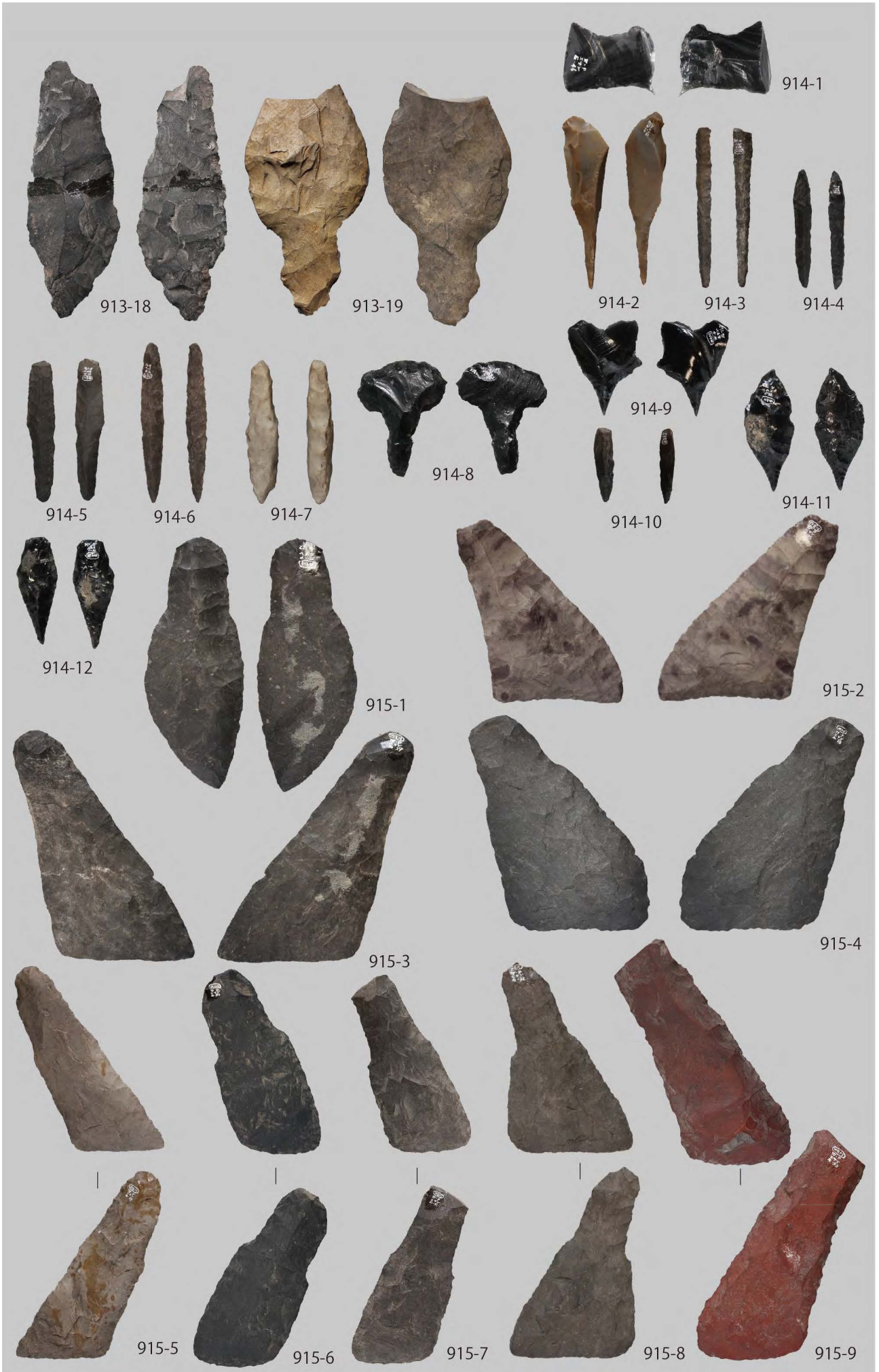
- 遺物を中心とした資料群のほかに、1. 日記・2. 手帳・3. スケッチブックほか12件の「能登川隆研究資料」と97冊の文献からなる「能登川文庫」がある。
- (17) 前掲(3)「能登川隆研究資料」2の手帳の記載による。
- (18) 前掲(3)「能登川隆研究資料」5の「尖底土器ノート」の記載による。
- (19) 冷水川遺跡は能登川氏の命名と推測される。昭和36年の分布調査によって冷水川を中心に段丘上には恵山貝塚を中心に500mの範囲に恵山2遺跡、恵山3遺跡、恵山4遺跡、恵山5遺跡、恵山6遺跡、恵山7遺跡が所在している。
- (20) 西脇対名夫, 2005, 「能登川隆氏日記の考古学・人類学関係記事」『市立函館博物館研究紀要』第15号による。
- (21) 市立函館博物館, 1994, 『藏品目録 7 考古資料篇』
- (22) 「バリ状」という表記は、「burri」、刃部の薄く鋭い手触りから、鋳型からはみ出した極薄の滓やメクレを例えて記載した。未使用製品。薄い素材に浅いリタッチで直線的な刃部を形成するのは、この時期の特色の一つと見られる。
- (23) 前掲(1)手帳などの記載でたびたび取り上げられている課題が「先住民族」についての意見と見解であった。
- (24) 馬場コレクションは函館出身の北方民族研究者、馬場脩氏が、昭和5年(1930)から10年前後にかけて、樺太や千島・北海道を調査し、収集した資料群。特に樺太や千島で収集したアイヌ民族資料は昭和34年(1959)、国の重要有形民俗文化財に指定されている。
- (25) 北海道大学名誉教授だった児玉作左衛門氏が、アイヌ民族研究の中で、海外流出などの資料散逸をおそれ、私財を投じ収集したアイヌ民族資料。その資料は、わが国におけるアイヌ民族研究の基本をなす貴重な資料として、「児玉コレクション」と呼ばれる。(市立函館博物館編, 1983, 『児玉コレクション目録 I 先史・考古目録』より)
- 引用・参考文献
- 山内清男, 1929, 「関東北に於ける繊維土器について」『史前学雑誌』第1巻第2号.
- 馬場修, 1931, 「函館住吉町遺跡について」『北方郷土』第2巻第2号, 函師郷土研究会.
- 大場利夫・竹田輝雄, 1961, 「住吉町式土器をめぐる貝殻文土器の展開」民族学研究26.
- 山内清男, 1933, 「日本遠古の文化」『ドルメン』2ノ2:49-53.
- 名取武光・峰山巖, 1962, 『アヨロ』北方文化研究報告17, 北海道帝國大學北方文化研究室.
- 高橋正勝, 1980, 『アヨロ』, 白老町教育委員会.
- 藤原哲夫・国分谷盛明, 1969, 『5万分の1地質図幅説明書 恵山(札幌一第87号)』, 北海道立地下地質調査所.
- 馬場脩, 1979, 「北方民族の旅」北海道ライブラリー14.
- 函館市編, 1980, 『函館市史 通史編』第一巻.
- 市立函館博物館編, 1983, 『児玉コレクション目録 I 先史・考古目録』.
- 小笠原忠久, 1984, 『恵山貝塚』尻岸内町教育委員会.
- 千代肇, 1988, 「仮称恵山式土器一名取武光先生とその後の展開-」『北海道考古学』24号.
- 財団法人北海道埋蔵文化財センター, 2004, 「恵山町 恵山貝塚」『重要遺跡確認調査報告書』第4集.
- 西脇対名夫, 2005, 「能登川隆氏日記の考古学・人類学関係記事」『市立函館博物館研究紀要』第15号.
- 財団法人北海道埋蔵文化財センター, 2005, 「恵山貝塚Ⅱ」『重要遺跡確認調査報告書』第5集.
- 大矢京右, 2016, 「肉屋の社長の考古学」アドベントカレンダー道南ブロック博物館施設等連絡協議会ブログ第5回.

(市立函館博物館学芸員)

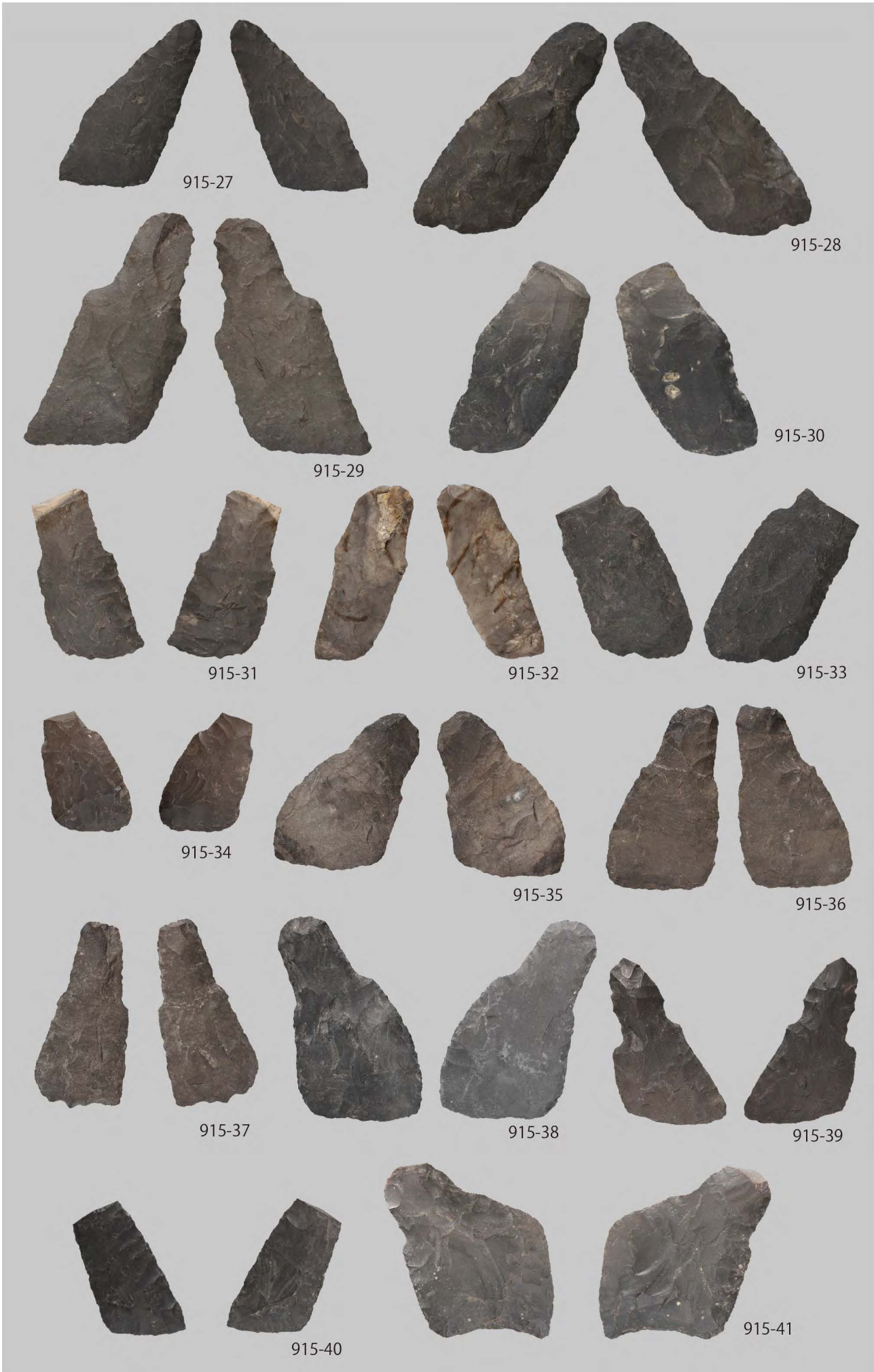
















916-6

916-7

916-8

916-9

916-10

916-11

916-12

916-13

916-14

916-15

916-16

916-17

916-18

916-19

916-20

916-21

916-22

916-23

916-24

916-25

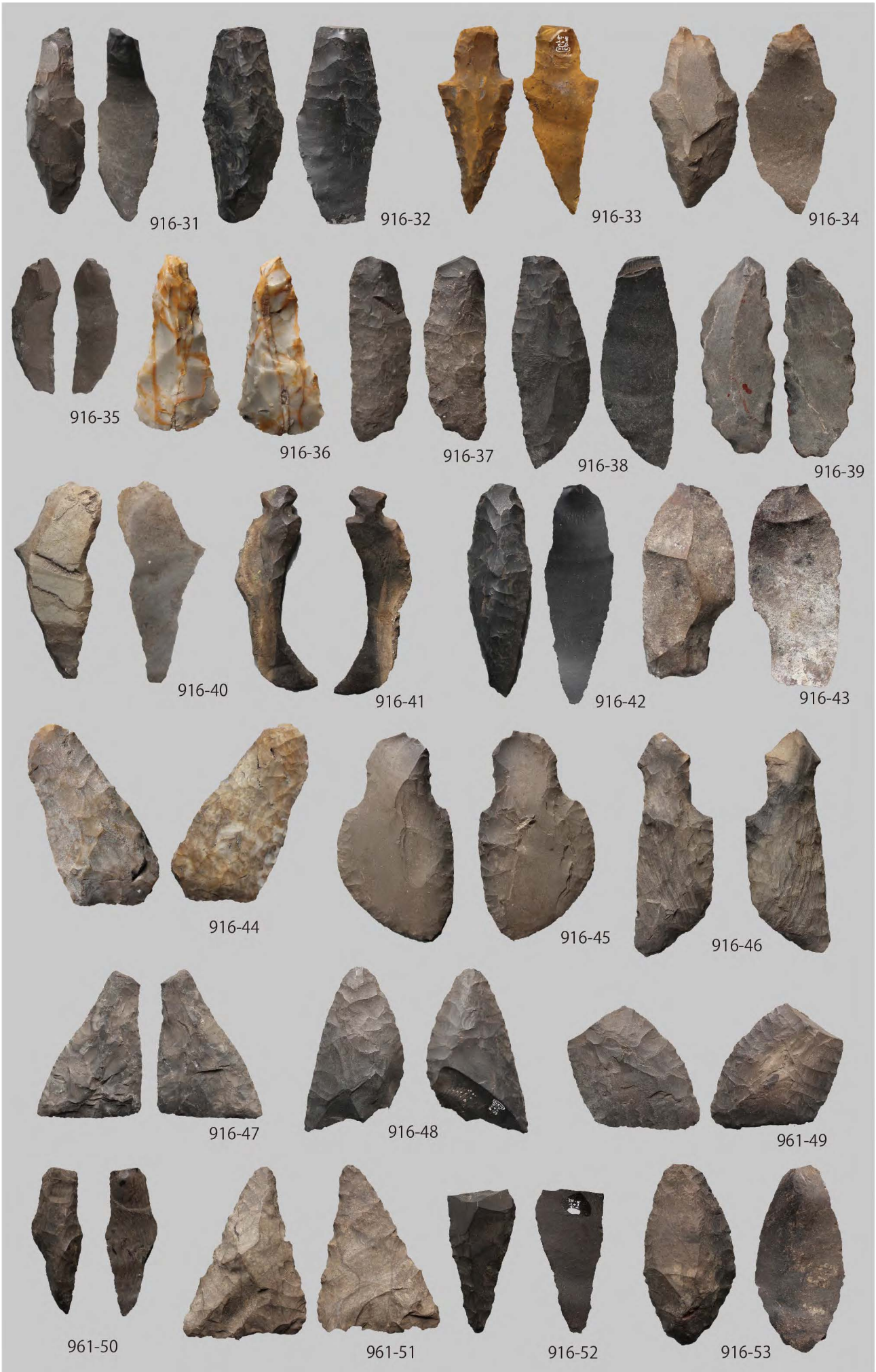
916-26

916-27

916-28

916-29

916-30







917



919-1



918



919-2



919-3



919-4



919-5



919-6



919-7



919-8

919-9



919-10

919-11



919-12

919-13



919-14

919-15



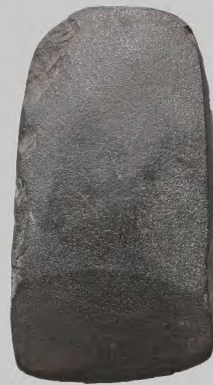
919-16



919-17



919-18



919-19



919-20



919-21



919-22



919-23



919-24



919-25



919-26



919-27



919-28



919-29



919-30



919-31





922



923



924



925



926



927



928



929



930



931

932



933

934



935

936



937-1

937-2



937-3



937-4



937-5



938-1



938-2



939-2



939-1



939-3



939-4

941



940



942

目録器種	目録番号	枝	長 (cm)	幅 (cm)	厚高 (cm)	石質	備 考
石 鎌	912 - 1		(4.6)	1.1	0.3	頁岩	先端・茎欠、長く薄い。
石 鎌	912 - 2		2.7	1.15	0.3	頁岩	完形、薄い。
石 鎌	912 - 3		3.3	1.15	0.3	頁岩	完形、薄い、先端付着物か。
石 鎌	912 - 4		(3.3)	1.2	0.5	頁岩	先端欠、赤色。
石 鎌	912 - 5		3.3	1.3	0.5	頁岩	完形、赤色。
石 鎌	912 - 6		(3.2)	1.5	0.4	頁岩	基部欠、薄く鋭い。
石 鎌	912 - 7		(3.1)	1.2	0.4	頁岩	基部欠、薄く鋭い。
石 鎌	912 - 8		(3.6)	1.4	0.45	頁岩	先端部欠、薄く鋭い。
石 鎌	912 - 9		(3.1)	1.0	0.3	頁岩	基部欠、薄く鋭い
石 鎌	912 - 10		(3.4)	1.2	0.3	頁岩	完形、先端部欠、薄く鋭い
石 鎌	912 - 11		(2.7)	1.4	0.6	頁岩	先端欠、五角形、薄い。
石 鎌	912 - 12		2.7	1.6	0.7	頁岩	菱形、器厚有、最大幅は中央。
石 鎌	912 - 13		(2.7)	1.7	0.5	頁岩	基部欠、裏平坦、五角の鉄鎌形。
石 鎌	912 - 14		(2.5)	1.1	0.4	頁岩	先端部欠、薄く小型。
石 鎌	912 - 15		(2.6)	0.9	0.4	頁岩	基部欠、棒状。
石 鎌	912 - 16		4.3	2.2	0.4	頁岩	完形、ごく薄い。
石 鎌	912 - 17		4.8	1.3	0.5	頁岩	完形、ペン先状。
石 鎌	912 - 18		3.8	1.5	0.5	頁岩	完形、先端鋭い。
石 鎌	912 - 19		3.1	1.6	0.35	頁岩	完形、ごく薄い。
石 鎌	912 - 20		3.9	0.95	0.35	チャート	完形、細くごく薄い。
石 鎌	912 - 21		3.9	1.95	0.55	頁岩	完形、薄く鋭い。
石 鎌	912 - 22		4.55	1.95	0.45	頁岩	完形、薄く鋭い。
石 鎌	912 - 23		3.35	0.85	0.3	頁岩	完形、薄く鋭い。
石 鎌	912 - 24		(3.2)	0.85	0.35	頁岩	基部欠、薄く鋭い、裏面に獣毛付着。
石 鎌	912 - 25		3.3	1.38	0.35	頁岩	完形、薄く鋭い。
石 鎌	912 - 26		2.9	1.1	0.35	頁岩	完形、裏面平坦、薄い。
石 鎌	912 - 27		3.0	1.1	0.38	頁岩	完形、裏面平坦、薄い。
石 鎌	912 - 28		4.4	1.3	0.48	頁岩	完形、やや薄、裏面平坦。
石 鎌	912 - 29		3.7	1.3	0.4	チャート	完形、裏面平坦、薄く先端ごく鋭い。
石 鎌	912 - 30		3.3	1.05	0.35	チャート	完形、裏面平坦、薄く先端鋭い。
石 鎌	912 - 31		4.1	1.3	0.55	頁岩	完形、裏面平坦、先端鋭い。
石 鎌	912 - 32		4.1	1.1	0.5	頁岩	完形、裏面やや平坦。
石 鎌	912 - 33		3.2	1.2	0.35	頁岩	完形、薄く鋭い。刃部プロペラ状の加工。
石 鎌	912 - 34		4.7	1.3	0.5	頁岩	完形、裏面平坦、薄い、断面△。
石 鎌	912 - 35		2.2	1.4	0.45	頁岩	完形、小型、裏面平坦、断面カマボコ状。
石 鎌	912 - 36		(13.4)	11.3	0.43	頁岩	基部欠け、タール付着、裏面平坦、断面カマボコ状。
石 鎌	912 - 37		(3.1)	1.2	0.38	頁岩	基部欠、剥片薄く鋭い、裏面平坦で断面カマボコ状、先端に黒色の付着物。
石 鎌	912 - 38		4.7	1.5	0.6	頁岩	完形、ペン先状の形状。裏面平坦。
石 鎌	912 - 39		(3.0)	1.3	0.5	チャート	基部先端欠、軸折れ後接合、剥片裏面平坦、断面カマボコ状。
石 鎌	912 - 40		2.6	1.6	0.45	頁岩	基部折・直し、断面レンズ状。
石 鎌	912 - 41		(3.8)	1.4	0.3	頁岩	先端・基部欠、剥片薄く断面レンズ状。
石 鎌	912 - 42		(4.9)	1.3	2.8	頁岩	基部欠、基部裏平坦、薄くて刃部鋭い、断面浅いかマボコ状。
石 鎌	912 - 43		4	1.2	0.55	頁岩	完形、平面柳葉状、裏面平坦、剥片薄く刃部鋭い。
石 鎌	912 - 44		4.3	1.5	0.55	頁岩	完形、ペン先形、裏面平坦。
石 鎌	912 - 45		(2.8)	1.4	0.35	頁岩	先端・基部欠、剥片薄く朱付着。
石 鎌	912 - 46		3.6	1.3	0.4	チャート	完形・剥片薄く基部小さい、断面浅いかマボコ状。
石 鎌	912 - 47		(2.6)	1.1	0.38	頁岩	先端欠、薄いが断面レンズ状、周縁刃部鋭い。
石 鎌	912 - 48		(3.1)	1.2	0.38	頁岩	基部欠、やや薄く断面レンズ状。
石 鎌	912 - 49		(1.7)	1.1	0.32	頁岩	小型、基部欠、断面レンズ状。

目録器種	目録番号	枝	長 (cm)	幅 (cm)	厚高 (cm)	石質	備 考
石 鎌	912 - 50		(2.5)	1.1	0.7	チャート	先端・基部欠、薄いが断面レンズ状。
石 鎌	912 - 51		(3.4)	1.5	0.5	頁岩	先端部欠、裏面やや平坦、大きさの割に剥片薄い。
石 鎌	912 - 52		3.3	1.2	0.35	チャート	完形、裏面平坦、左側面作り直し。
石 鎌	912 - 53		(2.9)	1.1	0.3	チャート	先端欠、裏面平坦、基部にタール、柳葉形。
石 鎌	912 - 54		(2.6)	(1.2)	4.8	メノウ	基部欠、裏面平坦。
石 鎌	912 - 55		2.5	0.9	4.5	チャート	完形、小型、裏面平坦。
石 鎌	912 - 56		3.0	2.1	0.29	頁岩	完形、凹基、剥片薄くねじれ強い。
石 鎌	912 - 57		5.2	1.5	0.6	頁岩	完形、凹基、長く裏面平坦、基部左作り直し。
石 鎌	912 - 58		3.1	2.2	0.25	頁岩	完形、三角鎌、凹基、剥片薄い。
石 鎌	912 - 59		3.9	1.2	0.42	頁岩	完形、凹基、柳葉形、剥片やや薄い。
石 鎌	912 - 60		(4.2)	1.1	0.26	頁岩	先端欠、凹基、柳葉形、細く薄い、裏面加工無し。
石 鎌	912 - 61		4.3	2.6	0.26	頁岩	先端欠、凹基、UF?。
石 鎌	912 - 62		2.9	1.4	0.29	黒曜石	完形、凹基、ごく薄く鋭い。
石 鎌	912 - 63		3.2	1.1	0.32	頁岩	完形、裏面平坦、凹基、側縁鋭い。
石 鎌	912 - 64		3.3	1.5	0.28	頁岩	完形、裏面平坦、平基、側縁鋭い。
石 鎌	912 - 65		3.2	0.8	0.5	頁岩	完形、棒状、断面レンズ状。
石 鎌	912 - 66		3.7	0.9	0.5	頁岩	完形、棒状、断面レンズ状。
石 鎌	912 - 67		4.7	2.1	0.72	チャート	完形、裏面平坦、基部太い。
石 鎌	912 - 68		5.8	1.9	0.6	頁岩	完形、大型、断面レンズ状。
石 鎌	912 - 69		4.5	1.8	0.5	頁岩	完形（折れて接合）、断面レンズ状。
石 鎌	912 - 70		6.0	1.8	0.6	頁岩	完形、裏面平坦、断面カマボコ状。
石 鎌	912 - 71		3.8	2	0.21	頁岩	完形、裏面平坦、素材薄い。
石 鎌	912 - 72		4.4	2.2	0.5	頁岩	完形、背面剥離、断面レンズ状。
石 鎌	912 - 73		(5.1)	(1.8)	0.7	頁岩	先端欠、左側破損、裏面平坦、基部抉り入り。
石 鎌	912 - 74		(4.6)	2.7	0.7	黒曜石	基部欠、薄く断面レンズ状。
石 鎌	912 - 75		(3.2)	1.3	0.4	頁岩	基部・先端欠、中折れ接合。
石 鎌	912 - 76		3.3	1.8	0.6	チャート	先端直し。
石 鎌	912 - 77		2.8	1.4	3.2	頁岩	器種不明、素材薄い。
石 鎌	912 - 78		2.5	1.3	2.9	頁岩	完形、素材薄い、周縁に刃部加工。模造品か。
石 鎌	912 - 79		3.8	2.1	0.6	頁岩	完形、槍先? 剥片薄い。
石 鎌	912 - 80		3.7	2.1	0.6	頁岩	完形、裏面平坦、左上直し。
石 鎌	912 - 81		(2.7)	2.0	0.39	頁岩	先欠、薄い、腹面平坦。
石 槍	913 - 1		5.9	1.8	0.6	チャート	完形、両側面カミソリ状に刃部薄く鋭い、断面レンズ状。
石 槍	913 - 2		7.2	3.1	0.7	頁岩	完形、小型で有茎、先端は幅広で石銚状、断面はカマボコ状、茎にはアスファルトが付着している。
石 槍	913 - 3		6.6	2.8	0.9	チャート	完形、銚か、腹面平坦、軸太い。
石 槍	913 - 4		(5.3)	3.1	1.2	頁岩	上半欠槍かスクレイパー、断面はレンズ状。
石 槍	913 - 5		(5.5)	1.2	1.2	頁岩	上半部欠、槍の破片。断面はレンズ状。
石 槍	913 - 6		(5.5)	3.3	0.7	頁岩	基部と右の逆刺を欠く、有茎で石銚状。小さな基部が付く。先端に付着物。
石 槍	913 - 7		8.9	3.1	0.55	頁岩	完形、有茎で二等辺三角形、腹面には周縁と先端だけに刃ナイフ的な使用方法も考えられる。
石 槍	913 - 8		8.2	3.5	0.95	チャート	完形、有茎で先端は幅広の石銚状。
石 槍	913 - 9		8.0	3.6	0.8	頁岩	完形、有茎で菱形、ナイフ的。
石 槍	913 - 10		7.8	2.8	0.6	頁岩	完形、槍先、二等辺三角形、区状の抉り。
石 槍	913 - 11		7.4	2.5	0.6	頁岩	完形。有茎、二等辺三角形か柳葉形、側縁はごく薄く鋭い。
石 槍	913 - 12		8.2	2.5	0.7	頁岩	完形、有茎、柳葉で逆刺はない、幅広の基部アスファルトの付着。
石 槍	913 - 13		7.1	2.9	0.7	頁岩	完形、ナイフ、薄い剥片の周縁に刃部。
石 槍	913 - 14		7.1	2.6	0.9	頁岩	完形、ナイフか、有茎、二等辺三角形、幅の広い基部。
石 槍	913 - 15		6.4	2.3	0.9	頁岩	完形、側縁鋭い。

目録器種	目録番号	枝	長 (cm)	幅 (cm)	厚高 (cm)	石質	備 考
石 槍	913 - 16		6.1	2.4	0.9	頁岩	ほぼ完形、有茎で先端は石銛状、側縁は薄く鋭い。
石 槍	913 - 17		5.3	2.6	0.9	頁岩	完形、有茎で石銛状、側縁は薄く鋭く基部は太い。
石 槍	913 - 18		(7.3)	1.2	1.0	頁岩	不定形のスクレイパー。一旦中程で折れ接合。
石 槍	913 - 19		19	4.0	0.8	頁岩	先端の欠けたスクレイパーか靴形石器。
石 錐	914 - 1		3.2	3.1	0.39	黒曜石	フレークの先端利用、浅い。
石 錐	914 - 2		6.5	1.6	0.2	頁岩	縦長フレークの先端利用、軸あり深い。
石 錐	914 - 3		5.9	0.6	0.2	頁岩	頭部欠、棒状、副葬品。
石 錐	914 - 4		5.7	0.3	0.3	頁岩	完形、棒状、両端。
石 錐	914 - 5		4.2	0.55	0.45	頁岩	完形、棒状、先端摩滅。
石 錐	914 - 6		5.0	0.5	0.45	チャート	石鏃か完形、棒状、摩滅痕なし。
石 錐	914 - 7		4.4	0.6	0.5	黒曜石	完形、棒状、シャフトの断面は方形、先端摩滅。
石 錐	914 - 8		3.9	3.1-0.5	0.5	黒曜石	完形、棒状。
石 錐	914 - 9		2.9	2.2	0.15	黒曜石	不定形剥片のドリル。
石 錐	914 - 10		3.5	0.5	0.1	頁岩	完形?握りつく?先端に黒色の付着物。
石 錐	914 - 11		3.5	1.6	10.15	黒曜石	完形、有茎、二等辺三角形か柳葉形、側縁はごく薄く鋭い。
石 錐	914 - 12		3.2	1.2	0.2	黒曜石	完形、断面三角。
靴形石器	915 - 1		7.0	2.8	0.6	頁岩	完形のナイフ形、身に太い基部あるいは茎が付く。
靴形石器	915 - 2		6.1	3.4	0.8	頁岩	完形のバチ形、頭部端をわずかに欠く、下縁の刃部は内反り。
靴形石器	915 - 3		6.9	3.8	0.6	頁岩	完形のバチ形。
靴形石器	915 - 4		7.2	4.6	0.9	頁岩	完形の靴形、大型で太い茎 刃部と基部の境界に弱い区がある。
靴形石器	915 - 5		6.7	2.6	0.6	頁岩	完形の短冊形、身の素材も薄い。
靴形石器	915 - 6		6.6	3.0	0.7	頁岩	完形の短冊形、頭部は太い基部あるいは茎となる。
靴形石器	915 - 7		(6.7)	3.0	1.0	頁岩	基部端を欠くヘラ形、刃部は下縁で刃先は右を向く。
靴形石器	915 - 8		5.2	3.5	0.6	頁岩	完形の靴形、刃部は下縁で刃先は右。
靴形石器	915 - 9		(7.7)	3.4	1.0	頁岩	赤色頁岩、頭部を欠くヘラ形、直線的な側縁、刃先は左。
靴形石器	915 - 10		6.9	3.9	1.0	頁岩	完形の靴形、太い茎付、全体に被熱痕、基部に巻きつけ痕。
靴形石器	915 - 11		6.2	2.8	0.55	頁岩	完形のヘラ形。素材は薄く、1/3程に区があり茎となる。
靴形石器	915 - 12		5.2	2.1	0.6	頁岩	完形のナイフ、太い茎、周縁は薄く、身は汚れ茎と色が異なる。
靴形石器	915 - 13		10.7	3.7	1.0	頁岩	完形の短冊形、縦型の剥片で頭部に挿れあるいは茎。
靴形石器	915 - 14		8.9	3.1	0.9	頁岩	完形のヘラ形。剥片厚い。太い基部あるいは茎付。
靴形石器	915 - 15		8.7	2.5	0.9	頁岩	完形のヘラ形、あるいは柄付きのナイフ。
靴形石器	915 - 16		(7.2)	2.4	0.9	頁岩	ほぼ完形の短冊形、あるいは柄付きのナイフ。
靴形石器	915 - 17		7.2	2.5	0.85	頁岩	完形のヘラ形、あるいは柄付きのナイフ、剥片は厚い。
靴形石器	915 - 18		7.6	3.2	0.65	頁岩	完形のスクレイパー、剥片薄い、基部あるいは茎付。
靴形石器	915 - 19		7.3	2.8	0.8	頁岩	完形のヘラ形、太い基部あるいは茎付、刃部は付け直し。
靴形石器	915 - 20		6.8	2.7	0.9	頁岩	完形のナイフ形、頭部は刃部との境界に区。
靴形石器	915 - 21		5.9	2.4	0.55	頁岩	ほぼ完形の小型のナイフ、刃部は下縁。
靴形石器	915 - 22		5.9	2.7	0.55	頁岩	ほぼ完形の小型のナイフ。
靴形石器	915 - 23		5.9	1.8	0.48	頁岩	完形の小型の柄付きナイフ。刃部は下縁。
靴形石器	915 - 24		5.6	3.5	0.9	頁岩	ほぼ完形の小型のヘラ。柄の端が欠けている。刃部は下縁。
靴形石器	915 - 25		6.2	2.3	0.6	頁岩	完形の小型ナイフ形。頭部は持ち手あるいは装着するための基部。
靴形石器	915 - 26		5.7	2.6	0.7	頁岩	完形の小型石ベラ形、フレーク薄い。
靴形石器	915 - 27		6.0	2.5	0.6	チャート	頭部がわずかに欠けるほぼ完形の小型ナイフ形。
靴形石器	915 - 28		7.7	3.4	1.2	頁岩	完形の石ベラ形、頭部は持ち手か基部、刃との区に挟り。
靴形石器	915 - 29		7.9	3.8	0.75	頁岩	完形の石ベラ形、頭部は持ち手か軸の基部、刃部は下縁。
靴形石器	915 - 30		(5.8)	2.8	0.8	頁岩	頭部が欠けた小型ナイフ形、下縁がU字状で刃先は左端。

目録器種	目録番号	枝	長 (cm)	幅 (cm)	厚高 (cm)	石質	備 考
靴形石器	915 - 31		(5.8)	2.2	0.8	頁岩	基部の頭端が折れた石ベラ形。
靴形石器	915 - 32		5.4	2.6	0.6	チャート	完形の小型ナイフ形、下縁がU字状の刃部。
靴形石器	915 - 33		(5.2)	3.1	(0.75)	頁岩	基部の頭端が折れた石ベラ形、基部にコテ状のヘラが着く。
靴形石器	915 - 34		(4.9)	3.1	0.55	頁岩	基部の頭端が折れた石ベラ形、ヘラはコテ状。
靴形石器	915 - 35		5.2	3.4	0.65	頁岩	完形の基部付き石ベラ形、刃部は下縁で刃先は左下に突き出す。
靴形石器	915 - 36		5.5	3.2	0.5	頁岩	基部の頭端がわずかに折れた靴形、ヘラはコテ状。
靴形石器	915 - 37		5.4	2.7	0.55	頁岩	基部の頭端がわずかに折れた石ベラ形、ヘラはコテ状。
靴形石器	915 - 38		6.4	3.4	0.6	頁岩	完形の基部付き石ベラ形、ヘラの左上部に基部が付けられている。
靴形石器	915 - 39		4.9	2.6	0.6	頁岩	完形の石ベラ形、基部は大きく、ヘラがかなりすり減っている。
靴形石器	915 - 40		4.4	2.3	0.55	頁岩	上部の折れたナイフ。刃部は下縁で刃先は右。
靴形石器	915 - 41		(5.4)	3.4	0.5	頁岩	完形、柄を左に、刃部は下縁に、刃先は右下を向いている。
靴形石器	915 - 42		4.6	2.7	0.55	頁岩	上部の折れたナイフ、刃部は下縁で刃先は右を向いている。
靴形石器	915 - 43		7.8	5.9	0.52	頁岩	完形の石ベラ形、スクレイパー状、刃先は右下を向いている。
靴形石器	915 - 44		5.7	4.2	0.55	頁岩	完形の石ベラ形、基部大きくヘラ減る、刃部は下縁で刃先は右下。
靴形石器	915 - 45		5.6	4.1	0.6	頁岩	完形のヘラ形、基部大きく、区状の挟り、バチ状のヘラ。
靴形石器	915 - 46		5.2	3.7	0.65	頁岩	頭部の折れたヘラ形、バチ状で刃部は下縁、刃先は左。
靴形石器	915 - 47		6.0	3.2	0.8	頁岩	頭部の折れたヘラ形、平面はバチ状で刃部は下縁。
靴形石器	915 - 48		4.5	2.3	0.7	頁岩	つまみ付ナイフ、腹面はフレーク面、刃先は右を向いている。
靴形石器	915 - 49		4.0	1.5	0.36	頁岩	小型のつまみ付ナイフ、腹面はフレーク、刃先は下。
靴形石器	915 - 50		(5.4)	2.7	0.7	チャート	基部端を欠くヘラ形、平面はバチ状、刃先は直線状。
靴形石器	915 - 51		5.1	2.8	0.65	頁岩	完形のナイフ。基部薄く槍の可能性。
靴形石器	915 - 52		(4.1)	1.6	0.6	頁岩	頭部・先端部を欠く石錐。周縁は背腹から刃部。
靴形石器	915 - 53		(3.9)	1.8	0.4	頁岩	スクレイパー。
スクレイパー	916 - 1		4.5	2.2	0.6	頁岩	小型で長軸の両端を欠く、頭部に基部風の軸のつくナイフ。
スクレイパー	916 - 2		(4.1)	2.0	0.4	頁岩	小型、長軸（柄）の頭部を欠くナイフかスクレイパー。
スクレイパー	916 - 3					頁岩	石ベラ、薄い縦型剥片の周縁に刃部が調整されている。
スクレイパー	916 - 4		4.2	1.8	0.6	頁岩	小型、長軸（柄）の頭部を欠くスクレイパー。
スクレイパー	916 - 5		(4.8)	1.3	0.5	チャート	小型、長軸（柄）の頭部を欠く。厚い素材のナイフかスクレイパー。
スクレイパー	916 - 6		(3.3)	1.4	0.7	頁岩	小型のナイフかスクレイパー。
スクレイパー	916 - 7		(3.8)	1.4	0.8	頁岩	不定形剥片のUFかスクレイパー。
スクレイパー	916 - 8		4.2	1.9	0.15	頁岩	不定形剥片のUFかスクレイパー。
スクレイパー	916 - 9		(5.5)	1.1	0.8	頁岩	小型、軸の頭部欠、縦長、刃先は下、腹面はフレークのまま。
スクレイパー	916 - 10		(3.9)	1.7	0.8	頁岩	小型、軸の頭部欠、基部風の幅広の握り、腹面はフレークのまま。
スクレイパー	916 - 11		4.2	3.3	0.7	チャート	小型で完形、柄付きのスクレイパー、刃部は断面楕円形。
スクレイパー	916 - 12		2.8	3.2	0.8	頁岩	小型でL字状、細い軸の先に小さな刃部。
スクレイパー	916 - 13		3.7	1.7	0.9	頁岩	完形でごく小さい、刃部は急角度、腹面はフレーク。
スクレイパー	916 - 14		(3.4)	1.7	1.1	頁岩	小型、L字状で握りの頭部が欠け、細い軸の先に小さな刃部。
スクレイパー	916 - 15		(3.1)	2.2	0.2	チャート	小型、11とよく似ているが素材が薄く、不定形剥片を利用したものかもしれない。
スクレイパー	916 - 16		(3.8)	2.2	0.38	チャート	完形で小型のバチ形、刃部は下縁で周縁は薄く鋭い刃。
スクレイパー	916 - 17		(4.5)	2.2	0.7	頁岩	頭部を欠く、区があるので靴形。
スクレイパー	916 - 18		(4.1)	2.5	0.6	頁岩	頭部を欠くバチ形の小型ヘラ、両面加工で刃部は下端。
スクレイパー	916 - 19		4.6	2.5	0.45	頁岩	小型、完形の柄付きコテ形。

目録器種	目録番号	枝	長 (cm)	幅 (cm)	厚高 (cm)	石質	備 考
スクレイパー	916 - 20		5.0	1.4	0.5	頁岩	不定形縦長剥片のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 21		5.5	1.7	0.4	頁岩	不定形縦長剥片のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 22		5.3	2.2	0.85	頁岩	小型、下端を尖らせる縦長剥片のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 23		5.2	1.7	1.0	頁岩	小型、下端を尖らせる縦長剥片のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 24		5.4	2.0	0.8	頁岩	小型、頭部欠ける、縦長剥片の下端を尖らせるスクレイパー。
スクレイパー	916 - 25		5.5	1.8	0.8	頁岩	完形、摘み付ナイフ、縦長剥片の下端を尖らせる。
スクレイパー	916 - 26		18.2	2.7	0.8	頁岩	完形、太い基部あるいは握りつきのナイフ形の靴形石器。
スクレイパー	916 - 27		5.7	2.7	0.7	頁岩	完形、スクレイパー、剥片やや薄い。
スクレイパー	916 - 28		5.5	2.2	0.4	頁岩	不定形縦長剥片のスクレイパー、刃部加工は背面。
スクレイパー	916 - 29		6.2	2.6	0.9	頁岩	完形の木葉形のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 30		5.9	1.9	0.9	頁岩	完形の縦長のナイフ。
スクレイパー	916 - 31		6.1	1.8	1.2	頁岩	完形の縦長のナイフ、刃部は側縁。
スクレイパー	916 - 32		(6.2)	2.3	1.2	頁岩	両端を欠く、先端を欠いた下端を尖らせる縦長剥片のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 33		(6.2)	2.4	0.8	頁岩	完形、平面石鏃状、頭部に太い基部風の軸のつくナイフ。
スクレイパー	916 - 34		5.8	2.4	(0.85)	頁岩	完形、平面石鏃状、頭部に太い基部風の軸のつくナイフ。
スクレイパー	916 - 35		5.8	1.7	0.6	頁岩	不定形縦長剥片のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 36		5.5	2.8	0.7	チャート	完形の石ベラ、刃部は下縁で周縁刃部は両面調整。
スクレイパー	916 - 37		(5.9)	1.9	0.6	頁岩	完形、端部を再加工、縦長剥片のナイフかスクレイパー。
スクレイパー	916 - 38		(6.9)	2.9	0.4	頁岩	完形、縦長のナイフ。
スクレイパー	916 - 39		6.8	2.2	0.6	頁岩	完形、縦長剥片のUF。
スクレイパー	916 - 40		6.6	2.4	0.6	頁岩	完形、縦長剥片の下端を尖らせるスクレイパー。
スクレイパー	916 - 41		6.6	2.0	0.5	頁岩	完形、つまみ付ナイフ、縦長剥片の下端を尖らせている。
スクレイパー	916 - 42		6.9	2.1	0.7	頁岩	完形、縦長剥片の下端を尖らせるスクレイパー。
スクレイパー	916 - 43		6.4	2.8	1.1	頁岩	完形、縦長剥片のUF。
スクレイパー	916 - 44		6.8	3.7	0.45	頁岩	靴形石器。完形で小型のナイフ形。
スクレイパー	916 - 45		7.7	3.1	0.95	頁岩	縦型剥片のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 46		6.8	2.4	0.8	頁岩	縦型剥片のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 47		(5.1)	3.6	0.7	頁岩	頭部を欠くバチ形の靴形石器。
スクレイパー	916 - 48		5.7	3.7	0.9	頁岩	右半分が欠失した木葉形のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 49		4.2	3.8	0.7	頁岩	基部あるいは軸部を欠く靴形石器。
スクレイパー	916 - 50		5.1	1.8	0.4	頁岩	長軸(柄)の頭部を欠く、断面三角素材のナイフかスクレイパー。
スクレイパー	916 - 51		5.9	4.1	0.9	頁岩	完形、バチ形の石ベラ。
スクレイパー	916 - 52		4.7	2.3	0.7	頁岩	長軸(柄)の頭部を欠く。断面三角の素材を利用したナイフ。
スクレイパー	916 - 53		6.2	3.1	0.4	頁岩	完形、木葉形のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 54		4.7	1.5	0.8	頁岩	頭部を欠く、縦長で断面三角の厚みのある素材を利用したナイフ。
スクレイパー	916 - 55		4.2	5.2	1.0	頁岩	不定形剥片を利用したUF。
スクレイパー	916 - 56		5.2	4.7	1.3	チャート	幅広の剥片を利用したスクレイパー。
スクレイパー	916 - 57		6.2	3.2	1.2	頁岩	完形、木葉形のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 58		7.0	3.8	0.6	頁岩	完形、木葉形のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 59		6.7	3.2	1.1	頁岩	ほぼ完形、下縁がU字状となる石ベラ。
スクレイパー	916 - 60		7.4	3.2	1.8	頁岩	縦長剥片の一辺に刃部を付けたスクレイパー。
スクレイパー	916 - 61		8.2	3.5	0.45	頁岩	ナイフ形の靴形石器。
スクレイパー	916 - 62		7.6	3.2	0.47	頁岩	縦長のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 63		7.5	4.2	1.11	頁岩	完形、木葉形のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 64		7.4	4.3	0.95	頁岩	完形、縦長のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 65		5.2	1.6	1.2	頁岩	小型、長軸の頭部を欠く、ナイフ。
スクレイパー	916 - 66		8.5	4.2	1.3	頁岩	完形、バチ形の石ベラ。
スクレイパー	916 - 67		8.7	4.3	0.7	頁岩	完形、木葉形の摘みのついたスクレイパー。
スクレイパー	916 - 68		8.9	2.9	1.3	頁岩	完形で断面三角の素材を利用したナイフ。

目録器種	目録番号	枝	長 (cm)	幅 (cm)	厚高 (cm)	石質	備 考
スクレイパー	916 - 69		9.2	3.4	0.6	頁岩	縦長のつまみ付ナイフ。
スクレイパー	916 - 70		8.7	3.7	1.6	頁岩	縦長剥片の石ベラ。
スクレイパー	916 - 71		9.4	3.3	0.8	頁岩	縦長剥片のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 72		9.8	3.4	0.9	頁岩	縦長剥片のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 73		13.2	5.9	1.5	頁岩	完形、木葉形のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 74		11.7	6.2	2.0	チャート	完形のスクレイパー。
スクレイパー	916 - 75		5.2	2.5	0.5	頁岩	小型でバチ形の石ベラ。
スクレイパー	916 - 76		3.6	2.1	0.35	頁岩	完形、小型、バチ形の石ベラ。
スクレイパー	916 - 77		6.7	3.0	1.0	頁岩	ほぼ完形、バチ形の石ベラ。
環状磨製石斧	917 - 1		14.8	10.2	1.8	安山岩	完形、環状磨製石斧。
環状石斧未製	918 - 1		13.1	9.6	3.3	頁岩	未成品？破損品か。
磨製石斧	919 - 1		7.8	13.5-12.8	1.1	緑色泥岩	完形の小型の石斧。
磨製石斧	919 - 2		10.8	4.8	2.4-2.2	緑色泥岩	基部を欠く、大型の石斧、短冊形。
磨製石斧	919 - 3		5	2.5	1.0-0.8	緑色泥岩	ほぼ完形のごく小型の石斧または石ノミ。
磨製石斧	919 - 4		8.4	3.7-1.2	1.7-1.1	黒色片岩	完形、小型の石斧か石ノミ、最大幅は刃先、基部小さいバチ形。
磨製石斧	919 - 5		8	4.2-3.1	1.0-1.2	緑色泥岩	完形、小型。平面形つりがね形、厚さは薄い、刃部は片刃。
磨製石斧	919 - 6		11.4	4.3-3.4	1.6-1.1	蛇紋岩	完形、中型。平面形は細いつりがね形。断面レンズ状に膨らみ。
磨製石斧	919 - 7		9.6	3-1.06	1.2-0.9	粘板岩	身幅が狭い小型の石斧または石ノミ、ほぼ完形。
磨製石斧	919 - 8		3.7	1.6-1.1	0.4	緑色泥岩	完形、ごく小さな石ノミ、厚さはごく薄い、両刃。
磨製石斧	919 - 9		(5.7)	3.4	1.1	緑色泥岩	下半欠失、小型の石斧、平面短冊形。
磨製石斧	919 - 10		5.9	3.1-2.2	1.4-1.2	緑色泥岩	完形、小型、厚さ均質、腹面は平滑、刃幅1.9cm、立面丸ノミ状。
磨製石斧	919 - 11		5.8	4-3.1	0.9-1.4	緑色泥岩	再加工作品か、平面形はつりがね形、両刃、基部には多くの打痕。
磨製石斧	919 - 12		6.9	3.6-2.1	0.8-0.7	緑色泥岩	完形、平面バチ形、腹面平坦、背面レンズ状、片刃で刃先弧状。
磨製石斧	919 - 13		6.3	4.3-2.7	0.9-0.8	粘板岩	基部欠、刃幅2.2cm、刃先弧状で立面丸ノミ状、切分けか再加工作品。
磨製石斧	919 - 14		7.1	3.6-2.8	1.0-0.9	片岩	短冊状、厚さは均質で薄い。腹面はレンズ状、刃長は1.7cmで片刃。
磨製石斧	919 - 15		7.3	4.2-3.3	1.1-0.7	粘板岩	基部欠失、小型の石斧、平面形バチ形、刃幅2.3cm。
磨製石斧	919 - 16		6.6	3.6-2.8	1.4-1.0	緑色泥岩	平面つりがね形、両刃、刃先が1.0cmと急角度、基部には打痕。
磨製石斧	919 - 17		7.3	3.7-3.5	1.6-1.2	緑色泥岩	両側縁と基部に打ち欠きと敲打痕、修復途中、刃部は両刃。
磨製石斧	919 - 18		7.2	4.3-1.2	1.8-1.6	緑色泥岩	再加工作品のための取り置き品、基部を欠失した小型の石斧。
磨製石斧	919 - 19		7.8	4.7-3.6	1.9-1.4	片岩	完形の小型石斧または手斧。
磨製石斧	919 - 20		8.2	4.4-3.6	1.8-1.3	片岩	平面短冊状、刃長2.4cm、片刃、刃先は平面弧状、立面は丸ノミ状。
磨製石斧	919 - 21		8.1	4.2-2.9	0.9-0.8	片岩	被熱、片刃、刃長1.8、刃先やや弧状、薄く均一。
磨製石斧	919 - 22		8.6	3.8-3.4	0.9-1.2	緑色泥岩	破損品の取り置きか再利用品、小さな台形状の基部。
磨製石斧	919 - 23		8.4	3.4-2.2	1.6-1.4	桂化木	片刃、細工用のノミ。
磨製石斧	919 - 24		8.6	2.6-0.6	0.6-0.8	安山岩	片刃、再利用品。
磨製石斧	919 - 25		9.9	2.2-2.9-1.2	1.0-1.2	桂化木	平面細く全体は柳葉状、軸の中央に最大幅、縦断面はレンズ状。
磨製石斧	919 - 26		11.3	2.2-1.3	1.5-0.8	粘板岩	石剣破片。
磨製石斧	919 - 27		9.5	3.8-2.7	1.8-1.4	緑色泥岩	平面バチ形、両側面に敲打痕 抜け防止か。刃部は片刃。
磨製石斧	919 - 28		10.8	4.6-3.6	1.7-1.4	緑色泥岩	完形、平面短冊形、片刃で刃先は弧状。
磨製石斧	919 - 29		9.2	5.4-2.2	1.7-1.7	緑色泥岩	完形、平面バチ形、刃幅広く、基部が狭く小さい。
磨製石斧	919 - 30		10.1	4.8-1.2	2.4-2.4	緑色泥岩	完形、バチ形、片刃。
磨製石斧	919 - 31		11.4	(3.8) -1.6	2.7-1.4	緑色泥岩	刃先の一部を欠く、平面形状は長いバチ形。
磨製石斧	919 - 32		12.3	6.0-6.0	2.4-2.7	緑色泥岩	大型の祖製品、平面は刃幅が最大となる短冊形、刃部は片刃。

目録器種	目録番号	枝	長 (cm)	幅 (cm)	厚高 (cm)	石質	備 考
磨製石斧	919 - 33		4.9	2.1-1.4	8-8	緑色泥岩	完形、小型でバチ形、片刃。
磨製石斧	920 - 1		(7.2)	4.6- (3.1)	1.9-1.4	片麻岩	破損品の再加工品。
磨製石斧	920 - 2		14.6	(5) -2.5	3.1-2.4	片麻岩	左側刃部破損、短冊形の大型の片刃石斧。
磨製石斧	920 - 3		12.7	4.7-3.7	2.3-1.7	片麻岩	刃部破損。
磨製石斧	920 - 4		(10.9)	4.1-3.9	2.4-1.9	片麻岩	刃部・基部破損、片刃。
磨製石斧	920 - 5		(8.9)	5.6	2.2-2.1	片麻岩	黒色片麻岩製で基部欠損、片刃。
磨製石斧	920 - 6		(7.8)	4.3-3.8	1.5-2.0	片麻岩	両刃で刃部打ち欠き。
磨製石斧	920 - 7		(6.6)	3.5-2.7	2.2-1.8	緑色泥岩	石斧基部の残片、先端を切つてあることから再加工品の可能性。
擦切石斧	921 - 1		8.4	3.3-1.5	1.4-0.8	緑色泥岩	完形、小型。平面形つりがね形、厚さは薄い、刃部は片刃。
擦切石斧	921 - 2		(7.8)	5.4-4.2	1.7-1.6	緑色泥岩	軸で折れ、背に擦切り痕、再加工品か。
擦切石斧	921 - 3		(12.2)	6.4	2.4	緑色泥岩	大型石斧の軸部、再加工品。
擦切石斧	921 - 4		12.7	3.4	0.7	緑色泥岩	完形、大型石斧の再加工品、左側面に擦切り痕、片刃。
擦切石斧	921 - 5		10.9	4.2	3.4	緑色泥岩	再加工用材料、擦切り痕2条、全面に敲打痕がある。
擦切石斧	921 - 6		10.2	5.6	3.8	黒色片岩	完形、中型、平面形バチ形、腹面に擦切り痕1条。
擦切石斧	921 - 7		(7.45)	4.1	2.0	緑色泥岩	残片。
擦切石斧	921 - 8		(7.5)	2.1	2.1	緑色泥岩	残片。
独鈷石	922		(15.7)	4.8	3.4	安山岩	ほぼ完形、先端わずかに欠く、敲打で基部整形。
魚形石器	923		7.7	1.5	0.7	砂質泥岩	ミニチュアか。
魚形石器	924		14.4	2-0.7	0.9	粘板岩	完形で身は薄く小型。全面に研磨痕完形
魚形石器	925		15.2	3.2	0.7	粘板岩	完形で身は薄く小型。全面に研磨痕完形。
魚形石器	926		18.0	4.4	3.9	砂質泥岩	完形の魚形石器、中型でやや腹の膨れた鏢節型。
魚形石器	927		(15.9)	3.8	4.0	泥岩	鏢節型で頭部の糸掛け部分と尾部に剥落痕と打ち欠けがある。
魚形石器	928		(16.8)	3.9	4.1	泥岩	鏢節型で尾部に打ち欠け、頭部の腹面は接合用平坦面。
魚形石器	929		18.80	3.50	3.00	砂質頁岩	中型でほぼ完形。尾部溝から先が欠ける。腹が膨れない細身の鏢節形。
魚形石器	930		16.00	3.80	3.80	砂質頁岩	完形の魚形石器。小型で短く腹の膨れた鏢節形。
魚形石器	931		20.50	4.20	3.20	砂質泥岩	完形、中型で胴に長さがあり、腹のあまり膨れない鏢節形。
魚形石器	932		(22.20)	4.30	3.70	砂質頁岩	ほぼ完形。わずかに鼻先が欠ける。腹が膨れない細身の鏢節形
魚形石器	933		23.40	4.10	3.90	砂質頁岩	大型でほぼ完形、鏢節形で、断面は卵形。頭部の腹面に接合面。
魚形石器	934		22.50	4.00	3.00	砂質頁岩	大型で完形、鏢節形弱、環状刻溝、朱彩、副葬品。
魚形石器	935		18.30	3.80	2.60	砂質頁岩	中型で完形、細身の鏢節形、全面に朱彩。副葬品とみられる。
魚形石器	936		14.30	3.20	2.30	粘板岩	完形、小型、副葬品か。
魚形石器	937 - 1		(12.9)	3.20	2.9	砂質頁岩	一端欠く、小型、両錘形。
魚形石器	937 - 2		(13.4)	3.3	2.4	砂質頁岩	石剣か両錘形か、先端に付着物、被熱。
魚形石器	937 - 3		26	3.90	3.20	砂質頁岩	940と接合、新940。
魚形石器	937 - 4		(9.5)	2.5	2.4	砂質頁岩	石剣か両錘形か。
魚形石器	937 - 5		(6.3)	(3.0)	(1.0)	砂質泥岩	頭部破片。
魚形石器	938 - 1		(20.7)	3.4	4.2	砂質泥岩	石棒か、朱彩。
魚形石器	938 - 2		(14.6)	3.60	2.80	砂質泥岩	石棒か、両錘形、全面朱彩。
魚形石器	939 - 1		(16.5)	(3.4)	(3.8)	砂質泥岩	両端欠く、頭部の作り出しと刻線、被熱。
魚形石器	939 - 2		(8.5)	-	-	砂質頁岩	石棒か、両端を欠、中央に円形孔。
魚形石器	939 - 3		(14.6)	3.60	2.80	砂質泥岩	両端を欠く、朱彩痕。
魚形石器	939 - 4		(15.4)	3.40	2.60	砂質頁岩	両端欠く、両錘形、朱彩。
抉入棒状石器	940		26	3.90	3.20	粘板岩	937-3と接合、新940。
槌形磨製石斧	941		5.70	7.50	2.80	片岩	被熱、円柱状、朱多量に付着。
石棒	942		(21.6)	2.6	2.3	黒色片岩	一端残る、先端の断面は円形、胴部は楕円形、両側穿孔。

〈研究ノート〉サイベ沢遺跡出土の円筒土器 を考える（1）

福田 裕二

1. はじめに

市立函館博物館では、北海道の円筒土器文化を代表するサイベ沢遺跡出土資料を数多く収蔵している。これらのうち、昭和24年出土資料は、層位学的調査に基づく「サイベ沢式土器」の標識資料として重要なもので、その一部は北海道有形文化財に指定されている。

本調査以降、サイベ沢式土器については、吉崎昌一氏や高橋正勝氏ら数々の研究者により先行研究が進められてきたが、一方では研究者ごとに見解や解釈の相違を生じている。また、円筒土器編年と混在して使われていることもしばしば見受けられる。

そこで本稿では基礎資料である昭和33年（1958年）に刊行された報告書⁽¹⁾の内容に絞って振り返り、北海道における円筒土器の型式分類を再考する嚆矢としたい。

2. 遺跡と調査の概要

サイベ沢遺跡は、函館市北西部の函館平野に面した標高約20～30mの常磐川左岸の桔梗台地の西縁部に位置し、北海道を代表する縄文時代の大規模な集落跡で面積は18万㎡以上にのぼる。明治中頃からその存在は知られており、戦前には幾人もの研究者による小規模な調査が行われ貝層や人骨なども見つかっており、その重要性が注目されていた。博物館には戦前に収集された児玉コレクションや採集資料なども数多く収蔵している。

戦後間もない昭和23年（1948年）に市立函館図書館から新たに市立函館博物館とし



写真 昭和24年調査当時の遺跡近景

（市立函館博物館所蔵）

て設置した記念事業として、翌24年に北海道大学教授の児玉作左衛門氏と助手の大場利夫氏らの指導のもとで学術調査が行われた。調査は層位学的な観点から調査が行われ、その結果を踏まえて総括の中で縄文時代前期から中期にかけて7層の文化層に大別し、それぞれ出土土器の特徴をまとめているが、この段階で「サイベ沢式」の名称は用いていない。

3. 土器の層位的出土状況

昭和24年の発掘調査は、サイベ沢（現常磐川）に面した急斜面付近に第一地点、第二地点の二か所の調査区を設定して層位学的な調査が行われた。第一地点では地表から基盤となる砂層まで深さ4.5m以上で25層に及ぶ堆積層を、第二地点においても深さ約4mで22層に及ぶ堆積層を確認した。通常の包含層としては異例の深さであり、報告書によると、前北海道大学工学部名誉教授（当時）の福富忠男博士の所見として、

地表から6層以上では横津岳の崩壊時代における火山灰による風成土、6層以下では水成運搬土による堆積としている。しかし、膨大な遺物の出土状況や三内丸山遺跡をはじめ各地の円筒土器文化期の遺跡の調査例から鑑みると、現在の視点では自然の営力によるものではなく、斜面に形成された人為的な「盛り土」と捉えることができ⁽³⁾、層位的な調査に関する評価にも繋がる重要な案件であるが、この件については別稿に譲りたい。

4. 第五章における文化層ごとの土器

報告書第五章の総括では、第一地点における層位的調査の結果として下表のような編年を示している。

各文化層出土土器については次の引用のとおり記述されているが、私見を交えて触

上層式 { VII文化層(4—2層)…上層3
VI文化層(5層)…上層2
V文化層(14—7層)…上層1

下層式 { IV文化層(16—15層)…下層4
III文化層(18層)…下層3
II文化層(21—20層)…下層2
I文化層(22層)…下層1

表 第一地点における文化層の層序と編年⁽⁴⁾

れてみたい。なお、ここでは円筒土器の型式分類は村越1984の分類を基本とした。⁽⁵⁾

(1) 第I文化層 (図2A)

「土器の形態は、円筒形か尖底またはこれらに近い形態で、胎土に植物性繊維を含み、器はやや厚い。口頸部と体部の形態の分化は不明瞭であるが、口縁上には軽い山形口縁が見られる。文様は体部にやや荒い斜行縄文が斜に附され、口頸部には撚糸文的縄目文が附される。⁽⁶⁾」と説明している。

図示されている土器は胴部(体部)がやや張る器形だが、器面全体に地文が施文された上から押厚縄文による幅広の文様帯を有しており、円筒下層c式とみられる。

(2) 第II文化層 (図2B・C)

「土器の形態は、円筒形平底で、胎土に植物性繊維を多量に含み器、は非常に薄い。口頸部と体部の形態の分化は不明瞭であるが、分化の徴が見える。口縁は水平口縁が多いが、山形小突起が出現している。文様

(左高さ推定30cm 口径推定20.5cm 厚さ1cm、右高さ29cm 口径19.2cm 底径11cm 厚さ0.8cm)

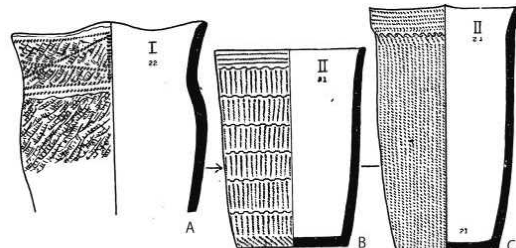


図2 第I及び第II文化層出土土器⁽⁷⁾

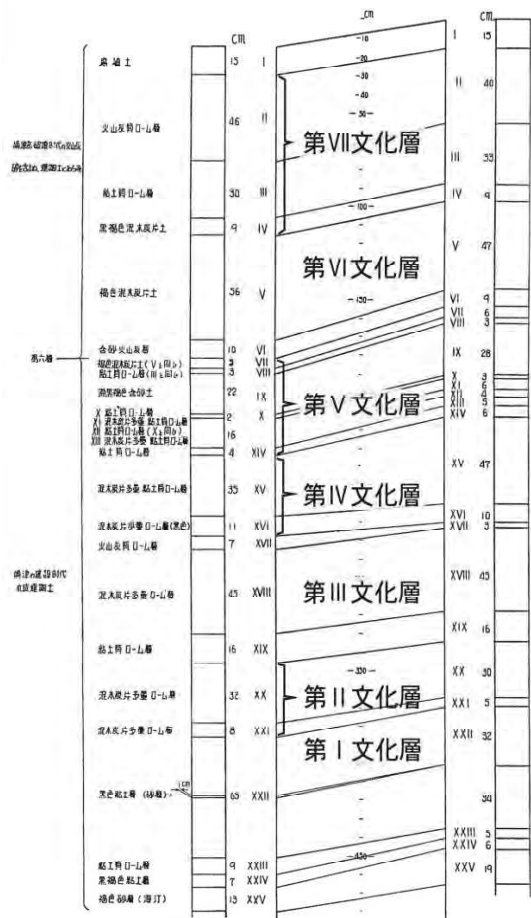


図1 第一地点の土層模式図⁽²⁾

は体部に繊維な撚糸文的縄文が縦行して附されるが、次第に横に刻線が混り碁盤状の文様に移行する。口頸部には撚糸文的縄目文が附される。⁽⁸⁾」と説明している。

図2Bの土器は口縁部文様帯が狭く、均整のとれた円筒形で円筒下層d1式に比定される。一方、図2Cの土器は広めで段状に肥厚する文様帯があり、円筒下層d1式よりもd2式に近いものとみられる。

(3) 第III文化層 (図3A・B)

「土器の形態は、円筒形平底で、胎土に植物性繊維を含み、器は前層よりもやや厚くなり、器形も大きくなる。口頸部と体部の形態の分化はわずかに現れている。口縁部には山形小突起が見られる。文様は体部にやや荒い連点状に表現された縄文(筆者注；多軸絡条体)が附され、口頸部には撚糸文的縄目文が附されて、口頸部と体部との文様が明らかに分化している。⁽⁹⁾」と説明している。

これらの土器はいずれもその特徴から、円筒下層d2式に比定されるとみられる。

(4) 第IV文化層 (図3C)

「土器の形態は、円筒形平底で、胎土に植物性繊維を含み、器はやや厚い。口頸部と体部の形態の分化は著明になる。口縁部には山形小突起がみられる。文様は体部にやや荒い撚糸文的縄目文が縦行して附され

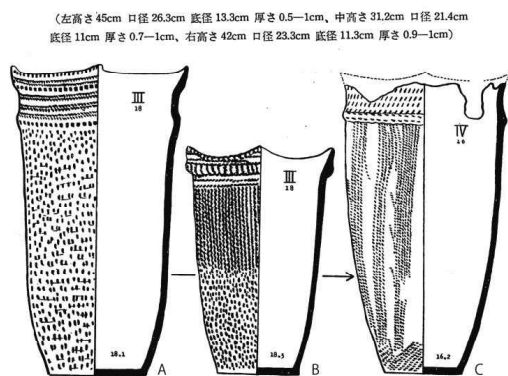


図3 第III及び第IV文化層出土土器⁽¹⁰⁾

るが、次第に斜行縄文も現われる。口頸部には撚糸文的縄目文が附されている。⁽¹¹⁾」と説明している。

図示されている土器は円筒下層d2式に比定されるとみられ、第III文化層との顕著な相違は窺えず、時期や型式分類上は第III文化層と大差が無いと考えられる。

(5) 第V文化層 (図4A)

「土器の形態は、口の開いた筒形平底で、胎土には植物性胎土を殆ど含まず、砂粒、小石を多く含んでいる。器の厚さは非常に厚く、器形も大になる。口頸部と体部の文化は著明で、口頸部は強く外弯している。口縁上の山形突起は雄大になる。文様は体部には斜行縄文または羽状縄文が附され、口頸部には擬縄帯が貼附されて、いわゆる結縄文様をなし、文様の主体が口頸部に移っている。⁽¹²⁾」と説明している。

説明文では触れていないが、本図で示されている土器は文様帯に馬蹄形圧痕文が施文され太めの粘土紐(擬縄帯)が貼付され、円筒上層b式に比定されるとみられる。

(6) 第VI文化層 (図4B)

「土器の形態は円筒形平底で、胎土に植物性繊維を含まず、砂粒、小石を含む。器の厚さは厚い。口頸部の形態の分化は著明

(左高さ54.8cm 口径40.8cm 底径18.6cm 厚さ1-2cm、右高さ23.4cm 口径23.1cm 底径9.3cm 厚さ0.8-1.2cm)

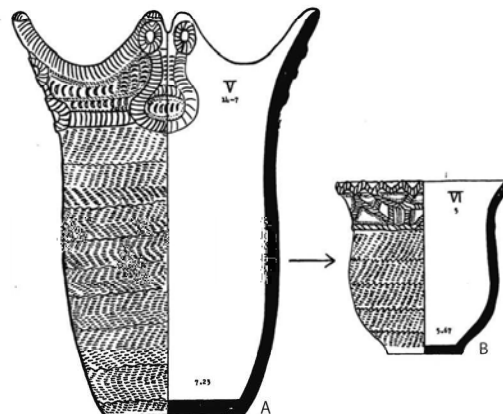


図4 第V及び第VI文化層出土土器⁽¹³⁾

で、口縁上には山形突起が見られるが、水平口縁のものも見られる。文様は体部に羽状縄文または斜行縄文が附され口頸部には擬縄帯が貼附される。また口頸部には刻線文または刻文も附される。⁽¹⁴⁾と説明している。

図示されている土器は平縁で、口縁部には波状に粘土紐が貼付される。文様帯は前掲に比べてやや広がり、やや細い粘土紐が鋸歯状に貼付される。刻文としている半裁竹簡による連続刺突文は、円筒上層c式に比定されるとみられる。

(7) 第七文化層 (図5)

「土器の形態は、口の開いた円筒形平底で、胎土に植物性繊維を含まず、砂粒、小石を含む。器の厚さは次第に薄くなり、大いさはやや小さくなる。口頸部の形態の分化は著明である。口縁上の山形突起は次第に小さくなる。文様は体部、口頸部を通じて斜行縄文が地文的に附される。口頸部には更に細い粘土帯（粘土帯上を押し刻していない）が附されるが、これに代って刻線文を刻むものも見られる。而して口頸部の文様は次第に体部にまで下って施されている。また無文のものも見られる。⁽¹⁵⁾」と説明している。

図示されている土器のうち、Aは地文のみで口縁には小突起とその直下にボタン状の粘土の貼付けがみられ、Bは山形口縁だが前型式の円筒上層c式の弁状突起と比べ

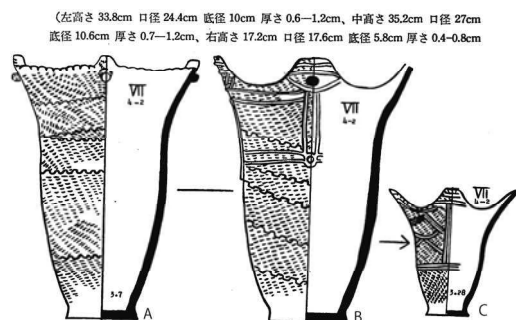


図5 第七文化層出土土器⁽¹⁶⁾

て小振りである。器面全体に斜行縄文を施文した上から細い粘土紐による広い文様帯が区画される。Cはさらに小さな山形口縁で、中央の粘土紐が沈線文（刻線文）に置き換わって胴下半部にまで広がる文様帯を形成している。いずれの土器も底部は小さくなり張り出しがある。これらのうちAとBは円筒上層d式に相当し、Cは村越氏の円筒上層e式（江坂輝弥氏の上層f式）に相当するとみられる。

5. 課題

以上、文化層ごとの土器を振り返ってみたが、上述の各文化層の土器変遷については「第一文化層の土器は円筒式土器文化の母体であるが、縄文早期の住吉町式あるいは春日町式土器との形態との類似的を指適できる程度に、円筒式文化らしからぬ様態のもの⁽¹⁷⁾」とし、続く第二文化層以降については「土器は前層のものとは異なって極めて繊細華麗な独特な円筒下層式文化を確立している。これが第三文化層、第四文化層（第三文化層と第四文化層は殆ど同一文化相で一括される）と次第に発展して、第五文化層に入り、雄大にして雄渾な円筒上層式文化に移行し盛行しているが、（中略）第七文化層に入り、円筒式文化は次第に衰退して、器形も文様も粗雑になり、やがて円筒式文化は本来の姿を消失するが、次期文化萌出の徴が現れてくる。⁽¹⁸⁾」とまとめている。

このように本調査から北海道における円筒土器の編年観を示したことは大きな成果であり、その後の道内における縄文前期から中期のメルクマールとなったことは間違いなく、これに基づいて吉崎昌一氏により「サイベ沢式土器」編年が提唱され、道南各地の遺跡から出土する円筒土器の編年が示された。⁽¹⁹⁾しかしその後の調査例が増加するにつれて、先述のように「サイベ沢式」

の捉え方が研究者によって異なり、円筒土器編年との対比にも齟齬を生じているのが現状である。その要因の一つとして、総括で示された内容と第四章に掲載された各層の土器に関する拓影図や記述が異なっていることが挙げられる。次回は第四章に掲載されている各層出土資料を紹介しながら総括の内容と比較検討し、サイベ沢出土土器の編年についてあらためて考察したい。

最後になるが、博物館で当時の資料を公開しているのは一部であり、出土資料の大部分はこれまで外部収蔵庫でまさしく「お蔵入り」していたが、令和5年(2023年)にこれらの資料を別の施設に移送する機会があった。中身を確認したところ、160箱もの木箱に多量の土器を中心にほぼびっしりと遺物が納められていた。これだけの分量は一朝一夕に再整理できるものではないが、これらをあらためて調査研究することにより、当時は明らかにされなかった新たな知見が得られる可能性が高く、今後の研究の深化に繋がることを期待される。

引用・参考文献

- (1) 大場利夫ほか, 1958, 『サイベ沢遺跡-函館郊外桔梗村サイベ沢遺跡発掘報告書』市立函館博物館。(以下、『1958 サイベ沢遺跡』)
- (2) 『1958 サイベ沢遺跡』:5, 第33図を一部改変
- (3) 福田裕二, 2011, 「北海道における盛土遺構研究の現状～道南地方を中心として～」『2011年度研究大会資料 北海道の縄文研究の今』:11-22, 北海道考古学会.
- (4) 『1958 サイベ沢遺跡』:68, 表「円筒土器文化の層序」
- (5) 村越潔, 1984, 『増補 円筒土器文化』考古学選書10, 雄山閣。(初出は1974)
- (6) 『1958 サイベ沢遺跡』:68, 10-12行
- (7) 『1958 サイベ沢遺跡』:69, 第89図を一部改

変

- (8) 『1958 サイベ沢遺跡』:68, 13-15行
- (9) 『1958 サイベ沢遺跡』:68, 15-18行
- (10) 『1958 サイベ沢遺跡』:69, 第90図を一部改変
- (11) 『1958 サイベ沢遺跡』:68, 18- 71, 1行
- (12) 『1958 サイベ沢遺跡』:71, 2-5行
- (13) 『1958 サイベ沢遺跡』:70, 第91図を一部改変
- (14) 『1958 サイベ沢遺跡』:71, 5-7行
- (15) 『1958 サイベ沢遺跡』:71, 7-11行
- (16) 『1958 サイベ沢遺跡』:70, 第92図を一部改変
- (17) 『1958 サイベ沢遺跡』:71, 12-13行
- (18) 『1958 サイベ沢遺跡』:71, 14-18行
- (19) 吉崎昌一, 1965, 「縄文文化の発展と地域性」『日本の考古学2 縄文時代』:30-63, 河出書房新社.

その他主な参考文献

- 高橋正勝, 1981, 「北海道南部の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』:10-20, 雄山閣.
- 高橋正勝, 1994, 「サイベ沢式土器」『縄文時代研究事典』:284-286, 東京堂出版.
- 熊谷仁志, 2001, 「北海道の縄文土器」『新北海道の古代1 旧石器・縄文文化』:138-177, 北海道新聞社.

(市立函館博物館学芸員)

市立函館博物館 研究紀要 第34号

編集・発行 市立函館博物館

040-0044 函館市青柳町17-1

TEL 0138-23-5480 FAX 0138-23-0831

HP <http://hakohaku.com>

E-mail hakohaku@city.hakodate.hokkaido.jp

発行日 令和6(2024)年3月31日